春蘿秋桂莫惆悵(一)。　春蘿秋桂惆悵する莫れ、
縱有浮名不繫心。　縱ひ浮名有るも心を繫がず。

【題義】及第してから後故郷を憶つて作つた詩である。

【詩意】司馬相如が子虛の賦を獻じたやうに自分も賦を獻じて首尾よく及第はしたが、却つて招隱の詩を吟じて舊林に歸隱したく思つてゐる。山中の蘿や桂よ決して悲むには及ばぬ。たとひ浮名は吾が身を纏ふとも、吾が心までは繫ぎ留めることはないから、遠からず俺も舊山に歸るから。

【字解】【一】鳴鳳管　簫をいふ。

【二】招隱　淮南小山の作りし詩。楚辭に見ゆ。

【三】惆悵　悲むこと。

題李次雲窓竹

李次雲が窓竹に題す

不用裁爲鳴鳳管(一)。　裁りて鳴鳳の管と爲すを用ひず、
不須截作釣魚竿。　截りて釣魚の竿と作すを須ひず。
千花百草凋零後。　千花百草凋零して後、
留向紛紛雪裡看。　留めて紛紛たる雪裡に向つて看ん。

【題義】李次雲が家の窓前の竹に題した詩である。

【詩意】伐つて簫にしたり、釣竿にしたりせずともよい。すべての花や草が枯れた後まで留めて置いて、雪の紛紛と降りそそぐ時の觀物にしよう。

花下自勸酒

花下自ら酒を勸む

酒盞酌來須滿滿。　酒盞酌み來つて須らく滿滿たるべし、
花枝看卽落紛紛。　花枝看れば卽ち落ちて紛紛たり。
莫言三十是年少。　言ふ莫れ三十是れ年少と、
百歲三分已一分。　百歲三分して已に一分。

【題義】花の下で自ら酒を勸めた詩である。

【詩意】須らく杯に酒をなみなみとついで來い。早くせぬと忽ち花が散つてしまふ。三十はまだ年少だなどと云つてはいけない。既に一生の三分の一を過ぎてしまつたではないか。

【字解】【一】百歲　人の一生をいふ。

題李十一東亭

李十一の東亭に題す

相思夕上松臺立。　相思うて夕に松臺に上つて立てば、
蛩(一)思蟬聲滿耳秋。　蛩思蟬聲耳に滿つる秋。
惆悵東亭風月好。　惆悵す東亭風月の好きを、
主人今夜在鄜(二)州。　主人今夜鄜州に在り。

【字解】【一】蛩思　こほろぎの思。

【二】鄜州　陝西省の地名。

【題義】李十一（名は建、字は杓直）の東亭に題した詩である。

【詩意】君を思ふの情に堪へず、夕に松臺に上つて立てば、蛩の聲や蟬の聲が耳に滿ち、いやが上にも愁思を深くした。且この東亭の風月の好い今夜、君が郿州に往つて不在なのが最も惆悵するに足る。

春村

二月村園暖。桑間戴勝飛。
農夫春舊穀。蠶妾擣新衣。
牛馬因風遠。鷄豚過社稀。
黄昏林下路。鼓笛賽神歸。

【字解】【一】戴勝　鳥の名、羽に文彩あり、春暮田野に棲む。【二】因風　風はさかりのつくこと。【三】社　春社。春分前の戊の日、この日后土を祀る。

【題義】春の農村の景況を述べた詩である。

【詩意】二月になつて田園も暖かくなり、桑の間に戴勝が飛び、農夫の米を春き蠶妾の春衣を擣つ聲があちこちに聞え、牛馬は牝を追ひまはして遠方に奔逸し、雞豚は社日を過ぎて少くなつた。夕暮に林下の路を過ぐれば、太鼓や笛を吹いてお祭をしてゐるのが見える。

題施山人野居

得道應無著。謀生亦不妨。
春泥秧稻暖。夜火焙茶香。
水巷風塵少。松齋日月長。
高閑眞是貴。何處覓侯王。

【字解】【一】著　物事に執著すること。【二】秧稻　根分けして植ゑた稻。【三】焙茶　はうじた茶。【四】松齋　松間の書室。

【題義】施山人（施は姓）の野居に題した詩である。

【詩意】山人は道を悟つてゐるから物事に執著しない。だから生計を謀つても厭味がない。晝は泥田の稻の暖かさうなのを眺め、夜は爐を圍んで茶を焙じて飲む。水邊に在るので埃が少く、松の下に在るので閑靜である。かくの如く高尚で閑靜な生活を占めてゐるのは誠に貴ぶに足る。何も王侯の貴さなどを覓めるには當らない。

白樂天詩集　卷十四

律詩　五言七言　凡九十六首

翰林中送獨孤二十七起居罷職出院

翰林中、獨孤二十七起居の職を罷めて院を出づるを送る

(一)翰林中送獨孤二十七起居罷職出院
(二)碧落留雲住。(三)青冥放鶴還。
(四)銀臺向南路。從此到(五)人間。

【字解】【一】翰林　役所の名。翰林院。【二】碧落　天空。【三】青冥　天なり。【四】銀臺　翰林院をいふ。【五】人間　俗世間。

【題義】翰林院で獨孤二十七起居(獨孤は姓、二十七は排行、起居は官名)の職を罷めて院を退くのを送つた詩である。

【詩意】青空に雲鶴を引留めて置いたが、今度それを解放することになつた。(獨孤二十七の職を罷めて去るのに喩ふ)翰林院から南を指して歸り、俗世間に往つて自由の身になるのである。

重尋杏園

重ねて杏園を尋ぬ

忽憶芳時頻酩酊。　忽ち憶ふ芳時頻に酩酊せしことを、
却尋醉處重徘徊。　却つて醉處を尋ねて重ねて徘徊す。
杏花結子春深後。　杏花子を結び春深けて後、
誰解多情又獨來。　誰か解く多情又獨り來る。

【題義】重ねて杏園に遊んで作つた詩である。

【詩意】花の時節に屢〻遊んで酒を飲んだことを憶ひ出し、重ねて杏園に來て其邊をさまよつた。今や花散りて實を結び春も既に深けてしまつたのに、昔を忘れずに尋ねて來る人情の深い男が、我を措いて他に誰があるであらう。

【字解】【一】杏園　長安の西に在り、唐の新進士多く此に遊宴す。
【二】芳時　花の咲く時節。

曲江獨行

自此後詩、在翰林時作。

此より後の詩は、翰林に在りし時に作る。

獨來獨去何人識。　獨り來り獨り去る何人か識る、
廐馬朝衣野客心。　廐馬朝衣野客の心。
閒愛無風水邊坐。　閒に風なきを愛して水邊に坐すれば、
楊花不動樹陰陰。　楊花動かず樹陰陰たり。

【題義】曲江のあたりを獨りで遊びあるいたことを述べた詩である。

【詩意】獨りで來て獨りで去るので誰も道連などはない。馬に乘り官服を著てはゐるが心は野人と同じである。風のないのを愛して水邊に坐すれば、楊花が微動だにせず樹が陰陰と茂つてゐる。

【字解】【一】曲江　長安の東南に在る池の名。都人遊賞の地。
【二】野客　野人。官吏でない人。
【三】陰陰　茂る貌。

同李十一醉憶元九

李十一と同じく醉うて元九を憶ふ

花時同醉破春愁。　花時同醉春愁を破る、
醉折花枝當酒籌。　醉うて花枝を折りて酒籌に當つ。
忽憶故人天際去。　忽ち憶ふ故人天際に去るを、
計程今日到梁州。　程を計るに今日梁州に到らん。

【題義】李十一（名は建、字は杓直）と同じく一醉し、旅中に在る元九（名は稹、字は微之）を憶うて作つた詩である。

【詩意】花の下で李建と一緒に酒を飲み春の愁情を霽らさんとし、醉うて花枝を折つて酒籌に當てなどして樂んだ。ふと元微之が使命を帶びて遠方に旅してゐるのを憶ひ出した。旅程を算へて見ると今日は梁州あたりへ著いたであらう。

【字解】【一】酒籌　酒の獻酬を定めるクジ。
【二】故人　友人。元稹を指す。
【三】計程　旅程を勘定して見る。梁州は陝西の漢中地方の稱。

【餘論】唐宋詩醇に、意淺く情深し。格調最も王龍標（王昌齡）に近しと評してある。本事詩に「元和四年三月、元微之御史となり、梓潼（四川省の縣名）に鞫獄す。（獄囚を訊問すること）樂天兄弟送別の後旬日、李侍郎建（侍郎は官名）と曲江及び慈恩寺に閒遊し、飲酣して此詩を作る。後旬日、元の書を得たるに、果して是日を以て襃（陝西省漢中府襃中縣）に至る。仍つて詩を寄せて曰く、夢君兄弟曲江頭、也到慈恩院裏遊、驛吏喚人排馬去、忽驚身在古梁州」と。千里神遇符契を合するが若し」とある。亦好話柄となすに足る。

同錢員外題絶粮僧巨川　錢員外と同じく絶粮僧巨川に題す

三十年來坐對山。
唯將無事化人間。
齋時往往聞鐘笑。
一食何如不食閒。

【題義】錢員外（字は蔚章、員外は官名）と同じく斷食僧巨川に題した詩である。

【詩意】此僧は三十年このかた山に對して坐禪をなし、ただ無事を以て人を教化してゐる。食事の合圖の鐘を聞けば、食ふよりは食はぬ方が閒でよいと言つて笑つてゐる。

【字解】【一】絶粮僧　斷食の僧。
【二】化人間　世間の人を教化する。
【三】齋時　食事する時。

絶句。代書贈錢員外　絶句、書に代へて錢員外に贈る

欲尋秋景閒行去。
君病多慵我興孤。
可惜今朝山最好。
强能騎馬出來無。

【題義】書簡の代りに錢員外に贈つた絶句である。

【詩意】秋景色を見に行きたいと思ふが、君は病氣で大儀であらうし、僕も獨遊びでは興がない。今朝の野山の景色はすぐれて好いが、これを賞せぬは惜むべきことだ。病を强めて馬にでも乘つて來てはくれまいか。

晚秋有懷鄭中舊隱

天高風嫋嫋。鄉思繞關河。
晚秋、鄭中の舊隱を懷ふあり
天高うして風嫋嫋たり、鄉思關河を繞る。

寥落歸山夢。殷勤採蕨歌。
病添心寂寞。愁入鬢蹉跎。
晩樹蟬鳴少。秋階日上多。
長閒羨雲鶴。久別愧煙蘿。
其奈丹墀上。君恩未報何。

【字解】【一】鄭中　河南なり。【二】嫋嫋　風の吹く貌。【三】寥落　おちぶれた貌。【四】殷勤　れんごろなる貌。採蕨は伯夷叔齊を學んで蕨を採ること。【五】蹉跎　時を失つて老を嘆ずる貌。【六】煙蘿　煙の罩めた山上の蘿。【七】丹墀　宮闕の稱。

【題義】秋の末に河南の舊隱棲を懷ひて作つた詩である。

【詩意】今や秋も末になり天高く風淋しき時、故郷を思ふ情が山川を繞り、おちぶれて歸る夢を見、隱遁して蕨を採る歌を口ずさみ、病さへ身に添ひて心は益〻さびしく、愁の爲に鬢が白くなつて老衰を嘆いてゐる。夕方になつて樹上に鳴く蟬の聲も稀に、石段の上を照す秋の日も淋しい。雲外に飛ぶ鶴の長く閒なるを羨み、舊山の煙蘿に久しく別れてゐるのを愧ぢる。併し宮闕に奉仕して未だ君恩に報ゆることが出來ないから、官を辭して歸ることも出來ない。

禁中九日對菊花酒憶元九

元九詩云、不是花中偏愛菊、此花開盡更無花。

禁中九日菊花の酒に對し元九を憶ふ　元九の詩に云ふ、是れ花中偏へに菊を愛するにあらず、此花開き盡せば更に花無し。

賜酒盈杯誰共持。賜酒杯に盈つれども、誰と共にか持らん、
宮花滿把獨相思。宮花把に滿ちて獨相思ふ。
相思只傍花邊立。相思うて只花邊に傍うて立ち、
盡日吟君詠菊詩。盡日君が菊を詠ぜし詩を吟ず。

【字解】【一】九日　九月九日、重陽の節句。【二】菊花酒　西京雜記に「菊花舒ぶる時、莖葉を并せ採り、黍米を雜へて之を釀す、來年九月九日に至りて始めて熟す」とある。重陽の日この酒を飲んで災をはらふ。【三】盡日　終日。

【題義】宮中にゐて重陽に遇ひ、菊花の酒に對して元稹を憶ひし詩である。

【詩意】天子樣から頂戴した酒は澤山あるが君がゐなくては飲む氣にもなれず、宮中の菊花を手に把つて唯君を思うた。因つて花邊に傍うて立ち、君の菊を詠じた詩を吟じて一日を空しく暮した。

送王十八歸山寄題仙遊寺

王十八の山に歸るを送り、仙遊寺に寄題す

曾於太白峯前住。曾て太白峯前に於て住し、
數到仙遊寺裏來。數〻仙遊寺裏に到りて來る。
黑水澄時潭底出。黑水澄む時潭底出で、
白雲破處洞門開。白雲破るる處洞門開く。

【字解】【一】寄題　其地に往かずに題詠すること。仙遊寺は寺の名。卷十三に見ゆ。【二】太白峯　陝西省鄠縣の東南に在る。【三】黑水　川の名、書經禹貢篇に、

林間暖レ酒燒二紅葉一。　林間酒を暖めて紅葉を燒き、
石上題レ詩掃二綠苔一。　石上詩を題して綠苔を掃ふ。
惆悵舊遊無二復到一。　惆悵す舊遊復到る無きを、
菊花時節羨二君廻一。　菊花の時節君が廻るを羨む。

黑水西河惟れ雍州とある。

【題義】王十八（名は質夫）の故山に歸るを送り、仙遊寺に寄題した詩である。

【詩意】自分は嘗て太白峯の前に住み、屢〻仙遊寺に遊びに往つた。かの寺は黑水の澄む時節になれば深い潭が底まで見え、白雲の破れてゐる處に洞門が在る。林間に紅葉を焚いて酒を暖め、石上に綠苔を掃つて詩を題しなどして樂んだものであつたが、今は役目に繫られてゐるから舊遊を復びすることが出來ず、ただ菊花の咲く好季節に君の歸るのを羨んでゐるより外はない。

【餘論】平家物語　卷六、紅葉の事に「去んぬる承安の頃ほひは（高倉院）御年十歲ばかりにならせおはしましけん。あまりに紅葉を愛せさせ給ひて、北の陣に小山を築かせ、櫨楓の誠に色美しうもみぢたるを植ゑさせ、紅葉の山と名づけて、ひねもすに叡覽あるに、なほ飽き足らせ給はず。然るを或夜野分はしたなう吹いて、紅葉皆吹き散らし、落葉頗る狼藉なり。殿守の伴の造朝ぎよめすとて、是を悉く掃き捨ててけり。殘れる枝、散れる木の葉をば搔き集めて風すさまじかりける朝なれば、縫殿の陣にて酒暖めてたべける薪木にこそしてけれ。奉行の藏人行幸より先にと急ぎ行いて見るに、跡方もなし。いかにと問へばしかじかと答ふ。あなあさまし。さしも君の執しおぼしめされつる紅葉を、かやうにしつることよ。知らず汝等禁獄流罪にも及び、わが身もいかなる逆鱗にか預らんずらんと、思はじ事なう案じ續けてゐたりける所に、主上いとどしく夜の御殿を出でさせもあへず、かしこへ行幸あつて紅葉を叡覽あるに、なかりければ、いかにと御尋ありけり。藏人何と奏すべき旨もなし。ありのままに奏聞す。天機ことに御心よげにうち笑ませ給ひて、林間に酒を暖めて紅葉を燒くといふ詩の意をば、さればそれらには誰が敎へけるぞや。やさしうも仕つたるものかなとて、却つて叡感にあづかりし上は、敢て敕勘なかりけり」とある。

答二張籍一因以代レ書

張籍に答へ、因つて以て書に代ふ

憐君馬瘦衣裘薄。　憐む君が馬瘦せて衣裘の薄きを、
許到二江東一訪二鄙夫一。　江東に到つて鄙夫を訪ふを許す。
今日正閒天又暖。　今日正に閒にして天また暖かなり、
可二能扶レ病暫來一無。　能く病を扶けて暫く來るべきや無や。

【字解】【一】江東　曲江の東。鄙夫は樂天自ら謂ふ。許は期なり、約なり。

【題義】張籍に答へ、且書簡に代へた詩である。

【詩意】君は氣の毒なことに貧乏で馬も瘦せ衣も薄いが、曲江の東の我を訪ふ兼ねての約束がある。

今日は僕も閑暇で天氣も暖だから、病を扶けて遊びに來ては如何であるか。

曲江早春

曲江の早春

曲江柳條漸無力。曲江の柳條漸く力無し、
杏園伯勞初有聲。杏園の伯勞初めて聲あり。
可憐春淺遊人少。憐むべし春淺うして遊人の少なるを、
好傍池邊下馬行。好し池邊に傍ひ馬を下りて行かん。

【題義】曲江の早春の景況を述べた詩である。

【詩意】曲江の柳の枝は長く垂れて力なく、杏園には初めて鶯の聲がする。春がまだ淺くて遊人の少いのが却つてよい。因つて馬から下りて池に傍うて歩いた。

【字解】〔一〕曲江　長安の東南に在る池の名。都人遊賞の地。其西に杏園、慈恩寺あり。〔二〕伯勞　鳥の名。もず。〔三〕可憐　愛すべしの意。

見元九悼亡詩。因以此寄

元九が悼亡の詩を見、因つて此を以て寄す

夜淚闇銷明月幌。夜淚闇に銷す明月の幌、
春腸遙斷牡丹庭。春腸遙に斷つ牡丹の庭。

【字解】〔一〕人間　世間。

〔一〕人間此病治無藥。人間此病治するに藥なし。
唯有楞伽四卷經。唯楞伽四卷の經あるのみ。

【題義】元稹（時に江陵に在り）の亡妻を悼む詩を見、此詩を作つて寄せたのである。

【詩意】君は明月の照す帷帳の中に獨り涙にかきくれ、遙に牡丹の咲いてゐる庭に對して斷腸の思をなしてゐるであらう。世間には此種の悲慘事が多く、然も其れを治すべき藥はない。ただ楞伽經（佛經の名）四卷があるばかりだ。

寒食夜

寒食の夜

無月無燈〔一〕寒食夜。月も無く燈も無し寒食の夜、
夜深猶立闇花前。夜深けて猶立てり闇花の前。
忽因時節驚年幾。忽ち時節に因つて驚く年幾くぞ、
四十如今〔二〕欠一年。四十如今一年を欠く。

【題義】寒食の夜の情景を述べた詩である。

【詩意】月もなく燈もない寒食の夜に、夜の深けるまで暗中の花に對して獨り立ち、忽ち時節の移

【字解】〔一〕寒食　冬至から百五日、此日火を用ふるを禁ず。〔二〕闇花　暗やみの中の花。〔三〕如今　今。

るに因つて己の年の幾歳なるかを考へ、三十九になることを知つて自ら驚いた。

杏園花落時。招錢員外同醉

杏園に花落つる時、錢員外を招きて同じく醉ふ

花園欲去去應遲。
正是風吹狼藉時。
近西數樹猶堪醉。
半落春風半在枝。

【題義】杏園の花の散る時、錢員外（前に見ゆ）を招いて共に飲まんとする詩である。

【詩意】杏園に花見に往かうと思つても、風が吹荒れて落花狼藉たる時であるから、自然と足が向かなくなるであらう。幸に吾が家の近くの西の方に在る數本の樹は、半は落ちたが半はまだ枝に殘つてゐて賞するに足るから、此花に對して一獻致したいものだ。

花園に去らんと欲するも去ること應に遲かるべし、
正に是れ風吹いて狼藉たる時。
近西の數樹猶醉ふに堪へたり、
半は春風に落ち半は枝に在り。

【字解】【一】杏園　長安の西に在る遊園地。【二】花園　杏園を指して言ふ。【三】狼藉　花の散り敷く貌。

重題西明寺牡丹　時元九在二江陵一。

重ねて西明寺の牡丹に題す　時に元九江陵に在り

往年君向東都去。
曾歎花時君未迴。
今年況作江陵別。
惆悵花前又獨來。
只愁離別長如此。
不道明年花不開。

往年君東都に向つて去る、
曾ち歎く花時君が未だ迴らざるを。
今年況んや江陵の別を作すをや、
惆悵す花前又獨來るを。
只愁ふ離別の長く此の如くなることを、
明年花開かじと道はざれ。

【題義】再び西明寺の牡丹に題した詩である。卷九の西明寺牡丹花時憶二元九一を參照せられよ。

【詩意】先年君（元稹を指す）が洛陽に往つた時は、牡丹の咲く時節になつても君の歸らないのを嘆いたが、今年は更に遠い江陵に居るので、獨り西明寺の牡丹に對して悲んでゐる。いつも此の如く君と離れてゐるのは吾が最も愁ふる所である。來年も亦花は咲くであらうが君に逢へるかどうかはわからない。

【字解】【一】東都　洛陽。【二】江陵　時に元稹は江陵士曹に貶せられてゐた。

同錢員外禁中夜直

宮漏三聲半夜。　錢員外と同じく禁中に夜直す

【字解】【一】宮漏　宮中の水時

好風涼月滿松筠。
此時閒坐寂無語。
藥樹影中唯兩人。

【題義】錢員外（前に見ゆ）と同じく禁中に宿直した時の作である。

【詩意】宮中の時計が三更を報じ、最早夜半になつた。時に涼風明月が松や竹に滿ちて好い景色である。此時默默として閑坐し、藥樹の影のさす處に錢員外と唯二人で宿直した。

【字解】【一】宮漏　前に見ゆ。　【二】松筠　松と竹。

禁中夜作書與元九

心緒萬端書兩紙。
欲封重讀意遲遲。
五聲宮漏初鳴後。
一點窓燈欲滅時。

【題義】禁裏に宿直してゐる夜、手紙を書いて元稹に與へたことを述べた詩である。

【詩意】樣樣に心をこめて二枚の紙に書いた手紙をば、封緘しようとして又讀みなほし、言ひ足らぬ所はないかと思案にくれる折しも、宮中の時計が五更を報じ、窓然の燈火は將に消えんとして曉近くなつた。

【餘論】王立名曰く「按ずるに元和十二年、公江州に在り、書を作りて微之に與へ、封題詩あり。昔憶封書與君夜、金鑾殿後欲明天、今夜封書在何處、廬山菴裏曉燈前、と。卽ち此書を指すなり」と。

八月十五日夜。禁中獨直。對月憶元九

八月十五日夜、禁中に獨り直し、月に對して元九を憶ふ

銀臺金闕夕沈沈。
獨宿相思在翰林。
三五夜中新月色。
二千里外故人心。
渚宮東面煙波冷。
浴殿西頭鐘漏深。

銀臺金闕夕に沈沈、
獨宿相思翰林に在り。
三五夜中新月の色、
二千里外故人の心。
渚宮の東面煙波冷に、
浴殿の西頭に鐘漏深し。

【字解】【一】銀臺　翰林院。金闕は宮闕をいふ。沈沈は夜のふけゆくこと。【二】新月　黃昏初出の明月。【三】故人　舊友。元稹を指す。【四】渚宮　宮殿の名。池に臨みて作る故にいふ。【五】西頭　西端なり。鐘漏は鐘や水時計。【六】江陵　元稹の居る處。秋陰は秋のくもり。

猶恐清光不同見。　猶恐る清光同じく見ざるを、
江陵卑濕足秋陰。　江陵卑濕秋陰足る。

【題義】八月十五日の夜、禁裏に獨り宿直し、月に對して元稹を憶うた詩である。

【詩意】禁中の夜漸く深くる時、獨り翰林院に宿直して遙に君を思うてゐる。今夜は丁度八月十五夜で新に出た滿月に對し、二千里外に在る君を思ふ情に堪へない。渚宮の東の方は煙波冷に、幽趣特に深く、浴殿の西の方は鐘の音も深けて靜寂の極である。誠によい景色であるが、君の居る江陵は低く濕つた土地で曇りがちであるから、恐らく今夜の月も我のやうに見ることは出來まい。

【餘論】唐宋詩醇に「次聯本色の語、屬對却つて工を極む。後來ただ蘇軾のみ深く此妙を得たり。他人纂に倣へば則ち淺率味なし」と評してある。我邦では源氏物語・和漢朗詠集・平家物語・源平盛衰記・謠曲などに引用せられてゐる。

寄陳式五兄

陳式五兄に寄す

年來白髮兩三莖。　年來白髮兩三莖、
憶別君時髭未生。　君に別れし時を憶ふに髭未だ生ぜざりき。
惆悵料君應滿鬢。　惆悵君を料るに應に鬢に滿つべし。

【字解】【一】當初　初めから。

當初是我十年兄。　當初是れ我が十年の兄。

【題義】陳式（五は排行、兄は尊稱）に寄せた詩である。

【詩意】君に別れた頃はまだ髭さへ生えなかつたのが、今年になつてからは白毛が二三本生えた。君は恐らく白毛が鬢に滿つる程になつたらう。初めから僕よりも十歳の年長者であつたから。

庾順之以紫霞綺遠贈。以詩答之

庾順之紫霞綺を以て遠く贈る、詩を以て之に答ふ

千里故人心鄭重。　千里の故人心鄭重、
一端香綺紫氛氳。　一端の香綺紫氛氳。
開緘日映晚霞色。　緘を開けば日晚霞の色に映じ、
滿幅風生秋水紋。　幅に滿ちて風秋水の紋を生ず。
爲褥欲裁憐葉破。　褥を爲らんとして裁たんと欲すれば葉の破れんことを憐み、
製裘將翦惜花分。　裘を製せんとして將に翦らんとすれば花の分れんことを惜む。
不如縫作合歡被。　如かじ縫うて合歡被と作し、

【字解】【一】故人　朋友。庾順之を指す。
【二】氛氳　氣の盛なる貌。
【三】開緘　封を切る。
【四】合歡被　對の寢衣。

寤寐(五)相思如對君。寤寐に相思うて君に對する如くせんには。【五】寤寐　ねてもさめても。

【題義】庾順之が遠方から紫霞綺（織物の名）を贈つてくれたので、此詩を寄せて好意を謝したのである。

【詩意】君は親切にも遠方から一端の紫霞綺を贈つてくれて誠に辱けない。早速封を切つて見た所が日光が晩霞の如き絹の色に映じ、一面に秋水の如き波紋が顯れた。褥にしようとすれば葉を破るのが惜しく、裘にしようと思へば花が分れるのが惜しい。いつそのことに縫つて對の寢衣となし、寢ても覺めても君と相對してゐるやうな氣持のするやうにしようと思ふ。

送元八歸鳳翔(一)

元八の鳳翔に歸るを送る

莫道岐州(二)三日程。道ふ莫れ岐州三日の程と、
其如風雪一身行。風雪一身の行を其如せん。
與君況是經年別。君と況んや是れ年を經て別る、
暫到城來又出城。暫く城に到り來りて又城を出づ。

【題義】元八の鳳翔に歸るのを送る詩である。

【字解】【一】鳳翔　陝西省鳳翔縣。【二】岐州　鳳翔なり。

【詩意】岐州即ち鳳翔までは僅に三日の路程だなどと謂つてはいけない。風雪を冒して獨旅をするのは決して容易な事ではない。特に僕の身になつて見れば、君と久しく別れてゐて、暫く長安に來たかと思ふと又長安を去るのだから、尙更別れが惜しいのである。

雨雪放(一)朝。因懷微之

雨雪朝を放つ、因つて微之を懷ふ

歸騎紛紛(二)滿九衢(三)。歸騎紛紛として九衢に滿つ、
放朝三日爲泥塗(三)。放朝三日泥塗の爲なり。
不知雨雪江陵府(四)。知らず雨雪江陵の府、
今日排衙(五)得免無。今日排衙免さるるを得しや無や。

【題義】雪が降つて道がわるい爲に三日間官吏が參朝を縱されたので、江陵士曹たる元稹を懷つて作つた詩である。

【詩意】馬に乘つて歸る官吏が紛紛として長安市街に滿つる程だ。これは雪が降つた爲に三日間放朝を申渡されたからだ。君の務めてゐる江陵でも矢張雪が降つて今日は排衙を免されたかどうか。

【字解】【一】放朝　參朝を縱されること。【二】紛紛　衆多の貌。【三】九衢は市街。【三】泥塗　どろみち。【四】江陵　元稹の居る處。【五】排衙　長官儀仗を陳設し、屬僚順次に參謁すること。

詠懷

歳去年來塵土中。
眼看變作白頭翁。
如何辦得歸山計。
兩頃村田一畝宮。

【題義】胸中の感慨を述べた詩である。

【詩意】一年一年と俗世間に日を送つて、空しく白髪の老人になるばかりだ。どうして故郷に歸隱する計畫などが立てられようぞ。僅に二百畝の田地と一畝の家とより外には、何一つない貧生活だもの。

【字解】【一】歸山　故郷に歸る。
【二】兩頃　二百畝。

聞微之江陵臥病。以大通中散碧腴垂雲膏寄之。因題四韻

微之が江陵にて病に臥すと聞き、大通中散碧腴垂雲膏を以て之に寄せ、因つて四韻を題す

已題一帖紅消散。
又封一合碧雲英。
憑人寄向江陵去。
道路迢迢一月程。
未必能治江上瘴。
且圖遙慰病中情。
到時想得君拈得。
枕上開看眼蹔明。

【題義】元稹が江陵で病氣に罹り臥床中なりと聞き、藥を送つてやるに就いて題した詩である。

【詩意】一服の紅消散と一盒の碧雲英とを封包し、人に託して江陵に送つた。道が遠いから著くまでには一月位はかかるであらう。或は江邊の風土病を治することは出來ないかも知れぬが、病中の情を慰めるには足るであらう。この藥が著いたらば君は早速枕上に封を開き悅の目を以て看るであらうと想ふ。

【字解】【一】大通中散碧腴垂雲膏　藥の名。
【二】四韻　八句の詩。
【三】一帖　藥一劑を一帖といふ。紅消散は藥の名。
【四】一合　一盒か。碧雲英は藥劑の名。
【五】迢迢　遙なる貌。

酬錢員外雪中見寄

松雪無塵小院寒。
松雪塵なくして小院寒し、

閉門不似住長安。　門を閉ぢて似ず長安に住するに。
煩君想我看心坐。　君を煩し我を想うて心を看て坐せしむ、
報道心空無可看。　報道す心空うして看る可き無しと。

【題義】錢員外（前に見ゆ）が雪中に詩を寄せられたのに酬いた作である。

【詩意】松の上に雪が積つて塵をも留めず。門を閉ぢて小さな座敷に閑居してゐると、長安の都に住んでゐるやうには思はれない。君は我を想ひ心を看て坐してゐるといふが、心は空なものだから看ることは出來まい。

【字解】【一】報道　答へて言ふ。

重酬錢員外

雪中重寄雪山偈。　雪中重ねて雪山の偈を寄せ、
問答殷勤四句中。　問答殷勤なり四句の中。
本立空名緣破妄。　本空名を立てたるは妄を破るに緣る、
若能無妄亦無空。　若し能く妄無くんば亦空無けん。

【題義】再度錢員外に酬いた詩である。

【詩意】雪中更に雪山の偈を寄せ丁寧に君に答へる。もし、空の名を立てたのは妄を破る爲であるから、既に妄がない以上は空もないであらう。

【字解】【一】雪山　佛經にてヒマラヤ山をいふ。偈は佛家の詞句をいふ。
【二】殷勤　ねんごろなこと。

獨酌憶微之（時對所贈盞。）

獨酌花前醉憶君。　獨り花前に酌み醉うて君を憶ふ、
與君春別又逢春。　君と春別れて又春に逢ふ。
惆悵銀杯來處重。　惆悵す銀杯の來り處ること重く、
不曾盛酒勸閒人。　曾て酒を盛りて閒人に勸めず。

【題義】獨り酒を酌んで元稹を憶つた詩である。

【詩意】獨り花の前に酒を酌み、醉うて君を憶うた。君と春別れて今又春に逢うたからである。悲しいことには君の贈つてくれた銀杯は只どつしりと控へ込んでゐて、酒を盛つて僕に勸めてはくれないだから益〻君を憶ふの情に堪へないのである。

【字解】【一】惆悵　かなしむこと。
【二】閒人　ひまな人。樂天自ら謂ふ。

微之宅殘牡丹

殘紅零落無人賞。　微之が宅の殘牡丹
殘紅零落して人の賞する無し、

【字解】【一】元九　元稹、字は

雨打風摧花不全。雨打ち風摧いて花全からず。
諸處見時猶悵望。諸處に見る時だも猶悵望す、
況當元九小亭前。況んや元九が小亭の前に當れるをや。

【題義】元稹の家の殘りの牡丹の花を見て詠んだ詩である。

【詩意】殘んの花も落ち誰あつて賞玩する者もなく、雨に打たれ風に摧かれて散散になつてしまつた。他の處で見てすら悲に堪へないのに、まして吾が親友たる元稹の家の前の花だから一入悲が深い。

【字解】〔一〕元九　微之をいふ。九は排行。

新磨鏡

衰容常晚櫛。秋鏡偶新磨。
一與清光對。方知白髮多。
鬢毛從幻化。心地付頭陀。
任意渾成雪。其如似夢何。

新に鏡を磨く

衰容常に晚く櫛り、秋鏡偶新に磨く。
一たび清光と對し、方に白髮の多きを知る。
鬢毛は幻化に從せ、心地は頭陀に付す。
意に任せて渾て雪と成らば、其れ夢に似たるを如何せん。

【字解】〔一〕幻化　變化なり。〔二〕心地　心なり。頭陀は煩惱を除く修行。

【題義】新に鏡を磨いで吾が形を寫し感ずる所を述べた詩である。

【詩意】容色が衰へては髮を櫛ることも稀になつたが、偶秋になつて鏡を磨ぎ、(昔の鏡は青銅などで出來てゐるから時時磨ぐ必要がある。)一たび吾が形を寫して見て、白髮の多いのに驚いた。鬢の毛は變化するに任せ、心は佛道の修行に任せてゐるが、意に任せて雪のやうに眞白くならば、まるで夢のやうになつてしまふであらうが、今更如何とも仕方がない。

感髮落

昔日愁頭白。誰知未白衰。
眼看應落盡。無可變成絲。

髮の落つるに感ず

昔日頭の白からんことを愁ふ、誰か知らん未だ白からずして衰へんとは。
眼に看る應に落ち盡きぬべきを、變じて絲と成るべき無し。

【字解】〔一〕誰知　何ぞ知らんの意。〔二〕絲　白髮。

【題義】髮の拔け落ちるのに感じて作つた詩である。

【詩意】昔は頭髮が白くなりはせぬかと心配した。まだ白くならないのに衰へようとは思はなかつた。所が今見れば髮が衰へて落ち盡きさうである。これでは白くなることすら出來ない。

八月十五日夜。聞崔大員外翰林獨直。對酒翫月。因懷禁中清景。偶題是詩

八月十五日の夜、崔大員外が翰林に獨り直し、酒に對し月を翫ぶと聞き、因つて禁中の清景を懷ひ、偶是詩を題す

秋月高懸空碧外。　秋月高く懸る空碧の外、
仙郎靜翫禁闈間。　仙郎靜に翫ぶ禁闈の間。
歲中唯有今宵好。　歲中唯今宵の好きあり、
海內無如此地閒。　海內此地の閒なるに如く無し。
皓色分明雙闕牓。　皓色分明なり雙闕の牓、
清光深到九門關。　清光深く到る九門の關。
遙聞獨醉還惆悵。　遙に獨醉ふと聞きて還惆悵す、
不見金波照玉山。　金波の玉山を照すを見ざるを。

【題義】八月十五日の夜、崔大（姓名）員外（官名）が翰林院に獨り宿直し、酒を酌み月を賞するを聞き、宮中の清景を懷うて作つた詩である。

【詩意】秋の月が高く天外に懸る時、君は宮中に宿直して靜に之を賞してゐる。一年中に今夜のやうな明月はまたとなく、宮中ほど閑靜な處は天下にないから、宮門のあたりに清光の冴え渡つた所は定めて好景であらう。吾は遙に君が獨り月に對して酒を酌むと聞き、月光の玉の如き君の姿を照すのを見ないのを悲んでゐる。

【字解】【一】仙郎　崔大員外を指して言ふ。禁闈は宮闕。【二】皓色　月の白き色。雙闕は宮門。牓は榜に通ず、牌なり、杜詩に天門日射黃金牓とある。【三】九門　宮門なり。【四】金波　月の光をいふ。玉山は崔大の醉つた姿の美しきをいふ。世說に「嵇叔夜の人となりや、巖巖として孤松の獨立するが若く、その醉ふや傀俄として玉山の將に崩れんとするが若し」とある。

酬王十八見寄　王十八の寄せられしに酬ゆ

秋思太白峯頭雪。　秋は太白峯頭の雪を思ひ、
晴憶仙遊洞口雲。　晴れては仙遊洞口の雲を憶ふ。
未報皇恩歸未得。　未だ皇恩を報せざれば歸り未だ得ず、
慙君爲寄北山文。　慙づ君が爲に北山の文を寄するに。

【題義】王質夫（前に見ゆ）が詩を寄せたのに酬いた作である。

【詩意】秋は太白峯の頂の雪を思ひ、晴れては仙遊山口の雲を憶うてゐる。併し未だ皇恩に報いないのだから、君が僕にくれた北山移文（官を辭して隱遁すべき由を勸告した文）に對して愧ぢ入つた次第であるが、官を辭して往くわけには行かない。

【字解】【一】太白峯　山の名。前の送王十八歸山、寄題仙遊寺を見よ。【二】仙遊　山の名。前に見ゆ、山に寺あり。【三】北山文　齊の周顒鍾山卽ち北山に隱る。後詔に應じ出でて海鹽縣令となり、此山を過ぎんとす。會稽の孔稚珪大に之を鄙み、山靈の意を借りて之に移して再び至ることを得ざらしむ。之を北山移文と名づく。移は文書の名で、各地に遷移する意である。

立春日酬錢員外曲江同行見贈　立春日酬錢員外曲江同行見贈

立春の日、錢員外が曲江に同行し贈られしに酬ゆ

下直遇春日。垂鞭出禁闈。
直より下りて春日に遇ひ、鞭を垂れて禁闈を出づ。

兩人攜手語。十里看山歸。
兩人手を攜へて語り、十里山を看て歸る。

柳色早黃淺。水紋新綠微。
柳色早黃淺く、水紋新綠微なり。

風光向晚好。車馬近南稀。
風光晚に向んとして好く、車馬南に近づいて稀なり。

機盡笑相顧。不驚鷗鷺飛。
機盡きて笑つて相顧み、鷗鷺の飛ぶを驚かさず。

【字解】【一】曲江　前に見ゆ。【二】下直　直は宿直なり。【三】禁闈　宮門。【四】機　機心なり。巧詐の心をいふ。【五】鷗鷺　かもめ、さぎ。列子に「海上の人鷗を好む者あり。毎旦海上に往き鷗に從つて遊ぶ。其父曰く、吾聞く鷗鳥皆汝に從つて遊ぶと、汝取り來れと。明日海上に往きしに鷗鳥舞ひて下らず。これ機心ある故なり」とある。

【題義】立春の日に錢員外（前に見ゆ）が曲江に同遊し詩を贈りしに酬いた作である。

【詩意】宿直から下つて來ると、其日は丁度立春であつたので、馬に乘つて宮門を出で、相俱に曲江に遊び遠山を眺めて歸つた。まだ春といふ名ばかりで柳の芽も黃色が淺く、池の氷も融けたばかりで波紋もあまり立たない。併し夕方になつて一入風光が好くなり、南に近寄るに隨つて車馬も稀で閑靜である。吾吾は機心を抱かないから池の鷗も驚きもせずに悠悠と飛び交うてゐる。

和錢員外青龍寺上方望舊山

錢員外が青龍寺の上方にて舊山を望むに和す

舊峯松雪舊溪雲。
舊峯の松雪舊溪の雲、

悵望今朝遙屬君。
悵望今朝遙に君に屬す。

共道使臣非俗吏。
共に道ふ使臣は俗吏に非ず、

南山莫動北山文。
南山、北山の文を動かすこと莫れと。

【題義】錢員外が青龍寺の高い處から故鄕の山を悵望して作つた詩に和した作である。卷十一の登龍昌上寺望江南山、懷錢舍人と題する詩の自註に、昔嘗與錢舍人登青龍寺上方、同望藍田山、各有絕句。錢詩云、偶來上寺因高望、松雪分明見舊山とあるのは此詩を作つたことを謂ふのであらう。して見ると錢員外と錢舍人とは同一人であることが明かである。

【詩意】舊山の松に積つてゐる雪や舊溪の雲をば、今朝君は遙に悵然として眺めてゐる。併し君も僕も共に言ふ「吾吾は堂堂たる使臣で俗吏ではないから、藍田山よ決して北山移文などを宣布するやうなことはしてくれるな」と。

【字解】【一】青龍寺　寺の名。長安に在る。上方は地勢最高の處をいふ。【二】南山　南方の山、藍田山を指して言ふ。北山文は前の酬王十八見寄に見ゆ。

宴周皓大夫光福宅座上作

周皓大夫が光福の宅に宴す　座上の作

何處風光最可憐。
何の處の風光か最も憐れむべき、

【字解】【一】光福　長安の里の

妓堂階下砌臺前。
軒車擁路光照地。
絲管入門聲沸天。
綠蕙不香饒桂酒。
紅櫻無色讓花鈿。
野人不敢求他事。
唯借泉聲伴醉眠。

妓堂の階下砌臺の前。
軒車路を擁して光地を照し、
絲管門に入りて聲天に沸く。
綠蕙香からずして桂酒饒に、
紅櫻色なくして花鈿に讓る。
野人敢て他事を求めず、
唯泉聲を借りて醉眠に伴はしむ。

【題義】御史大夫周皓が光福里の宅に宴したことを述べた詩である。

【詩意】大夫の宅の中で何處が最も風景が好いかといへば、妓堂の階下砌臺の前が最も好い。そこを擇んで今日の盛宴を開いたのである。來り會する貴人の車は路に滿ちて光地を照し、門に入れば管絃の聲が天に沸くほどである。綠蕙の香氣は桂酒の爲に壓倒され、紅櫻の色も美人の花鈿に奪はれるばかりだ。さて自分は野人であるから敢て他の事は求めない。ただ泉聲を借りて醉眠に伴はしむるを得ば澤山である。

名であらう。【三】可憐　愛すべきこと。【三】砌臺　王侯の家この臺を作り以て戲を觀る。【四】軒車　貴人の車。【五】絲管　絲竹管絃。【六】綠蕙　香草。【七】花鈿　卷十一、長恨歌に見ゆ。【八】野人　樂天自ら謂ふ。

惜牡丹花二首

一首翰林院北廳花下作。一首新昌寶給事中宅南亭花下作。

牡丹花を惜む　二首（一首は翰林院の北廳花下の作、一首は新昌寶給事中宅の南亭花下の作。）

惆悵階前紅牡丹。
晚來唯有兩枝殘。
明朝風起應吹盡。
夜惜衰紅把火看。

惆悵す階前の紅牡丹、
晚來唯兩枝の殘れる有り。
明朝風起らば應に吹盡すべし、
夜衰紅を惜みて火を把りて看る。

【題義】牡丹の花を惜む詩である。

【詩意】階前の紅色の牡丹が、今夕はただ僅に二枝の花が殘つてゐるばかりだ。實に痛惜に堪へない。明朝風が吹かば皆吹盡してしまふであらう。それが惜しさに燭をつけて夜まで賞翫した。

〔一〕

寂寞萎紅低向雨。
離披破豔散隨風。
晴明落地猶惆悵。
何況飄零泥土中。

〔二〕

寂寞たる萎紅低れて雨に向ひ、
離披たる破豔散りて風に隨ふ。
晴明地に落つるも猶惆悵す、
何ぞ況んや泥土の中に飄零するをや。

【字解】【一】寂寞　淋しき貌。【二】離披　十分に開き盡すこと。破豔は開ききつた花びら。

【詩意】萎んだ花が淋しく垂れた所に雨が降りそそぎ、十分に開き盡した花びらが風のまにまに散つてゐる。晴れた日に落ちるさへ痛惜に堪へないのに、まして泥土の中に吹き散らされるのは見るに忍びない。

答元奉禮同宿見贈

元奉禮が同宿して贈られしに答ふ

相逢俱歎不閑身。　相逢うて俱に歎く閑ならざる身、
直日常多齋日頻。　直日常に多く齋日頻なるを。
曉鼓一聲分散去。　曉鼓一聲分散し去る、
明朝景景屬何人。　明朝の風景何人にか屬せん。

【題義】元奉禮が俱に宿直して詩を贈られたのに答へた作である。

【詩意】君と相逢うて、常に官職の爲に忙しく、宿直や齋戒の日が多くて、自然の風光などを賞する暇のないことを俱に嘆じた。さて曉を告ぐる鼓の音が響き渡れば、吾吾はそれぞれ分散して職掌に就かねばならぬ。明朝の風景は誰の賞玩する所となるであらう。

【字解】〔一〕直日　宿直の日。齋日は神を祀るに就いて齋戒する日。

答馬侍御見贈

馬侍御が贈られしに答ふ

謬入金門侍玉除。　謬つて金門に入りて玉除に侍す、
煩君問我意何如。　君を煩はして我に問ふ意何如と。
蟠木詎堪明主用。　蟠木詎ぞ明主の用に堪へんや。
籠禽徒與故人疎。　籠禽徒に故人と疎なり。
苑花似雪同隨輦。　苑花雪に似て同じく輦に隨ひ、
宮月如眉伴直廬。　宮月眉の如く直廬に伴ふ。
淺薄求賢思自代。　淺薄賢を求めて自ら代へんことを思ふ、
嵇康莫寄絶交書。　嵇康寄することなかれ絶交の書。

【題義】馬侍御が贈りし詩に答へた作である。

【詩意】吾は誤つて宮中に奉仕する身となつたので、君から更情は如何であるかとの御質問を蒙つた。自分は蟠木の如き取柄のない男で到底天子樣の御用には立たず、籠の鳥となつて常に舊友とも疎闊になつてゐる。ただ幸に君とは苑中の花の雪の如く白き時、俱に鳳輦のお伴をしたり、宮中の月の眉の如く細き時、宿直所に相手をしたりしてゐる。併し淺薄の才で到底任に堪へないから、賢者を求めて代つてもらはうと思つてゐるゆゑ、君に賴むが絶交書などをたたきつけぬやうに願ひたい。

【字解】〔一〕馬侍御　馬は姓、侍御は官名。
〔二〕金門　金馬門。玉除は宮庭。
〔三〕蟠木　大木の蟠屈せるもの。
〔四〕故人　舊友。
〔五〕直廬　宿直所。
〔六〕嵇康　晉の人、絶交書を著す。ここは嵇康を以て馬侍御に比す。

上巳日恩賜曲江宴會卽事

上巳の日恩賜の曲江宴會卽事

賜歡仍許醉。此會興如何。
翰苑主恩重。曲江春意多。
花低羞豔妓。鸞散讓清歌。
共道昇平樂。元和勝永和。

歡を賜ひ仍つて醉ふことを許す、此會興如何。
翰苑主恩重く、曲江春意多し。
花低れて豔妓に羞ぢ、鸞散じて清歌に讓る。
共に道ふ昇平の樂、元和は永和に勝れりと。

【字解】【一】上巳　三月三日の節句。曲江は前に見ゆ。卽事とは現前の事物を賦するをいふ。【二】翰苑　翰林なり。樂天此時翰林學士たり。【三】昇平樂　泰平の樂。【四】元和　時の年號。永和は晉の穆帝の年號。永和九年暮春の初、王羲之等會稽山陰の蘭亭に會し禊事を修む。羲之蘭亭記を作る。

【題義】三月三日に天子樣から曲江に於て宴を賜はりし時、現前の歡興を賦した詩である。

【詩意】天子樣から宴を賜はり興の特に深きを覺える。翰林學士一同に下された御恩は誠に重く、曲江には春景色が十分に滿ちてゐる。花の枝を垂れてゐるのは、美妓に對して羞ぢてゐるかのやうに見え、鶯の飛び去つたのは、清歌に壓倒された樣子である。羣臣皆「今日の太平の樂は、かの永和九年の樂に比して遙に勝つてゐる」と言つてゐる。

夜惜禁中桃花。因懷錢員外

夜禁中の桃花を惜み、因つて錢員外を懷ふ

前日歸時花正紅。
今夜宿時枝半空。
坐惜殘芳君不見。
風吹狼藉月明中。

前日歸る時花正に紅なり、
今夜宿する時枝半空し。
坐に惜む殘芳君見ざることを、
風吹いて狼藉たり月明の中。

【題義】夜宮中の桃花を惜むにより錢員外を懷うて作つた詩である。

【詩意】前日宮中から自宅に歸る時には眞盛であつたが、今夜宿直の時に見ると半は散つてしまつた。現に月明の中に風に吹かれて紛紛と散つてゐる。名殘の花を君が見ないのを誠に惜しいと思ふ。

答劉戒之早秋別墅見寄

劉戒之が早秋別墅にて寄せられしに答ふ

涼風木槿籬。暮雨槐花枝。
併起新秋思。爲得故人詩。
避地鳥擇木。入朝魚在池。
城中與山下。喧靜闇相思。

涼風木槿の籬、暮雨槐花の枝。
併せて新秋の思を起し、爲に故人の詩を得たり。
地を避けて鳥木を擇び、朝に入りて魚池に在り。
城中と山下と、喧靜闇に相思ふ。

【字解】【一】別墅　別莊。【二】木槿　漢木の名。秋花を開く。【三】故人　舊友。劉戒之を指す。

【題義】劉戒之が秋の初に別莊からよこした詩に答へた作である。

【詩意】涼しい風が木槿の垣を吹き、夕の雨が槐の花に降りそそぐ。この二つが併せて新秋の感を起させる所へ、又君からは詩を貰つた。さて君は鳥の木を擇ぶが如く閑地に優遊し、僕は朝に仕へ池中の魚となつて自由を奪はれてゐる。一は城市喧囂の中に在り、一は青山靜寂の間に在り、互に相思うてゐる。

涼夜有懷

涼夜懷あり

念別感時節。早蛩聞一聲。　別れを念うて時節を感ず、早蛩一聲を聞く。
風簾夜涼入。露簟秋意生。　風簾夜涼入り、露簟秋意生ず。
燈盡夢初罷。月斜天未明。　燈盡きて夢初めて罷み、月斜にして天未だ明けず。
闇凝無限思。起傍藥欄行。　闇に無限の思を凝し、起ちて藥欄に傍うて行く。

【字解】(一)早蛩　早きこほろぎ。(二)露簟　露にうるほふたかむしろ。【題義】秋夜の感懷を述べた詩である。【詩意】別離を念ひては時節の推移に敏感になり、早くも一聲蛩の鳴くのを聞いた。夜の涼風が簾を透して入り、露しげき簟は特に秋冷を覺える。燈が盡きる時故郷の夢が醒め、月は斜になつたがまだ夜は明けない。無限の思に滿たされて、起きて家のまはりをさまよつた。(三)藥欄　家のまはりのかこひ。

秋思

病眠夜少夢。閒立秋多思。
寂寞餘雨晴。蕭條早寒至。
鳥棲紅葉樹。月照青苔地。
何況鏡中年。又過三十二。

秋思

病眠夜夢少く、閒立秋思多し。
寂寞として餘雨晴れ、蕭條として早寒至る。
鳥は紅葉の樹に棲み、月は青苔の地を照す。
何ぞ況んや鏡中の年、又三十二を過ぎたるをや。

【字解】(一)閒立　靜に立つこと。(二)蕭條　淋しき貌。

【題義】秋の情思を述べた詩である。

【詩意】病んで眠れば夢も少く、靜に立つてあたりを見れば秋思が深い。淋しき雨も名殘なく晴れ、ひしひしと寒さが增して來る。鳥は紅葉した樹に棲み、月は青苔の上を照し、すべて物淋しき有樣である。特に鏡中にうつる吾が影も老けて、はや三十二を過ぎてしまつたから、秋思の情も一入深いわけだ。

禁中聞蛩

禁中、蛩を聞く

悄悄禁門閉。夜深無月明。
西窓獨闇坐。滿耳新蛩聲。

悄悄として禁門閉ぢ、夜深けて月明なし。
西窓に獨闇坐すれば、耳に滿つ新蛩の聲。

【字解】【一】悄悄　靜なる貌。禁門は宮中の門。【二】闇坐　默坐。

【題義】宮中で蛩の聲を聞いて作つた詩である。

【詩意】靜に宮中の門が閉ぢられ、夜も深けて月もない。西の窓の下に獨り默坐してゐると、蛩の聲が耳に滿つるほど繁く聞える。

秋蟲

切切闇窓下。嚶嚶深草裏。
秋天思婦心。雨夜愁人耳。

切切たり闇窓の下、嚶嚶たり深草の裏。
秋天思婦の心、雨夜愁人の耳。

【字解】【一】切切　蟲の聲。【二】嚶嚶　蟲の聲。【三】思婦　憂思を抱く女。

【題義】秋の蟲の聲の人の愁を惹くことを述べた詩である。

【詩意】暗窓の下、深草の裏、秋の雨夜に切切と鳴く蟲の聲は、坐ろに愁人思婦の涙をそそるであらう。

春夜喜雪。有懷王二十二

春夜雪を喜び、王二十二を懷ふあり

夜雪有佳趣。幽人出書帷。
微寒生枕席。輕素封階墀。
坐罷楚絃曲。起吟班扇詩。
明宜滅燭後。淨愛褰簾時。
窻引曙色早。庭銷春氣遲。
山陰應有興。不臥待徽之。

夜雪佳趣あり、幽人書帷を出づ。
微寒枕席に生じ、輕素階墀を封ず。
坐して楚絃の曲を罷め、起ちて班扇の詩を吟ず。
明は燭を滅す後に宜しく、淨は簾を褰ぐる時を愛す。
窻は曙色を引くこと早く、庭は春氣を銷して遲し。
山陰應に興あるべし、臥せずして徽之を待つ。

【字解】【一】幽人　樂天自ら謂ふ。書帷は書齋のとばり。【二】輕素　輕く白く積つた雪。階墀は階段。【三】楚絃曲　楚調なり。中に白頭吟・泰山吟・梁甫吟等あり。【四】班扇詩　漢の成帝の時の女官班倢伃、趙飛燕の讒する所となり、秋扇歌を作りて自ら嘆ず。【五】山陰　晉の王徽之、字は子猷、羲之の子なり。山陰に居りし時、夜雪初めて霽る。月に乘じて戴逵を訪ひ、門に及んで返る。人其故を問ふ。曰く、興に乘じて來り、興盡きて返る、何ぞ必ずしも逵を見んと。

【題義】春夜雪の降つたことを喜び、因つて王二十二を懷うて作つた詩で、同姓の緣で王徽之の故事を用ひ、王二十二に比したのである。

【詩意】夜の雪は甚だ雅趣があるので、吾も書齋の帷を出て眺めた。枕席のあたりに微寒を感じ、白く輕い雪が階段に積つた。吾は坐して楚絃の曲を罷め、起つて班姫の秋扇の歌を吟じた。燭を消せば

雪明りがほの白く、籠を掲げると特に清らかに見える。窓は明るくて、夜が明けたかと思はれ、庭の春色が銷されてまだ若い。山陰の王徽之が興を起して我を來り訪ふであらうと思ひ、寢ないで待つてゐる。

酬和元九東川路詩十二首

元九が東川路の詩十二首に酬和す

十二篇皆因新境追憶舊事。不能一一曲敍。但隨而和之。唯予與元知之耳。

【訓讀】十二篇は皆新境に因りて舊事を追憶す、一一曲に敍ぶること能はず、但し隨つて之に和す、唯予と元と之を知るのみ。

【題義】元和四年三月七日、元九（元稹）が監察御史を以て蜀の東川に使した時道中で作つた詩十二篇に酬和したのである。

駱口驛舊題詩

駱口驛舊題の詩

拙詩在壁無人愛。拙詩壁にあれども人の愛する無し、

【字解】【一】駱口驛　驛の名。

鳥汙苔侵文字殘。唯有多情元侍御。繡衣不惜拂塵看。

鳥汙し苔侵して文字殘はる。唯多情の元侍御のみ有り、繡衣惜まず塵を拂うて看る。

【題義】駱口驛で嘗て題した詩に就いての作である。

【詩意】僕の拙い詩が壁に題してあるが誰も愛誦する者もなく、鳥の糞に汙されたり苔が蒸したりして文字も大分損はれてゐる。唯元侍御だけは情の深い人だから、繡衣の汙れるをも厭はず、塵を拂つて僕の詩を看てくれた。

前に見ゆ。

【二】元侍御　監察御史元稹。

【三】繡衣　御史の服。

南秦雪

往歲曾爲西邑吏。慣從駱口到南秦。三時雲冷多飛雪。二月山寒少有春。我思舊事猶惆悵。

南秦の雪

往歲曾て西邑の吏と爲り、駱口より南秦に到るに慣る。三時雲冷にして多く雪を飛ばし、二月山寒うして春あること少し。我は舊事を思うて猶惆悵す、

【字解】【一】西邑　長安の西の縣、盩厔縣を指す。

【二】三時　春夏秋をいふ。

君作二初行一定苦辛。　君は初行を作して定めて苦辛すらん。
仍賴愁猿寒不レ叫。　仍賴に愁猿寒うして叫ばず、
若聞二猿叫一更愁レ人。　若し猿の叫ぶを聞かば更に人を愁へしめん。

【題義】南秦の雪の旅を想うて作つたのである。

【詩意】先年僕は盩厔縣尉となり、屢〻駱口驛から南秦の方に往つたことがある。あの邊は寒い土地で三時にも雲冷に兎もすれば雪が降り、二月になつても仲仲春景色にはならない。今僕は先年の事を思うて悲んでゐるが、君は初めて其地を旅して苦辛してゐるであらう。併し寒くても猿が鳴かないのはまだしも幸である。あの猿に鳴かれたら更に君をして愁へしむるであらう。

山枇杷花　二首

萬重青嶂蜀門口。　萬重の青嶂蜀門の口、
一樹紅花山頂頭。　一樹の紅花山頂の頭。
春盡憶レ家歸未レ得。　春盡きて家を憶へども歸り未だ得ず、
低紅如レ解替レ君愁。　低紅解するが如く君に替りて愁ふ。

【題義】山枇杷の花を見て作つた詩である。

【詩意】幾重ともなく重つた青山が蜀道の入口に聳え立ち、そこの頂に一本の紅の山枇杷の花が咲いてゐる。春盡きて家郷を憶へども歸ることも出來ぬ愁を、花が解するものの如く、枝を低れて君の代りに愁へてゐるらしく見える。

〔一〕

葉如二裙色碧綃淺一。　葉は裙色の碧綃の淺きが如く、
花似二芙蓉紅粉輕一。　花は芙蓉の紅粉の輕きに似たり。
若使二此花兼解レ語。　若し此花をして兼ねて語を解せしめば、
推二囚御史一定違レ程。　御史を推囚して定めて程を違へん。

〔二〕

【詩意】山枇杷の葉は美人の裙の碧綃の色淺きが如く、その花は芙蓉の面に紅粉を施したやうである。されば此花をして更に人語をも解せしめたならば、早速嚴めしい御史殿をさへひつとらへて、旅程を後れさせてしまふであらう。

江樓月

(一)嘉陵江曲曲江池。
明月雖ㇾ同人別離。
一宵光景潛相憶。
兩地陰晴遠不ㇾ知。
誰料江邊懷ㇾ我夜。
正當二池畔望ㇾ君時一。
今朝共語方同悔。
不ㇾ解多情先寄ㇾ詩。

江樓の月

嘉陵江曲曲江の池、
明月は同じと雖も人は別離す。
一宵の光景潛に相憶へども、
兩地の陰晴遠くして知らず。
誰か料らん江邊我を懷ふ夜、
正に池畔君を望む時に當りしことを。
今朝共に語つて方に同じく悔ゆ、
解せず多情先づ詩を寄せしを。

【題義】嘉陵江の曲の樓上で月を觀た詩である。

【詩意】君は嘉陵江の曲に居り僕は曲江の邊に居た。月は何處も同じであるが君と僕とは南と北とに別れ、一夜月色を仰いで潛に相憶ひ、兩地路遙にして陰晴を知らなかつたが、君が江邊に我を懷ひし夜は、丁度僕が池畔に君を懷ひし時と一致してゐた。今朝君と相對して歡談したので當時の愁はすつかり霽れてしまつて、多情にも先づ詩を寄せた心持が自ら解せないやうになつた。

【字解】【一】嘉陵江　源は陝西省鳳縣の嘉陵谷より出で、甘肅省より四川省に入り、巴縣に至つて長江に入る。蜀中の巨川なり。元稹の居る處。曲江は長安に在り、樂天の居る處。

亞枝花

(一)山郵花木似二平陽一。
愁殺多情駟馬郎。
還似二昇(四)平池畔坐一。
低ㇾ頭向ㇾ水自看ㇾ粧。

亞枝花

山郵の花木平陽に似たり、
愁殺す多情の駟馬郎。
還昇平の池畔に坐するに似たり、
頭を低れ水に向つて自ら粧を看る。

【題義】枝を壓して盛に開く桃花を見て作つた詩である。元稹の自注に「往歳樂天と曾て郭家の亭子の竹林中に於て亞枝紅桃花の半池水に在るを見たり。自後數年復記得せず。忽ち褒城驛池岸の竹間に於て之を見たり。宛も舊物の如し。深く愴然たる所なり」とあり。その詩に、平陽池上亞枝紅、悵望山郵事事同、還向二萬竿深竹裏一、一枝渾臥碧流中。とある。

【詩意】山驛の花木が平陽里の郭家のに似てゐるので、多感多情の君をして坐に舊事を懷はしめ、君は昇平の池畔に坐してゐるやうな氣持で、頭を低れ水に向つて自ら旅粧を照し、自ら身の旅中に在るを怪んだであらう。

【字解】【一】亞枝　枝を壓して咲くこと。【二】山郵　山間の驛。褒城驛を指して言ふ。平陽は長安の里の名か。【三】駟馬郎　監察御史をいふ。後漢の桓典御史となり、風厲にして避忌する所なし。常に駟馬に乘る。京師之が語をなして曰く、行き行き且つ止り、駟馬御史を避けよと。【四】昇平　長安の里の名。元稹ここに住みしこと、樂天の詩題に見ゆ。

江上笛

江上何人夜吹笛。
聲聲似憶故園春。
此時聞者堪頭白。
況是多愁少睡人。

江上の笛

江上何人か夜笛を吹く、
聲聲故園の春を憶はしむるに似たり。
此時聞く者頭白きに堪へたり、
況んや是れ愁多く睡少き人をや。

【題義】江邊で笛の聲を聞いたことを述べた詩である。

【詩意】江邊で誰か知らぬが夜笛を吹いてゐる。其聲が聞く者をして故郷を憶はしめ、又よく頭髮を白くさせるに足る。まして愁思多く夜もろくろく眠られぬ人に取りては尙更である。

【字解】【一】故園　故郷。

嘉陵夜有懷　二首

露濕墻花春意深。
西廊月上半床陰。
憐君獨臥無言語。
惟我知君此夜心。

嘉陵夜懷あり　二首

露は墻花を濕ほして春意深し、
西廊月上る半床の陰。
憐む君が獨り臥して言語なきを、
惟我のみ君が此夜の心を知る。

【題義】嘉陵驛で夜感懷を深うしたことを述べた詩である。

【詩意】露は墻の花を濕し春も已に闌なる時、西廊に月が上つて寢臺を半照してゐる。その時君は獨り臥して語らふ友もなく感懷に耽つてゐたのは、誠に氣の毒なことであつた。その時の君の心は我のみ知ることが出來る。

〔一〕

不明不闇朦朧月。
非暖非寒慢慢風。
獨臥空牀好天氣。
平明閒事到心中。

〔二〕

明ならず闇ならず朦朧たる月、
暖にあらず寒にあらず慢慢たる風。
獨空牀に臥して天氣好し、
平明閒事心中に到る。

【詩意】明るくもなく暗くもなき朧月夜に、暖かならず寒からずそよ風の吹く時、獨り空牀に臥して天氣の快晴なるを眺め、曉になつて色色の閒事が心に浮んで來た。

【字解】【一】慢慢　そよそよと風の吹く貌。

【二】平明　曉をいふ。閒事は、つまらぬむだ事。

夜深行

百牢關外夜行客。

夜深けて行く

百牢關外夜行の客、

【字解】【一】百牢關　關所の名。

【二】三殿　麟德殿なり。一殿にし

三殿角頭宵直人。　三殿角頭宵直の人。
莫道近臣勝遠使。　道ふ莫れ近臣は遠使に勝れりと。
其如同是不閒身。　同じく是れ閒ならざる身を其如せん。

【題義】夜の深けるまで旅路を急いだことを述べた詩である。

【詩意】是までは三殿の中に宿直する身であつた君が、今は百牢關の外に夜路を急いでゐる。天子様の側近に奉仕する臣は、遠方に使する臣に勝るとは申されぬ。いづれにしても多忙なことは同じである。

【字解】【一】靖安　長安の街名。元稹の宅の在る處。【二】望驛臺　臺の名。【三】居人　長安に留守居する人。容は旅人、元稹を指して言ふ。

て三面あり、故に三殿といふ。角頭はホトリの意。宵直は夜宿直すること。【三】不閒　多忙なこと。

望驛臺　三月三十日。

靖安宅裏當窓柳。　靖安の宅裏窓に當れる柳、
望驛臺前撲地花。　望驛臺前に地を撲つ花。
兩處春光同日盡。　兩處の春光同日に盡く、
居人思客客思家。　居人は客を思ひ客は家を思ふ。

【題義】三月三十日、春の盡くる日に望驛臺で作つた詩である。

【詩意】靖安の自宅の窓の外に在る柳も望驛臺前に散る花も、同じく是日を以て春と別れるのである。故郷の人は旅に居る君を思ひ、君は故郷の人を思うたであらう。

江岸梨花

梨花有意緣和葉。　梨花意有り緣葉に和す、
一樹江頭惱殺君。　一樹江頭君を惱殺す。
最似孀閨少年婦。　最も似たり孀閨少年の婦、
白粧素袖碧紗裙。　白粧素袖碧紗の裙。

【題義】江岸の梨花を詠じた詩である。

【詩意】梨の白い花が緑の葉に調和して、一本江岸に立つて坐に君を惱殺してゐる。さながら年若き寡婦が白い著物に碧紗の裙を著けたやうに。

【字解】【一】孀閨　寡婦の居る處。少年婦は年わかき婦人。【二】素袖　白い袖。

感元九悼亡詩。因爲代答　三首

元九が悼亡の詩に感じ、因つて爲に代り答ふ　三首

答謝家最小偏憐女

謝家最小偏憐の女に答ふ

嫁得梁鴻六七年、　梁鴻に嫁し得て六七年、
耽書愛酒日高眠。　書に耽り酒を愛して日高くるまで眠る。
雨荒春圃唯生草。　雨は春圃を荒して唯草を生じ、
雪壓朝厨未有煙。　雪は朝厨を壓して未だ煙あらず。
身病憂來緣女少。　身病み憂來るは女の少なるに緣り、
家貧忘却爲夫賢。　家貧うして忘却するは夫の賢なるが爲なり。
誰知厚俸今無分。　誰か知らん厚俸今分無きことを、
枉向秋風吹紙錢。　枉げて秋風の紙錢を吹くに向ふ。

【題義】元稹の作つた謝家最小偏憐女（元稹の妻は末女で一家の愛を身に受けてゐたことをいふ）といふ詩に元稹の妻に代つて答へる詩である。

【詩意】妾は梁鴻にも比すべき君に嫁して六七年を經た。君は讀書に耽り飲酒を好み朝寢坊であつて、畠は春雨に荒れて唯雜草が生え、雪は寒厨を壓して炊煙も揚らぬ貧生活であつた。妾の病氣になつたのは小さい女子の爲で、家の貧なるをも忘れてゐたのは夫の賢なるが爲である。君は今日厚俸を戴くやうになつても今となつては何にもならず、君は強ひて紙錢を吹く秋風に向つて嘆息して御座るであらう。

【字解】【一】悼亡詩　妻の死を悲む詩。
【二】梁鴻　後漢の平陵の人、字は伯鸞。同縣の孟光を娶り、夫妻同じく霸陵山中に入り耕織を以て業となす。元稹に比す。
【三】紙錢　紙を剪りて錢となし、東帛に代へて神に供ふ。

答騎馬入空臺　馬に騎りて空臺に入るに答ふ

君入空臺去。朝往暮還來。　君は空臺に入りて去り、朝に往きて暮に還り來る。
我入泉臺去。泉門無復開。　我は泉臺に入りて去り、泉門復開く無し。
鰥夫仍繫職。稚女未勝哀。　鰥夫は仍職に繫がれ、稚女は未だ哀に勝へず。
寂寞咸陽道。家人覆墓廻。　寂寞たる咸陽の道、家人墓を覆うて廻る。

【題義】元稹の作つた空屋題（十月十四日夜）と題する朝從空屋裏、騎馬入空臺云云といふ詩に答へる詩である。

【詩意】君（元稹を指す）は吾が墓を弔はんと、朝往きて暮に還る。妾は黃泉の客となり不歸の人となつてしまつた。君は獨り淋しく官に繫がれ、少女は母の死を哀むことも知らずにゐる。ただ咸陽の道には家人が墓參をすましてぞろぞろと歸つて行く。

【字解】【一】空臺　墓。【二】泉臺　地下の泉。【三】鰥夫　妻を失つた夫。【四】稚女　少女。

答山驛夢　山驛の夢に答ふ

入君旅夢來千里。　君が旅夢に入りて千里に來る、

律詩　感元九悼亡詩因爲代答・答騎馬入空臺・答山驛夢

閉二我幽魂一欲二二年一。　我が幽魂を閉ぢて二年ならんと欲す。
莫レ忘平生行坐處。　忘るる莫れ平生行坐せし處、
後堂階下竹叢前。　後堂の階下竹叢の前。

【題義】山驛で元稹が亡妻の夢を見た詩に答へたのである。

【詩意】君（元稹を指す）が旅中の夢に入り遙遙千里の道をやつて來ました。妾は死んでから最早二年に近くなります。どうぞ妾が生前、後堂の階下や竹林の前に行きつ坐しつしたことを末永く忘れて下さるな。

和レ元九與呂二同宿話舊感贈上

元九が呂二と同宿し、舊を話して感贈するに和す

見レ君新贈呂君詩。　君が新に呂君に贈る詩を見、
憶得同年行樂時。　憶ひ得たり同年行樂せし時。
爭入杏園齊馬首。　爭うて杏園に入りて馬首を齊うし、
潛過柳曲鬬蛾眉。　潛に柳曲を過ぎて蛾眉を鬬はす。

【字解】【一】同年　同年に進士の試驗に及第した仲間。
【二】杏園　長安に在り。唐の新進士多く此に遊宴す。
【三】柳曲　花街の名か。蛾眉は美人。
【四】雲散　雲の如く散ずる。遊宦は官吏となること。
【五】秋娘　唐の金陵の女子。ここは元稹の關係した女をいふのであらう。
【六】微之　元稹の字。

八人雲散俱遊宦。　八人雲散して俱に遊宦し、
七度花開盡別離。　七度花開いて盡く別離す。
聞道秋娘猶且在。　聞道く秋娘猶且在り、
至レ今時復問二微之一。　今に至るまで時に復微之を問ふと。

【題義】元九（元稹）が呂二（名は炅。元稹・白樂天・呂炅等八人、皆同年に進士の試驗に及第した仲間である）と同宿し、舊事を語り合ひ、感ずる所を賦して贈つた詩に和したのである。

【詩意】君が近頃呂君に贈つた詩を見て、我等同年が行樂を俱にした時の事を憶ひ出した。馬を比べて杏園に遊んだり、潛に花街に繰り込んで美人の競爭をしたこともあつた。八人が東西に分散して各官に就き、七年の間に盡く離れ離れになつてしまつた。聞けば君の愛人は今猶健在で、今でも時時君の事を問ふさうだ。

憶二元九一　元九を憶ふ

渺渺江陵道。相思遠不レ知。　渺渺たる江陵の道、相思ふとも遠くして知らず。
近來文卷裏。半是憶レ君詩。　近來文卷の裏、半は是れ君を憶ふ詩なり。

【字解】【一】渺渺　遙なる貌。江陵は湖北省荊州府治。元稹は時に江陵士曹に貶せられてゐた。

【題義】元稹の江陵に在るを憶うて作つた詩である。

【詩意】僕は長安にゐて常に遙遠なる江陵を思うてゐるが、遠方だから君は知らずにゐるであらう。其證據には近來僕の文卷に載せられてゐる作の中、半は君を憶ふ詩で占めてゐる。

蕭員外寄新蜀茶

蕭員外新蜀茶を寄す

蜀茶寄到但驚新。　蜀茶寄せ到つて但新なるに驚く、
渭水煎來始覺珍。　渭水煎じ來つて始めて珍を覺ゆ。
滿甌似乳堪持翫。　甌に滿ち乳に似て持り翫ぶに堪へたり、
況是春深酒渴人。　況んや是れ春深けて酒に渴せる人をや。

【題義】蕭員外（蕭は姓、員外は官名）が蜀の新茶を贈つてくれたことを述べた詩である。

【詩意】新製の蜀茶を贈つてくれたので渭水の水で煎じて飲んだが、頗る珍味なるを覺えた。乳のやうに甌に滿ちて永く賞味するに足る。特に余は醉醒の茶を要するから、尙更結構である。

【字解】【一】渭水　長安の近くに在る川の名。

寄上大兄

已後の詩は邯林居に在りて作る

（邯林居に作。）大兄に寄せ上る

秋鴻過盡無書信。　秋鴻過ぎ盡れども書信なし、
病戴紗巾強出門。　病みて紗巾を戴いて強ひて門を出づ。
獨上荒臺東北望。　獨り荒臺に上りて東北を望み、
日西愁立到黃昏。　日西にして愁へ立つて黃昏に到れり。

【題義】大兄（幼文といふ兄であらう）に寄せた詩である。自註にもある通り、此より以下の詩は邯林（今の陝西省渭南縣の東北に在る下邽をいふのであらう。後の九日寄二行簡一と題する詩參照）にゐた時の作である。

【詩意】雁は澤山飛び過ぎたが大兄からの御手紙は一向屆きませぬ。因つて病を忍び頭巾をかぶつて門を出で、高臺に上つて大兄の居られる東北の方を望み、日の暮れるまで眺め盡しました。

【字解】【一】秋鴻　秋の雁。雁は蘇武の故事により書信に關係がある。

【二】紗巾　紗で作つた頭巾。

病中哭金鑾子

病中、金鑾子を哭す　小女子の名。

豈料吾方病。　豈料らんや吾方に病み、
翻悲汝不全。　翻て汝が全からざるを悲まんとは。
臥驚從枕上。　臥しては驚く枕上より、
扶哭就燈前。　扶け哭して燈前に就くことを。
有女誠爲累。　女あれば誠に累となる、
無兒豈免憐。　兒なきも豈憐みを免れんや。

病來纔十日。養得已三年。
慈涙隨聲迸。悲傷遇物牽。
故衣猶架上。殘藥尚頭邊。
送出深村巷。看封小墓田。
莫言三里地。此別是終天。

病み來つて纔に十日、養ひ得ること已に三年。
慈涙聲に隨つて迸り、悲傷物に遇うて牽かる。
故衣猶架上、殘藥尚頭邊。
送つて深村の巷より出で、小墓田に封ずるを看る。
言ふ莫れ三里の地と、此別是れ終天なり。

【字解】【一】金鑾子　樂天の女兒の名。【二】故衣　もとの衣服。【三】小墓田　小さい墓。封は塚を築くこと。【四】終天　一生涯。

【題義】病中に金鑾子と名づくる女兒の死を悲んだ詩である。

【詩意】自分の病中にお前の死を悲まうとは思ひも寄らぬ事であつた。寢てゐた吾は驚いて起き上り死んだお前を抱いて燈の側に寄り、泣いてお前の顏を視た。兒ゆゑに迷ふ親心で兒は荷厄介だとはいふが、さて兒のない人でも之を悲まずにゐられようか。三年この方養つて來たものを、病んでからやつと十日にしかならないのに失つたかと思へば、慈愛の涙が聲に伴つて落ち、著物が衣桁に懸り殘の藥が枕元に在るのを見ても、悲の心が湧くのである。泣く泣く野邊の送をして墓の塚を築いた。家を距ること僅に三里ではあるが、生涯二度と逢はれぬと思へば、實に悲嘆に暮れるのである。

寄內

桑條初綠卽爲別。
柿葉半紅猶未歸。
不如村婦知時節。
解爲田夫秋擣衣。

內に寄す

桑條初めて綠なるとき卽ち別をなし、
柿葉半紅なるとき猶未だ歸らず。
如かず村婦の時節を知り、
解く田夫の爲に秋衣を擣つに。

【字解】【一】桑條　桑の枝。

【題義】樂天が妻に寄せた詩である。

【詩意】桑の芽が生え出す頃此地を去つて、今や柿の葉が半色づいてもまだ歸つて來ない。村の女房供が時節を心得て、能く夫の爲に冬著の用意をする親切さに及ばぬ仕打である。早く歸つて來てはどうか。

病氣

自知氣發每因情。
情在何由氣得平。
若問病根深與淺。

病氣

自ら知る氣の發るは毎に情に因るを、
情在らば何に由りてか氣平なるを得ん。
若し病根の深きと淺きとを問はば、

此身應與病齊生。　此身は應に病と齊しく生ぜしなるべし。

【題義】病氣の原因は情感に在ることを述べた詩である。

【詩意】病氣の起るのは情が在るからだ。情が在つては決して氣が平ではゐられず、忽ち病氣を惹起すに至るのだ。されば若し病根の深淺を問ふならば、此身の存在は卽ち病根であると謂つてよい。（此身が在れば同時に情が在るのであるから）

歎元九

元九を歎ず

不入城中來五載。　城中に入らざるより來五載、

同時班列盡官高。　同時の班列盡く官高し。

何人牢落猶依舊。　何人か牢落して猶舊に依る、

唯有江陵元士曹。　唯江陵の元士曹あるのみ。

【題義】元稹のいつまでも昇進の出來ないのを憐んだ詩である。

【詩意】自分は長安の都に往かないことが既に五年になるが、もとの同僚は今は皆高官に陞つた。もとの儘で一向昇進しないで埋もれてゐるのは、唯元稹ぐらゐのものだ。

【字解】〔一〕五載　五年なり。
〔二〕班列　同僚をいふ。
〔三〕牢落　おちぶれる。
〔四〕江陵元士曹　時に元稹は江陵士曹に貶せられてゐた。

眼暗

眼暗し

早年勤倦看書苦。　早年には勤倦み書を看て苦み、

晚歲悲傷出淚多。　晚歲には悲傷して淚を出だすこと多し。

眼損不知都自取。　眼の損ずるは知らず都て自ら取るを、

病成方悟欲如何。　病成りては方に悟るも如何せんと欲する。

夜昏乍似燈將滅。　夜昏うして乍ち燈の將に滅せんとするに似たり、

朝闇長疑鏡未磨。　朝闇うして長く疑ふ鏡未だ磨がざるかと。

千藥萬方治不得。　千藥萬方治し得ず、

唯應閉目學頭陀。　唯應に目を閉ぢて頭陀を學ぶべし。

【題義】眼病に罹つたことを述べた詩である。

【詩意】わかい時は勤勞の爲に書を看るのが苦しかつたが、老年になつては悲の爲に淚ばかり出る。今迄は氣が附かなかつたが眼の惡くなつたのは自ら不攝生をした報で、今になつて氣が附いても最早どう仕樣もない。夜はよく見えないので燈が消えかかつたやうで、朝も暗くて鏡が曇つてゐるやうである。樣樣の藥治を加へてもなほらない。ただ目を閉ぢ禪僧のやうに坐つてゐる外はない。

【字解】〔一〕早年　わかい時。
〔二〕頭陀　禪僧。

得袁相書

袁相の書を得たり

穀苗深處一農夫。　穀苗深き處一農夫、
面黑頭斑手把鋤。　面黑く頭斑にして手に鋤を把れり。
何意使人猶識我。　何の意か使人猶我を識り、
就田來送相公書。　田に就いて來り送る相公の書。

【題義】宰相袁公の書狀を得たことを述べた詩である。

【詩意】苗の深く茂つた處に一人の農夫（樂天自ら謂ふ）が、黑い顏に胡麻鹽頭で鋤を持つて立つてゐる。何の考があるかは知らぬが、使者は我を見識つてゐて、田まで尋ねて來て相公の手紙をくれた。

【字解】【一】頭斑　頭髮の胡麻鹽なこと。
【二】使人　使者。

病中作

病中の作

病來城裏諸親故。　病來城裏の諸親故、
厚薄親疎心總知。　厚薄親疎心に總て知る。
唯有蔚章於我分。　唯蔚章の我が分に於けるあり、
深於同在翰林時。　同じく翰林に在りし時よりも深し。

【題義】病中に作つた詩である。

【詩意】自分が病氣になつてから、長安の故舊の人情の厚薄が始めて明にわかつた。實に世間の人情は輕薄なものだ。ただ錢蔚章だけは我に對する情理が、俱に翰林にゐた頃よりも今の方が深いくらゐだ。世にも稀なる人情の厚い人である。

【字解】【一】病來　病氣になつてから以來。城裏は長安の郛の中。親故は親しき故舊。
【二】蔚章　翰林學士錢蔚章。
【三】翰林　役所の名。樂天は嘗て翰林學士たり。

感化寺見元九・劉三十二題名處

感化寺にて元九・劉三十二の名を題せし處を見る

微之謫去千餘里。　微之謫せられて去ること千餘里、
太白無來十一年。　太白の來るなきこと十一年。
今日見名如見面。　今日名を見て面を見るが如し、
塵埃壁上破窓前。　塵埃の壁上破窓の前。

【題義】感化寺で元稹・劉敦質の名が壁に題してあるのを見て作つた詩である。

【詩意】元稹は江陵に貶謫せられて千餘里の遠きに居り、劉敦質は我を來り訪はないこと已に十一年

【字解】【一】微之　元稹の字。
【二】太白　劉敦質の字。

である。今日偶然塵だらけの寺の壁の窓の前に書いてある彼等の名を見て、久し振りで面會したやうな氣がした。

遊悟眞寺廻山下別張殷衡

悟眞寺に遊び山下を廻り張殷衡に別る

世緣未了住不得。　世緣未だ了らずして住し得ず、
孤負青山心共知。　青山に孤負して心共に知れり。
愁君又入都門去。　愁ふらくは君が又都門に入り去ることを、
卽是紅塵滿眼時。　卽ち是れ紅塵の眼に滿つる時。

【題義】悟眞寺に遊び山の下を廻りなどして、張殷衡の入京するのに別れた詩である。

【詩意】俗緣がまだ盡きないので山寺に住むことも出來ず、青山に背いて名利を逐うてゐることは、君も僕も共に能く自ら知つてゐる。特に愁ふべきは紅塵の眼に滿つる今日、君が又長安に入ることだ。

【字解】【一】世緣　俗緣。
【二】孤負　そむく。
【三】紅塵　浮世の塵。

村居。寄張殷衡

村居、張殷衡に寄す

金氏村中一病夫。　金氏村中の一病夫、
生涯濩落性靈迂。　生涯濩落として性靈迂なり。
唯看老子五千字。　唯老子五千の字を看て、
不踢長安十二衢。　長安の十二衢を踢まず。
藥銚夜傾殘酒暖。　藥銚には夜殘酒を傾けて暖め、
竹床寒取舊氈鋪。　竹床には寒くして舊氈を取つて鋪く。
聞君欲發江東去。　聞く君が江東を發して去らんと欲すと、
能到茅庵訪別無。　能く茅庵に到りて別を訪ふや無や。

【題義】村里に隱居する樣を述べて張殷衡に寄せた詩である。

【詩意】金氏村に隱居する一病夫たる我は、乾枯らびた生涯を送る迂闊者である。唯每日老子を讀んでゐて長安などへは足踏みもしない。藥を煎じる銚子で寢酒を暖めて飲み、竹の寢臺が寒さを感ずると古毛氈を敷いて寢る。聞けば君は江東を發して長安へ往くさうだが、その前に一度我が茅屋へ暇乞かたがた來る氣はないか。

【字解】【一】金氏村　村の名。一病夫は樂天自ら謂ふ。
【二】濩落　瓢の風に吹かれてカラカラ鳴る聲。性靈は心。
【三】十二衢　市街をいふ。
【四】藥銚　藥を煎じる銚子。
【五】舊氈　古き毛氈。
【六】茅庵　樂天の家。

病中得樊大書

病中、樊大の書を得たり

荒村破屋經年臥。　荒村の破屋に年を經て臥し、
寂絶無人問病身。　寂として絶えて人の病身を問ふ無し。
唯有東都樊著作。　唯東都の樊著作のみあり、
至今書信尚殷勤。　今に至るまで書信尚殷勤なり。

【題義】病中に樊大の書を得たので之が詩を作つたのである。

【詩意】寒村の破屋に數年間病に臥してゐるので、世間から棄てられて絶えて見舞つてくれる者もなくなつたが、唯洛陽の樊著作だけは、奇特なことに今日になつても親切に手紙をくれる。

【字解】【一】東都　洛陽をいふ。樊著作は著作郎樊大。
【二】殷勤　丁寧親切なこと。

開元九詩書卷

元九が詩書の卷を開く

紅箋白紙兩三束。　紅箋白紙兩三束、
半是君詩半是書。　半は是れ君が詩半は是れ書。
經年不展緣身病。　年を經て展べざりしは身の病めるに緣る、
今日開看生蠹魚。　今日開き看れば蠹魚を生せり。

【字解】【一】紅箋　赤い紙。
【二】蠹魚　紙を食ふ蟲。しみ。

【題義】元稹の詩や書信の卷物を開いて看たことを述べた詩である。

【詩意】赤い紙や白い紙の束ねたのが二三本ある。これは君からもらつた詩や手紙である。永くひろげても見なかつたのは病に臥してゐたからである。今日少康を得て開いて看たら蠹魚が食つてゐた。

晝臥

晝臥す

抱枕無言語。　枕を抱いて言語なく、
空房獨悄然。　空房獨悄然たり。
誰知盡日臥。　誰か知らん盡日臥せることを、
非病亦非眠。　病にもあらず亦眠るにもあらず。

【字解】【一】空房　空室。悄然は淋しき貌。【二】盡日　終日。

【題義】晝安臥してゐることを述べた詩である。

【詩意】枕を抱いて空室の中に默然として、病といふでもなく、惰眠を貪るといふでもなく、終日寢て暮してゐる。

夜坐

夜坐す

庭前盡日立到夜。　庭前盡日立つて夜に到る、
燈下有時坐徹明。　燈下時ありて坐して明に徹る。

【字解】【一】盡日　終日。

此情不レ語何人會。　此情語らず何人か會せん、
時復長吁一兩聲。　時に復長吁すること一兩聲。

【題義】夜悄然として默坐してゐることを述べた詩である。

【詩意】晝は終日庭前に立ち盡して夜に到り、夜は燈下に夜の明けるまで默坐し、時時長嘆の聲をもらしてゐる。吾が胸中をば誰も理解してくれる者はない。

【字解】【一】長吁　長嘆なり。

暮立

暮に立つ

黃昏獨立佛堂前。　黃昏獨立つ佛堂の前、
滿地槐花滿樹蟬。　滿地の槐花滿樹の蟬。
大抵四時心總苦。　大抵四時心總て苦しめども、
就中腸斷是秋天。　就中腸斷つは是れ秋天。

【題義】秋の夕暮に立つて徘徊することを述べた詩である。

【詩意】夕方に佛堂の前に獨り立つて眺めると、一面に槐の花が散り敷き樹には蟬の聲が喧しい。春夏秋冬いつも心は悲しいが、特に悲しいのは秋である。

【字解】【一】四時　四季、春夏秋冬。

有レ感

絕絃與斷絲。猶有却續時。　絕絃と斷絲とは、猶却つて續ぐ時あり。
唯有衷腸斷。無應續得期。　唯衷腸の斷ちたるあり、應に續ぎ得べき期なし。

【字解】【一】衷腸　心腸といふが如し。

【題義】偶〻感ずる所を述べた詩である。

【詩意】絕えた絃と斷れた絲とは、猶續ぐことも出來るが、腸の千切れたのばかりは續ぐことは出來ない。

答友問

似レ玉童顏盡。如レ霜病鬢新。　玉に似たる童顏盡き、霜の如き病鬢新なり。
莫驚身頓老。心更老於身。　驚く莫れ身の頓に老いたるを、心は更に身よりも老いたり。

【題義】友の問に答へた詩である。

【詩意】玉の如き幼顏は失せてしまつて、霜のやうな白髮になつてしまつた。併し身の老いたのはまだしものことで、心は一層老衰してしまつた。

村夜

霜草蒼蒼蟲切切。
村南村北行人絶。
獨出門前望野田。
月明蕎麥花如雪。

【題義】村里の初夜の景色を寫した詩である。

【詩意】霜に傷める草が猶青く、蟲の音が繁く聞え、路行く人も途絶えて物淋しき折、門前に立つて田野を眺めると、月明の下に蕎麥の花が雪のやうに白く見える。

聞蟲　蟲を聞く

闇蟲唧唧夜緜緜。
況是秋陰欲雨天。
猶恐愁人暫得睡。
聲聲移近臥床前。

【字解】【一】闇蟲　形も見せずに鳴く蟲。唧唧は蟲の聲。緜緜は長き貌。

【題義】蟲の音を聞き悲んだことを述べた詩である。

【詩意】暗にすだく蟲の聲が喧しい。長き夜に雨さへ降らんとする時、愁人の睡り去ることを氣遣ふものの如く、いやが上にも枕元に近寄つて來ては聲しげく鳴いてゐる。

寒食夜有懷

寒食非長非短夜。
春風不熱不寒天。
可憐時節堪相憶。
何況無燈各早眠。

【題義】寒食の夜に感懷を述べた詩である。

【詩意】寒食の頃は夜も長いといふ程でもなく又短いといふ程でもなく、氣候も熱からず寒からず良い時であるが、ただ人をして物を思はしめる時節で、且燈火がなくて早寝をするので、樣樣な感懷が湧き起る。

寒食夜有懷

寒食夜懷あり
寒食長きにあらず短きにあらざる夜、
春風熱からず寒からざる天。
憐むべし時節の相憶ふに堪へたることを、
何ぞ況んや燈無くして各〻早く眠るをや。

【字解】【一】寒食　冬至から百五日をいふ。此時三日間火を用ふることを禁ずる。

贈内　内に贈る

漠漠(一)闇苔新雨地。
微微涼露欲秋天。
莫對月明思往事。
損君顔色減君年。

漠漠たる闇苔新雨の地、
微微たる涼露秋ならんと欲する天。
月明に對して往事を思ふ莫れ、
君が顔色を損じて君が年を減せん。

【題義】妻に贈つた詩である。

【詩意】秋雨が降つて苔がやたらに生え廣がり、白露が落ちて肌寒き時節になつたが、明月に對して往事を思はぬやうにするがよい。容色が衰へ壽命をつめるものだから。

【字解】(一) 漠漠　ひろがる貌。

得錢舍人書問眼疾　錢舍人の書もて眼疾を問ふを得たり

春來眼闇少心情。
點盡黄連(一)尚未平。
唯得君書勝得藥。
開緘未讀眼先明。

春來眼闇うして心情少し、
黄連を點け盡せども尚未だ平ならず。
唯君が書を得て藥を得るに勝れり、
緘を開いて未だ讀まざるに眼まづ明なり。

【字解】(一) 黄連　藥草の名。(二) 緘　封なり。

【題義】錢舍人（錢員外と同人、字は蔚章）から眼疾の見舞狀をもらつたことを悦ぶ詩である。

【詩意】春から以來目がよく見えなくなり氣がくさくさしてたまらない。いくら黄連を點けても少しもよくならない。ただ君の手紙は藥よりも效能があつて、まだ封を切つて讀まないのに目が餘程見えるやうになつた。

還李十一馬　李十一に馬を還す

傳語李君勞(一)寄馬。
病來唯拄杖扶身。
縱擬强騎無出處。
却將牽與趂朝人。

傳語す李君馬を勞寄すと、
病來唯杖に拄へられて身を扶く。
縱ひ强ひて騎らんと擬するも出づる處なし、
却つて將牽して朝に趂く人に與へよ。

【字解】(一) 勞寄　慰めに贈る。(二) 將牽　將は率ゐる意。

【題義】李十一（李建、字は杓直であらう）が樂天に馬を寄贈するといふ傳言を受けて辭退した詩である。

【詩意】傳言に由れば君は僕に馬をくれるといふが、近來僕は病氣で杖にすがつて歩く身であるから馬はいらない。たとひ强ひて乘らうとした所で往く處がない。いつそ宮仕へでもする人にやる方がよい。

九日寄行簡

九日行簡に寄す

摘得菊花攜得酒。　菊花を摘み得酒を攜へ得たり、
遶村騎馬思悠悠。　村を遶り馬に騎つて思悠悠。
下邽田地平如掌。　下邽の田地平なること掌の如し、
何處登高望梓州。　何の處にか高きに登りて梓州を望まん。

【題義】九日（九月九日、重陽の節句である。この日には高い處へ登り菊花酒を酌み、一年中の息災を祈る風習がある）に弟の行簡に寄せた詩である。

【詩意】菊花を摘み酒を攜へ馬に乘つて出掛けたが心は憂に鎖された。何となれば、この下邽は土地平坦で、いくら高い處へ登つてもお前のゐる梓州を見ることは出來ないから。

【字解】【一】悠悠　憂ふる貌。
【二】下邽　樂天の居る處。
【三】梓州　今の四川省三台縣治。時に行簡は劍南東川節度府に仕へてゐた。

夜坐

夜坐す

斜月入前楹。迢迢夜坐情。　斜月前楹に入る、迢迢たり夜坐の情。
梧桐上階影。蟋蟀近牀聲。　梧桐階に上る影、蟋蟀牀に近づく聲。
曙傍窓間至。秋從簟上生。　曙は窓間に傍うて至り、秋は簟上より生ず。

【字解】【一】迢迢　遙なる貌。【二】簟上　たかむしろの上。

【題義】秋夜獨坐の景況を述べた詩である。

【詩意】月光が斜に軒先にさしこむ時、無限の憂を抱いて夜深に獨り坐つてゐる。梧桐の影が刻刻に階に上り、蟋蟀の聲が段段牀に近づいて來る。やがて窓のあたりが白くなり、簟の上が冷えて來る。時事に感じて慨を發し、つい鷄が鳴き夜の明くるまで寢ずに一夜を過ごしてしまつた。

感時因憶事。不寢到鷄鳴。　時に感じて因て事を憶ひ、寢ねずして鷄鳴に到る。

村居　二首

村居　二首

田園莽蒼經春早。　田園莽蒼として春早を經、
籬落蕭條盡日風。　籬落蕭條として盡日風ふく。
若問經過談笑者。　若し經過談笑する者を問はば、
不過田舍白頭翁。　田舍白頭の翁に過ぎず。

【題義】田園生活の樣を述べた詩である。

【詩意】吾が村は草木が青青と茂つて春もまだ若い。吾が家の附近は物淋しく春風が吹いてゐる。尋

【字解】【一】莽蒼　青青と草木の茂る貌。春早は早春に同じ。
【二】籬落　まがき。蕭條は淋しき貌。盡日は終日。

ねて來て談笑する者はといへば、近所の田舍爺ぐらゐのものだ。

〔二〕

門閉仍逢雪。厨寒未起煙。
貧家重寥落。半爲日高眠。

【字解】【一】厨寒　厨に物なきこと。【二】寥落　淋しき貌。

【詩意】門は閉ぢられ雪さへ降つて來た。貧乏暮しだから煮燒する煙も揚らない。貧家は又寂寥である。なぜかといへば大抵は日の高く昇るまで寢てゐるから。

早春

雪散因和氣。氷開得暖光。
春銷不得處。唯有鬢邊霜。

【題義】早春の景況を述べた詩である。

【詩意】段段暖になつて雪も解け氷も釋けたが、いかな春でも銷し得ないのは吾が鬢の霜だけである。

雪散じて和氣に因り、氷開けて暖光を得。
春も銷し得ざる處は、唯鬢邊の霜あるのみ。

王昭君二首　時年十七

王昭君　二首　時に年十七

滿面胡沙滿鬢風。
眉銷殘黛臉銷紅。
愁苦辛勤憔悴盡。
如今却似畫圖中。

【字解】【一】胡沙　えびすの國の沙漠の沙。【二】臉　顏。【三】辛勤　苦勞する。憔悴は、やせ衰へる。【四】如今　いま。

面に滿つる胡沙鬢に滿つる風、
眉は殘黛を銷し臉は紅を銷せり。
愁苦辛勤して憔悴し盡き、
如今却つて畫圖の中に似たり。

【題義】此詩は王昭君の事を詠んだのである。王昭君は漢の元帝の宮女で美貌比ぶ者がなかつた。元帝の後宮甚だ多く、一一召見することが出來なかつたので、畫工をして肖像を畫かしめ、圖を按じて召し幸せられた。故に宮女は皆畫工に賄賂を使つて美しく書いてもらつたが、王昭君は賄賂を使はないので、醜く書かれたから遂に君寵に浴することが出來なかつた。時に匈奴の呼韓邪單于（匈奴の王をいふ）が漢室の王女を娶りたいと請うた。帝乃ち王昭君を嫁せしめることにした。入つて陛下に暇を告ぐるに及び帝は絶世の美人なるを知つて大に惜んだけれども既に匈奴に約した後で今更取消すこともできなかつた。因つて毛延壽以下の畫工を同日に棄市した。かくて王昭君は匈奴に嫁し愁苦の中

に死んだ。

【詩意】胡沙吹く風の爲に顏も髮も汚れ果て、黛は消え紅は褪せて見る影もなくなつてしまつた。おまけに氣苦勞の爲に瘦せ衰へて、今こそ毛延壽の書いた肖像畫そつくりになつた。

〔二〕

漢使却(一)廻憑寄レ語。
黃金何日贖(二)蛾眉。
君王若問(三)妾顏色。
莫レ道不レ如(三)宮裏時。

〔二〕

漢使却廻憑りて語を寄す、
黃金いづれの日か蛾眉を贖はん。
君王若し妾が顏色を問はば、
道ふ莫れ宮裏の時に如かずと。

【字解】【一】却廻　匈奴から漢に歸ること。
【二】蛾眉　美人の稱。ここは王昭君自ら謂ふ。
【三】宮裏時　漢王の宮中にゐた時。

【詩意】漢の御使者が歸るなら、ちよつと傳言を憑みたい。いつになつたら黃金を匈奴に拂つて妾の身を贖ひ還して下さるかと。ただ漢王が若し妾の容貌は如何にと御尋ねになつたら、漢宮にゐた頃よりも衰へたとは決して言はないで貰ひたい。若しそんなことを言つたら贖還の御意もなくなるであらうから。

【餘論】唐宋詩醇に「舊事飜新、思路自ら別なり。後の二句總て贖字より生出す。此れ李商隱の詩に、金徽本是無情物、不レ許文君憶。故夫レ二句と用意極めて相似たり。然れども彼は尖刻に近く、此は則ち深厚、乃ち中晩の判なり」と評してゐる。又瞿宗吉の歸田詩話には「詩人昭君を詠ずる者多し、大篇短章率ね其離愁別恨を敍するのみ。ただ樂天の詩は怨恨を言はずして舊主に惓惓たり。高、人に過ぐる遠き甚し。その漢思自淺胡自深、人生樂在レ相二知心一、といふ者と異れり」と評してある。

白樂天詩集　卷十五

律詩　五言七言　凡九十九首

渭村退居。寄禮部崔侍郎・翰林錢舍人詩一百韻

渭村に退居し、禮部の崔侍郎・翰林の錢舍人に寄する詩一百韻

聖代元和歲。閒居渭水陽。
聖代元和の歲、閒居渭水の陽。

不才甘命舛。多幸遇時康。
不才命の舛へるに甘んじ、多幸時の康きに遇ふ。

朝野分倫序。賢愚定否臧。
朝野倫序を分ち、賢愚否臧を定む。

重文疎卜式。尚少棄馮唐。
文を重んじて卜式を疎んじ、少を尚んで馮唐を棄つ。

由是推天運。從茲樂性場。
是に由りて天運を推し、茲より性場を樂ましむ。

籠禽放高翥。霧豹得深藏。
籠禽高く翥ぶを放され、霧豹深く藏るるを得たり。

世慮休相擾。身謀且自强。
世慮相擾すことを休め、身謀且自ら强む。

猶須務衣食。未免事農桑。
猶須らく衣食を務むべし、未だ農桑を事とするを免れず。

蕪草通三徑。開田占一坊。
畫扉扃白版。夜碓掃黃粱。
隙地治場圃。閒時糞土疆。
枳籬編刺夾。蕪壟擘科秧。
穡力嫌身病。農心願歲穰。
朝衣典杯酒。佩劍博牛羊。
困倚栽松鍤。饑提採蕨筐。
引泉來後澗。移竹下前岡。
生計雖勤苦。家資甚渺茫。
塵埃常滿甑。錢帛少盈囊。
弟病仍扶杖。妻愁不出房。
傳衣念襤褸。舉案笑糟糠。
犬吠村胥鬧。蟬鳴織婦忙。
納租看縣帖。輸粟問軍倉。

草を蕪ぎて三徑を通じ、田を開いて一坊を占む。
畫扉白版を扃し、夜碓黃粱を掃ふ。
隙地場圃を治め、閒時土疆に糞ふ。
枳籬刺夾を編み、蕪壟科秧を擘く。
穡力身の病むを嫌ひ、農心歲の穰なるを願ふ。
朝衣は杯酒に典し、佩劍は牛羊に博ふ。
困んでは松を栽うる鍤に倚り、饑ては蕨を採る筐を提ぐ。
泉を引いて後澗に來り、竹を移して前岡を下る。
生計勤苦すと雖も、家資甚だ渺茫たり。
塵埃常に甑に滿ち、錢帛囊に盈つること少し。
弟は病んで仍杖に扶けられ、妻は愁へて房を出でず。
衣を傳へて襤褸を念ひ、案を擧げて糟糠を笑ふ。
犬吠えて村胥鬧がしく、蟬鳴いて織婦忙し。
租を納れて縣帖を看、粟を輸して軍倉を問ふ。

夕歇攀村樹。秋行遶野塘。
雲容陰慘澹。月色冷悠揚。
蕎麥鋪花白。棠梨間葉黃。
早寒風摵摵。新霽月蒼蒼。
園菜迎霜死。庭蕪過雨荒。
簷空愁宿鷰。壁闇思啼螿。
眼爲看書損。肱因運甓傷。
病骸渾似木。老鬢欲成霜。
少睡知年長。端憂覺夜長。
舊遊多廢忘。往事偶思量。
忽憶煙霄路。常陪劍履行。
登朝思檢束。入閣學趨蹌。
命偶風雲會。恩覃雨露霶。
沾枯發枝葉。磨鈍起鋒鋩。

夕に歇ひて村樹を攀ぢ、秋行いて野塘を遶る。
雲容陰りて慘澹、月色冷にして悠揚。
蕎麥花を鋪いて白く、棠梨葉に間りて黃なり。
早寒風摵摵、新霽月蒼蒼。
園菜霜を迎へて死れ、庭蕪雨を過ぎて荒る。
簷空うして宿鷰を愁へ、壁闇くして啼螿を思ふ。
眼は書を看るが爲に損じ、肱は甓を運ぶに因りて傷む。
病骸渾べて木に似たり、老鬢霜を成さんと欲す。
睡少くして年の長きを知り、端に憂へて夜の長きを覺ゆ。
舊遊多くは廢忘、往事偶〻思量す。
忽ち憶ふ煙霄の路、常て劍履の行に陪せしことを。
朝に登りて檢束を思ひ、閣に入りて趨蹌を學ぶ。
命は風雲の會に偶し、恩は雨露の霶たるよりも覃し。
枯を沾して枝葉を發し、鈍を磨して鋒鋩を起す。

崔閣連鑣鶩。錢兄接翼翔。
齊竽混韶夏。燕石厠琳琅。
同日升金馬。分宵直未央。
共詞加寵命。合表謝恩光。
厩馬驕初跨。天廚味始嘗。
朝晡頒餅餌。寒暑賜衣裳。
對秉鵝毛筆。俱含雞舌香。
青縑衾薄絮。朱裏幕高張。
晝食恒連案。宵眠每竝床。
差肩承詔旨。連署進封章。
起草偏同視。疑文輒共詳。
滅私容點竄。窮理析毫芒。
便共輸肝膽。何曾異肺腸。
愼微參石奮。決密學張湯。

崔閣鑣を連ねて鶩せ、錢兄翼を接して翔ける。
齊竽韶夏に混じ、燕石琳琅に厠る。
日を同うして金馬に升り、宵を分ちて未央に直す。
詞を共にして寵命を加へられ、表を合せて恩光を謝す。
厩馬驕りて初めて跨り、天廚味始めて嘗む。
朝晡餅餌を頒ち、寒暑衣裳を賜ふ。
對して鵝毛の筆を秉り、俱に雞舌の香を含む。
青縑衾薄く絮し、朱裏幕高く張る。
晝食恒に案を連ね、宵眠毎に床を竝ぶ。
肩を差べて詔旨を承け、署を連ねて封章を進む。
草を起して偏に同じく視し、疑文輒ち共に詳にす。
私を滅して點竄を容れ、理を窮めて毫芒を析つ。
便ち共に肝膽を輸す、何ぞ曾て肺腸を異にせん。
微を愼んで石奮に參じ、密を決して張湯を學ぶ。

禁闥青瑣。宮垣紫界。牆
井欄排菡萏。簷瓦鬬鴛鴦。
樓額題鵁鶄。池心浴鳳凰。
風枝萬年動。溫樹四時芳。
宿露凝金掌。晨暉上璧璫。
砌筠塗綠粉。庭果滴紅漿。
曉從朝興慶。春陪宴柏梁。
傳呼鞭索索。拜舞珮鏘鏘。
仙仗環雙闕。神兵闢兩廂。
火翻紅尾旆。冰卓白竿槍。
混滲經魚藻。深沈近浴堂。
分庭皆命婦。對院卽儲皇。
貴主冠浮動。親王轡鬧裝。
金鈿相照耀。朱紫間熒煌。

禁闥青瑣を交へ、宮垣紫牆を界す。
井欄菡萏を排し、簷瓦鴛鴦を鬬はす。
樓額鵁鶄を題し、池心鳳凰浴す。
風枝萬年動き、溫樹四時芳し。
宿露金掌に凝り、晨暉璧璫に上る。
砌筠綠粉を塗り、庭果紅漿を滴らす。
曉は朝に興慶に從ひ、春は宴に柏梁に陪す。
傳呼鞭索索、拜舞珮鏘鏘。
仙仗雙闕を環り、神兵兩廂を闢く。
火は翻す紅尾の旆、冰は卓つ白竿の槍。
混滲として魚藻を經、深沈として浴堂に近づく。
庭を分つは皆命婦、院に對するは卽ち儲皇。
貴主冠浮動し、親王轡鬧裝す。
金鈿相照耀し、朱紫間りて熒煌。

毬簇桃花綺。歌巡竹葉觴。
窪銀中貴帶。昂黛內人妝。
賜禊東城下。頒酺曲水傍。
尊罍分聖酒。妓樂借仙倡。
淺酌看紅藥。徐吟把綠楊。
宴廻過御陌。行歇入僧房。
白鹿原東郭。青龍寺北廊。
望春花景暖。避暑竹風涼。
下直閑如社。尋芳醉似狂。
有時還後到。無處不相將。
雞鶴初雖雜。蕭蘭久乃彰。
來燕隗貴重。去魯孔悒惶。
聚散期難定。飛沈勢不常。
五年同晝夜。一別似參商。

毬は桃花の綺を簇らせ、歌は竹葉の觴を巡らす。
銀を窪む中貴の帶、黛を昂ぐ內人の妝。
禊を賜ふ東城の下、酺を頒つ曲水の傍。
尊罍聖酒を分ち、妓樂仙倡を借る。
淺酌紅藥を看、徐吟綠楊を把る。
宴より廻りて御陌を過ぎ、行くゆく歇ひて僧房に入る。
白鹿原の東郭、青龍寺の北廊。
春を望んで花景暖に、暑を避けて竹風涼し。
直より下りて閑にして社の如く、芳を尋ねて醉うて狂に似る。
時ありて還後に到り、處として相將ゐざるはなし。
雞鶴初め雜ると雖も、蕭蘭久しくして乃ち彰る。
燕に來りて隗貴重せられ、魯を去つて孔悒惶す。
聚散期定め難く、飛沈勢常ならず。
五年晝夜を同うせしも、一別參商に似たり。

屈折孤生竹。銷摧百鍊鋼。
途窮任憔悴。道在肯徬徨。
尙念遺簪折。仍憐病雀瘡。
衈寒分賜帛。救餒減餘糧。
藥物來盈裹。書題寄滿箱。
殷勤翰林主。珍重禮闈郎。
煦沫誠多謝。搏扶豈所望。
提攜勞氣力。吹簸不飛揚。
拙劣才何用。龍鍾分自當。
妝嫫徒費黛。磨甋詎成璋。
習隱將時背。干名與道妨。
外身宗老氏。齊物學蒙莊。
疎放遺千慮。愚蒙守一方。
樂天無怨歎。倚命不勖勤。

屈折孤生の竹、銷摧百鍊の鋼。
途窮りて憔悴に任せ、道在り肯へて徬徨す。
尙遺簪の折るるを念ひ、仍病雀の瘡を憐む。
寒を衈へて賜帛を分ち、餒を救うて餘糧を減ず。
藥物來りて裹に盈ち、書題寄せて箱に滿つ。
殷勤なり翰林の主、珍重す禮闈の郎。
煦沫誠に多謝するも、扶を搏つは豈望む所ならんや。
提攜して氣力を勞し、吹簸すれども飛揚せず。
拙劣才何ぞ用ひん、龍鍾分自ら當る。
嫫を妝ふも徒に黛を費す、甋を磨するも詎ぞ璋を成さんや。
隱に習ひて時と背き、名を干めて道と妨ぐ。
身を外にして老氏を宗とし、物を齊うして蒙莊を學ぶ。
疎放千慮を遺れ、愚蒙一方を守る。
天を樂んで怨歎するなく、命に倚りて勖勤せず。

憤懣胸須豁。交加臂莫攘。
珠沈猶是寶。金躍未爲祥。
泥尾休搖掉。灰心罷激昂。
漸閒親道友。因病事醫王。
息亂歸禪定。存神入坐亡。
斷癡求慧劍。濟苦得慈航。
不動爲吾志。無何是我鄉。
可憐身與世。從此兩相忘。

【字解】【一】元和　憲宗の年號。【二】倫序　秩序といふが如し。【三】否臧　善惡良否。【四】卜式　漢の臣。漢書に「式文章に習はず、秩を貶ぜられて太子太傅となる」とある。【五】馮唐　漢の臣。漢書に「唐年九十餘。官を爲す能はず。乃ち子遂を以て郎となす」とある。【六】高翥　高く飛ぶ。【七】三徑　蔣詡庭中に三徑を開きし故事。【八】一坊　一區劃。【九】白版　白き板。【一〇】夜碓　碓はカラウス。黃粱は米のよきもの。【一一】隙地　あき地。場圃はハタケ。【一二】閒時　ひまな時。【一三】刺夾　とげ。【一四】蒜齏　ニラの畠。【一五】渺茫　漠然として見當のつかぬこと。【一六】襤褸　ぼろ著物。【一七】案　食膳。【一八】村胥　村役人。【一九】縣帖　縣のかきつけ。納稅の督促狀。【二〇】悠揚　長遠の貌。【二一】棠梨　果の名。【二二】摵摵　葉の落ちる聲。【二三】運甓　陶侃が朝晩瓦を運んだ故事。【二四】思量　かんがへる。【二五】煙霄　書雲といふが如し。高位に喩ふ。【二六】劍履　高官の人。【二七】崔圖　禮部侍郎崔羣を指す。【二八】錢兄　錢舍人を指す。【二九】奪笋　つまらぬ樂器。樂天自ら喩ふ。【三〇】燕石　つまらぬ石。樂天自ら喩ふ。琳琅は美石。崔・錢に喩ふ。【三一】金馬　宮殿の門の名。【三二】未央　宮殿の名。【三三】朝晡　朝晩。【三四】雞舌香　香の名。三省の故事に郎官は雞舌香を含む。その事ゐ奏し對答するに其氣の芬芳ならんことを欲するなり。【三五】封章　上書。【三六】點竄　添削。【三七】石奮　漢の臣。【三八】張湯　漢の廷尉たり。【三九】菌蓍　蓮化。【四〇】金掌　仙人掌。仙人の手掌を以て盤を擎げ甘露を承くるなり。史記武帝紀に「栢梁銅柱承露仙人掌の屬を作る」とある。【四一】璧璫　璧をちりばめた榱頭。【四二】砌筠　庭の竹。【四三】興慶　宮の名。【四四】栢梁　臺の名。【四五】玉　腰におぶる玉。【四六】仙仗　天子の儀仗兵。【四七】滉瀁　深廣の貌。魚藻は禁中の池の名。【四八】命婦　婦人の封號を受けた者。【四九】儲皇　皇太子。【五〇】貴主　公主、卽ち皇女。【五一】金鈿　長恨歌に見ゆ。【五二】朱紫　赤紫の印綬。【五三】竹葉　酒の名。【五四】中貴　內臣の貴幸なる者。【五五】內人　宮人。【五六】頒酺　天子の宴を臣民に賜ふこと。【五七】尊罍　酒樽。聖酒は淸酒。【五八】紅藥　芍藥。【五九】白鹿原　長安附近の地名。【六〇】直　宿直。【六一】悄惶　煩惱の貌。【六二】參商　二星の名。常に反對の方角に出る。【六三】翰林主　錢舍人を指す。【六四】禮闈郎　崔羣を指す。【六五】嗅沫　莊子太宗師篇に「相嗅くに濕を以てし、相濡すに沫を以てす」とある。助けること。【六六】摶扶　莊子逍遙遊篇に「扶搖に摶つて上ること九萬里」とあり、扶搖は飄風。【六七】龍鍾　失意の貌。【六八】妝嫫　嫫は古の醜婦嫫母なり。醜婦に化粧を施すこと。【六九】甋瓦　璋は玉。【七〇】蒙莊　蒙人莊子。【七一】慱勤　急遽の貌。【七二】坐亡　坐忘に同じ、思慮なきこと。【七三】慈航　佛語。慈悲の心を以て人を度して苦海を脫離せしむること。【七四】無何是我鄉　莊子逍遙遊篇に「無何有の鄉、廣莫の野」とある。

【題義】樂天は諫省に在りて數、事を言ひ、頗る憲宗の意に忤ふ。因つて京兆戶曹參軍に除せられ、元和七年渭村（舊唐書に下邽といふもの）に退居した。此詩は渭村に隱居してから禮部（役所の名）の崔侍郎（名は羣、侍郎は官名）翰林院の錢舍人（字は蔚章、舍人は官名）に寄せ、舊來の交誼を謝し、我身の境遇幷に意向を述べた詩である。

【詩意】僕は元和七年に渭水の陽（山の時は南、川の時は北）なる渭村に閑居することになつた。不才の身なれば不運に逢ふは固より覺悟の前で、時の康きに遇へるは寧ろ幸福と謂ふべきである。今や賢愚によりて朝野の分を定め、不文老憊の人をば退けることになつた。是に由りて將來の運命を推量し、己の心を樂ましめようと思ふ。今の吾身は籠の鳥が高く飛ぶことを許され、豹が霧深き處に隱れることを許されたのと同じであるから、名利の爲に心を亂すことを罷めて、ただ一身の生計を立てることだけを考へて行かうと思ふ。先づ衣食の資を得る爲に農桑を事とし、草を薙ぎて徑をつけたり、荒地を開墾して田地を作つたり、枳の籬の刺のある枝を編んだり、薤の根分をして植ゑ易へたりなどしてゐる。官服は最早不用になつたので質に入れて酒を買ひ、佩劒も牛や羊と交換してしまつた。かほどまでに勤勞してゐるが家資は仲仲豐にはならず、甑は常に塵にまみれ財布はいつも空である。おまけに弟は病に罹つて杖にすがつて歩き、妻は愁に臥し室を出ない。衣を出して著ようとすれば、ぼろぼろなのが恥しく、食膳を舉ぐれば糟糠を笑ふといふ狀態である。犬が吠えると思つたら、それは村役人が納稅の督促に來たのであつた。蟬の鳴くのを聞いては、そろそろ冬著の支度にかからねばならぬ。雲の容といひ、月の色といひ、段段秋も深けて來て、蕎麥の花が白く、葉の間の棠梨が色づくのを見、淋しき簷に棲む燕を愁へ、小暗き室に蟄の聲を悲み、老病の身は長き夜を明かし兼ねて愁のいや增すのみである。そんな時にはよく往事を追憶する。嘗て宮廷に仕へて皇恩に浴した時は、崔君や錢君と相伍して進退した。賢愚の相伍したのは宛ら齊竽が韶夏に混じ、燕石が琳琅に雜つたやうなものである。因つて日を同うして金馬門に升り、夜は互に末央宮に宿直し、共に陛下の寵命を忝うし、俱に謝恩の表を上り、文を草しては互に見せ合ひ、疑文を見ては互に解釋し、私意を棄てて添削を承認し、理義を窮めて深意を研究し、よく意見が一致した。かくて青瑣（連瑣の模樣を刻鏤してある）の宮門、紫微の宮垣に出入し、貴人の宴に陪し、曉の朝列に加はり、東城の禊を賜はり曲水の宴に與りなどして、宴畢れば退出して白鹿原や青龍寺のあたりを遊びまはり、何處へでも相連れ立つて行樂した。初は鶴（崔・錢に比す）と雞（樂天自ら比す）と相伍したけれども、その中に蕭（醜草、樂天自ら比す）と蘭（香草、崔・錢に比す）との相違が彰れて來て、君等は燕の郭隗のやうに重んぜられ、僕は魯を去つた孔子のやうに苦勞することになり、五年が間行動を共にした身が、相別れて參商のやうになつてしまつた。孤生の竹は折れ百鍊の鋼は摧けて窮途に徬徨するやうになつた。然るに君等は棄てた簪の折るるを憐み、病める雀の瘡つくを患へて、寒くなれば恩賜の帛を分けてくれ、吾が飢うるを見ては食糧を割いてくれ、藥や手紙をくれなどして、實に親切の限りを盡してくれる。君等の援助は謝するに餘あるが、僕は到底大鵬のやうに扶搖に摶つて飛躍することは出來ない。拙劣の才であるから淪落するのは當然である。醜女に化粧をさせても黛を損するばかりで、いくら磨いても瓦は玉にならないのである。且隱居に慣れては時と背き、名利を求むるは道の妨となる。故に老子の敎に則りて身を外にし、莊子の說を信じて萬物を一如とし、天を樂み命に委し、憤懣を除き臂を組んで日を送らうと思ふ。たとひ沈んでも珠は寶とするに足り、金が坩堝の中から躍り上るのは不祥である。（莊

子太宗師篇の故事）龜のやうに尾を泥の中に曳き、心を死灰のやうにして激昂せず、心を鎮めて禪定に入り坐忘をなし、煩惱の苦を脱して彼岸に濟り、心の不動を圖り虛無の道を體し、身と世とを忘れて吾が生を終らうと思ふ。

酬盧祕書二十韻

時初奉レ詔、除二贊善大夫一。

盧祕書に酬ゆ二十韻　時に初めて詔を奉じて贊善大夫に除せらる

謬歷文場選。慙非翰苑才。
雲霄高蹔致。毛羽弱先摧。
識分忘軒冕。知歸返草萊。
杜陵書積蠹。豐獄劍生苔。
晦厭鳴雞雨。春驚震蟄雷。
舊恩收墜履。新律動寒灰。
鳳詔容徐起。鵷行許重陪。
衰顏雖拂拭。蹇步尙徘徊。
睡少鐘偏警。行遲漏苦催。
風霜趁朝去。雨雪拜陵廻。
上感君猶念。傍慙友或推。
石頑鐫費匠。女醜嫁勞媒。
倏忽靑春度。奔波白日頹。
性將時共背。病與老俱來。
聞有蓬壺客。知懷杞梓材。
世家標甲第。官職滯麟臺。
筆盡鉛黃點。詩成錦繡堆。
嘗思豁雲霧。忽喜訪塵埃。
心爲論文合。眉因勸善開。
不勝珍重意。滿袖寫瓊瓌。

謬つて文場の選を歷へ、翰苑の才に非ざるを慙づ。
雲霄高く蹔く致せるも、毛羽弱くして先づ摧けぬ。
分を識りて軒冕を忘れ、歸を知りて草萊に返る。
杜陵、書、蠹を積み、豐獄、劍、苔を生ず。
晦は鳴雞の雨を厭ひ、春は震蟄の雷に驚く。
舊恩墜履を收め、新律寒灰を動かす。
鳳詔徐に起つを容し、鵷行重ねて陪するを許す。
衰顏拂拭すと雖も、蹇步尙徘徊す。
睡少くして鐘偏に警め、行遲くして漏苦に催す。
風霜を趁うて去り、雨雪陵を拜して廻る。
上には君の猶念へるに感じ、傍には友の或は推すに慙づ。
石頑にして鐫るに匠を費し、女醜くして嫁するに媒を勞す。
倏忽靑春度り、奔波白日頹る。
性は時と共に背き、病は老と倶に來る。
聞く蓬壺の客あり、杞梓の材を懷ふを知る。
世家甲第を標し、官職麟臺に滯る。
筆は鉛黃の點を盡し、詩は錦繡の堆を成す。
嘗て雲霧を豁かんことを思ひ、忽ち塵埃を訪ふを喜ぶ。
心は文を論ずるが爲に合ひ、眉は善を勸むるに因つて開く。
珍重の意に勝へず、滿袖瓊瓌を寫す。

【字解】【一】歷二文場選一　進士の試驗に及第したこと。【二】翰苑　翰林院。【三】雲霄　高き官位。【四】軒冕　軒は大夫の車。冕は冠。官位に喩ふ。【五】草萊　草原。田野。【六】杜陵　長安の南五十里に在り。蠹は紙を食ふ蟲。【七】豐獄　吳未だ滅

びざろ時、斗牛の間常に紫氣あり。張華雷煥に問うて曰く、何郡に在りやと。煥曰く豐城に在りと。即ち煥を補して豐城縣令となす。煥縣に到り獄舍の基を掘り、一石函を得たり。中に雙劍あり。一を龍泉といひ一を太阿といふ。【八】震鑿雷　春雷の始めて鳴るものをいふ。其聲を聞けば地中の蟄蟲動き出づるを以てなり。【九】新律　新しき陽氣。【一〇】飈行　官吏の行列。【一一】寒步　跛行。【一二】漏　水時計。【一三】蓬壺客　蓬萊山に住む仙客。宮中に仕ふる官吏。【一四】杞梓　美材を言ふ。【一五】甲第　大邸宅。【一六】麟臺　祕書省をいふ。【一七】鉛黃　圖書を校勘すること。鉛は字を書し圍を界するに用ひ、雌黃は誤字を塗抹するに用ふ。【一八】珍重意　好意なり。【一九】瓊瑗　美玉なり。佳詩に喩ふ。

【題義】盧祕書が樂天を訪ひ詩を贈りしに酬いた作である。時に元和九年で、樂天は渭村の隱居を出で太子左贊善大夫の官に居た。

【詩意】僕は嘗て誤つて進士の試驗に及第し、翰林學士などに任ぜられたが、もともと其柄でないのだから、暫く青雲の上に昇つたが忽ち羽毛が摧け、己の本分を悟つて草野に隱退し、書劍を拋つて蠹の食ふに任せ苔の生える儘に打棄てて置いた。雞の鳴く小暗き雨の日を過ぎ、やがて春雷が蟄蟲を驚かすに至り、一旦棄てた古履を復拾ひ上げ、新しい陽氣が冷え切つた灰に暖氣を與へるやうに、詔が下つて贊善大夫に任ぜられ、重ねて朝官の列に加はることになつた。併し衰顏は如何に拭ふとも淨らかにはならず、ただ駑馬の如く徘徊するのみであつた。夜は睡少くして頻に警鐘の聲を聞き、步行が遲いので參朝の時刻に迫はれがちであつた。上には君の御眷顧を感じ、傍には友の推挽を謝し、どうやら職責を塞いで行つたが、頑石の彫飾するに苦心を要し、醜女の嫁するに媒の厄介になるやうに、色色と人樣に厄介をかけた。やがて青春も過ぎて老境に入り、性は世と相容れず、病は老と俱に來ることになつた。折しも宮中の仙客が偉才の士を求めてゐると聞いた。その仙客は名家の生れであるが、今は祕書省の微官に居り校勘の職を掌つてゐるが、詩は非常に達者である。嘗て雲霧を開いて光輝を發せんと期し、一日塵埃の中なる我廬に來り訪うた。かくて文を論じては心よく合ひ、善を勸むるに因つて愁眉を開いた。殊に滿袖の佳詩を我に贈られた好意は感謝に堪へぬ所である。

題盧祕書夏日新栽竹二十韻

盧祕書が夏日新に栽ゑし竹に題す二十韻

湘竹初封植。盧生此考槃。
久持霜節苦。新託露根難。
等度須當砌。疎稠要滿欄。
買憐分薄俸。栽稱作閒官。
葉剪藍羅碎。莖抽玉琯端。
幾聲清淅瀝。一簇綠檀欒。
未夜青嵐入。先秋白露團。
拂肩搖翡翠。熨手弄琅玕。

湘竹初めて封植し、盧生此に考槃す。
久しく霜節を持して苦み、新に露根を託すること難し。
等しく度りて須く砌に當つべく、疎稠欄に滿たさんことを要す。
買ひて薄俸を分つを憐み、栽ゑて閒官と作るに稱ふ。
葉は藍羅の碎を剪り、莖は玉琯の端を抽く。
幾聲か淸くして淅瀝、一簇綠檀欒。
未だ夜ならざるに青嵐入り、秋に先だちて白露團なり。
肩を拂つて翡翠を搖かし、手を熨して琅玕を弄す。

韻透窗風起。陰鋪砌(一〇)月殘。
炎天聞覺冷。窄地見疑寬。
梢動勝搖扇。枝低好掛冠。
碧籠煙羃羃。珠灑雨珊珊(一二)。
晩籜晴雲展。陰芽蟄虺(一四)蟠。
愛從抽馬策(一六)。惜未截魚竿。
松韻徒煩聽。桃夭(一七)不足觀。
梁慙當家杏。臺陋本司蘭。
古詩云、盧家蘭室杏爲梁、又秘書府即蘭臺也。
撐(一八)撥詩人興。勾(一九)牽酒客歡。
靜連蘆簟滑。涼拂葛衣單。
豈止消時暑。應能保歲寒。
莫同凡草木。一種夏中看。

【字解】【一】淅淅　風の聲。【二】檀欒　竹の貌。【三】翡翠　碧玉の名。【四】璫璫　玉の音。【五】玉璫　玉の管。【六】淅瀝　風の聲。【七】檀欒　竹の貌。【八】撐　手撫でると手に滑なること。【九】勾牽　引く。【一〇】砌月　庭にうつる月。【一一】窄地　狹い土地。【一二】羃羃　煙の棚曳く貌。【一三】珊珊　玉の音。【一四】晩籜　夜落つる竹の皮。【一五】蟄虺　地中にひそむヤムシ。【一六】馬策　馬を打つ鞭。【一七】桃夭　桃の夭夭たる花。【一八】撐撥　かかげ起す。【一九】勾牽　引く。【一〇】淅淅　竹の一種。封植は植ゑること。【一一】考欒　樂をなす。【一二】砌　みぎり、庭。【一三】閒官　閒散な官職。

【題義】盧祕書が夏新に栽ゑた竹に題した詩である。

【詩意】竹を新に植ゑて盧祕書が其處に樂んでゐる。この竹は久しく霜雪の苦を凌いで來たのであるが、今新に根を託するのは仲仲容易でない。よく位置を定めて庭に當るやうにし、疎密宜しきを得て欄に滿つるやうにした。薄俸を割き買ひ取りて愛玩し、移し栽ゑて閑官たるに相應しい。葉は藍の羅を剪つたやうで幹は玉管を立てたやうである。そよそよと清風にそよぎ、一團の綠を簇らしてゐる。青嵐入り白露結び、清韻窓に透り清影月に伴ひ、炎天にも聞けば涼しさを覺え、狹い庭も廣く見える。斬つて鞭にすることも出來る。併し釣竿にするには惜い。此竹に比ぶれば松風の音は聽くに堪へず、桃花の夭夭たるも觀るに足らない。梁にすれば君が家の杏にまさり、臺上に在れば蘭臺(卽ち祕書省)の蘭を陋とするくらゐである。特に詩人の幽興、酒客の歡娛を惹起し、蘆簟の滑なるに連り、葛衣の涼しきを拂ふ。ただ暑氣を消盡するのみならず、歲寒の操を保つことも出來る。されば他の平凡な草木と同じく、ただ夏だけの賞玩に止まらないのである。

【餘論】唐宋詩醇に「正寫し旁寫し虛寫し實寫し、新に竹を栽ゑし趣を曲盡し、彫鏤組織異樣新鮮。

既に笨拙ならず又纖巧ならず。此れ盛唐の格調を變じて自ら機杼を出せしものなり。晩唐以後多く此種を學ぶ」と評してある。

渭村酬李二十見寄

渭村にて李二十の寄せられしに酬ゆ

百里音書何太遲。　百里音書何ぞ太だ遲き、
暮秋把得暮春詩。　暮秋把り得たり暮春の詩。
柳條綠日君相憶。　柳條綠なりし日君相憶ふ、
梨葉紅時我始知。　梨葉紅なる時我始めて知る。
莫歎學官貧冷落。　歎ずる莫れ學官の貧にして冷落せるを、
猶勝村客病支離。　猶勝る村客の病んで支離するに。
形容意緒遙看取。　形容意緒遙に看取するに、
不似華陽觀裏時。　華陽觀裏の時に似ざらん。

【題義】渭村に隱居してゐた時に李二十（次の詩に李二十助教とあり、卷十六に李二十助教員外とあり、元稹の集に李二十員外逢吉とある。皆同一人であらう）から詩を贈られたのに酬いたのである。

【字解】【一】學官　李二十を指す。冷落はおちぶれてゐること。
【二】村客　樂天自ら謂ふ。支離は殘缺なり。
【三】形容　容貌。意緒は心持。看取は觀ること。
【四】華陽觀　樂天が制舉に應ずる時、受驗準備の爲に寓してゐた道觀の名。李二十も同居してゐたのであらう。

【詩意】君の居る長安からは僅に百里を距るに過ぎないのに、なぜか君の手紙の屆くのが遲くて、君が暮春に出した手紙が暮秋になつて僕の手に入つた。君が僕を憶うて此手紙を書いた頃は柳の枝が綠を呈してゐたであらうに、僕が手紙を見て君の思慕の情を知つたのは、梨の葉の色づいた時節である。君は學官として冷落してゐることを歎いてゐるが、それでも寒村に隱居して病みほうけてゐる僕よりもましではないか。遙に君の容色や心持を此處から觀察するに、君も華陽觀にゐた頃よりは餘程ふけたであらう。まして僕は推して知るべしである。

初授贊善大夫早朝寄李二十助教

初めて贊善大夫を授けられ、早朝李二十助教に寄す

病身初謁青宮日。　病身初めて青宮に謁せし日、
衰貌新垂白髮年。　衰貌新に白髮を垂るる年。
寂寞曹司非熱地。　寂寞たる曹司は熱地にあらず、
蕭條風雪是寒天。　蕭條たる風雪は是れ寒天。
遠坊早起常侵鼓。　遠坊早に起きて常に鼓を侵し、
瘦馬行遲苦費鞭。　瘦馬行くこと遲くして苦だ鞭を費す。

【字解】【一】青宮　東宮。皇太子の宮殿。贊善大夫は太子の侍從翊贊を掌る。
【二】曹司　役所。熱地は樞要の地。
【三】蕭條　淋しき貌。
【四】遠坊　遠方の町。樂天の宅の在る處。鼓は夜明けを告ぐる鼓。

一種共君官職冷。一種君と共に官職冷なり、
不如猶得日高眠。如かず猶日高くるまで眠るを得んには。

【題義】初めて贊善大夫に任ぜられた時、早朝に出仕して李二十助教（前を見よ）に寄せた詩である。

【詩意】白髪を垂れ病を抱く老衰の身を以て初めて東宮に奉仕することになつたが、役所は樞要の地ではないから至つて寂寞で、風雪寒く物淋しき極みである。宅が遠いので常に曉鼓の鳴るより前に起きて出仕するのであるが、瘦馬の足が遅いので頻に鞭を用ひて急がさねばならない。君も僕も御同樣あまり冴えない役目に居るが、こんなことなら自由の身で朝寐でもしてゐる方がましかも知れない。

欲與元八卜鄰。先有是贈

元八と鄰をトせんと欲し、先づ是贈あり

平生心迹最相親。平生心迹最も相親むし、
欲隱牆東不爲身。牆東に隱れんと欲するは身の爲ならず。
明月好同三徑夜。明月は好し三徑の夜を同うするに、
綠楊宜作兩家春。綠楊は兩家の春を作すに宜し。
每因暫出猶思伴。每に暫く出づるに因りて猶伴を思ふ、

【字解】【一】心迹　心だて。
【二】三徑　蔣詡の庭中に三徑を通ぜし故事。
【三】伴　みちづれ。

豈得安居不擇鄰。豈安居するに鄰を擇ばざるを得んや。
何獨終身數相見。何ぞ獨り終身數相見るのみならんや、
子孫長作隔牆人。子孫長く隔牆の人と作らん。

【題義】元八（卷五に元八宗簡とある）の宅の鄰に卜居せんとして先づ此詩を贈つたのである。

【詩意】君と僕とは平生氣心がよく合つてゐるから、今度君の東鄰に僕が卜居しようとするのは、ただ僕の爲ばかりではない。君にも都合がよいだらう。明月の夜には俱に庭中の徑をぶらつくことも出來、綠楊は君の家と僕の家とで春色を賞することも出來る。ちよつと出遊するにも道連がほしいのだから、まして住宅をきめるには善い鄰を擇ばねばならない。居を定めた上は自分が生涯屢、君と相見るのみならず、子孫まで長く鄰同志の親みを結ぶであらう。

遊城南留元九李二十晚歸

城南に遊び、元九・李二十が晚に歸るを留む

老遊春飲莫相違。老遊春飲相違ふ莫れ、
不獨花稀人亦稀。獨り花の稀なるのみならず人も亦稀なり。

更勸殘杯看日影。　更に殘杯を勸めて日影を看る、
猶應趁得鼓聲歸。　猶應に鼓聲を趁ひ得て歸るべし。

【題義】長安の南郊に遊び、元稹・李逢吉の夕方歸らうとするのを引留めた詩である。

【詩意】老人は前途が短いのだから出來る時に春の遊をしておくがよい。今は早や花も人も少くなつたから、此際大に遊樂を貪らねばならない。因つて余は夕日を看つつ兩君に向つて更に杯を勸める。ゆつくりしてゐても初夜の鼓の鳴るまでには歸れるから、そんなに急ぐには及ばない。

廣宣上人以應制詩見示。因以贈之。詔許上人居安國寺

紅樓院。以詩供奉

廣宣上人應制の詩を以て示さる、因つて以て之に贈る、詔して上人に安國寺の紅樓院に居り詩を以て供奉することを許さる

道林談論惠休詩。　道林の談論惠休の詩、
一到人天便作師。　一たび人天に到りて便ち師と作る。
香積筵承紫泥詔。　香積の筵は承く紫泥の詔、

【字解】【一】應制詩　詔に應じて作つた詩。【二】安國寺　長安の長樂坊に在り、もと容宗の舊宅であつたが、景雲元年に寺を建てた。紅樓は容宗の舞樹であつた。【三】道林　寺の名。湖南省長沙縣の西なる嶽麓山下に在り。惠休は南北朝の宋の僧、詩文に巧なり。鍾嶸の詩品に「惠休淫靡、情其才に過ぐ」とある。江淹の雜體詩三十首に休上人に擬する詩あり。中に日暮碧雲合、佳人殊未來の句あり。【四】人天　君主をいふ。劉禹錫の賦に「天を人君となし、君を人天となす」とある。【五】香積　佛をいふ。維摩詰經に「佛香積と號す。其國の香氣十方諸佛世界人天の香に比し、最も第一となす」とある。紫泥詔　詔書をいふ。天子は紫色の印泥を用ふる故。【六】昭陽　殿の名。【七】銀鑰　錠前。【八】玉墀　玉を敷きつめた庭。【九】甘泉　宮の名。

昭陽歌唱碧雲詞。　昭陽の歌は唱ふ碧雲の詞。
紅樓許住請銀鑰。　紅樓住するを許されて銀鑰を請ひ、
翠輦陪行蹋玉墀。　翠輦行に陪して玉墀を蹋む。
惆悵甘泉曾侍從。　惆悵す甘泉に曾て侍從し、
與君前後不同時。　君と前後して時を同うせざるを。

【題義】廣宣上人が應制の詩を樂天に示したので樂天が此詩を贈つたのである。上人は詔ありて安國寺の紅樓院に住し、詩を以て供奉することを許された。

【詩意】廣宣上人は古の惠休上人にも比すべき詩の妙手なので、一たび陛下に拜謁するや、忽ち擧げられて天子の師となつた。詔を拜して宮中に入れば、宮中の歌唱が皆上人の詩風になり、錠前を戴いて紅樓に住し、玉輦に陪して玉敷の庭を蹋むであらう。自分も曾て甘泉宮に於て陛下に侍從したが、君と時を同うし得なかつたのを悲しんでゐる。

重過祕書舊房。因題長句

時爲贊善大夫。

重ねて祕書の舊房を過り、因つて長句を題す　時に贊善大夫たり。

閣前下馬思徘徊。　閣前馬より下り思うて徘徊す、
第二房門手自開。　第二の房門手自ら開く。
昔爲白面書郎去。　昔は白面の書郎と爲りて去り、
今作蒼頭贊善來。　今は蒼頭の贊善と作りて來る。
吏人不識多新補。　吏人識らず多くは新補、
松竹相親是舊栽。　松竹相親しむ是れ舊栽。
應有題墻名姓在。　應に墻に題する名姓の在る有るべし、
試將衫袖拂塵埃。　試みに衫袖を將て塵埃を拂ふ。

【題義】重ねて祕書省の舊室に至り、此詩を壁に題したのである。

【詩意】役所の前で馬から下り昔を偲んで暫く徘徊し、勝手を知つて居るので、第二の房門をば自ら開いてはひつた。昔は白面の一書生で此に奉職したが、今は胡麻鹽頭の贊善大夫になつた。今の役人だちは多くは新參で見覺えのある者はなく、松や竹は皆嘗て奉職してゐた頃に植ゑた物で特に懷かしい。

【字解】〔一〕祕書舊房　祕書省のもとの室。樂天は嘗て祕書省校書郎たり。
〔二〕白面書郎　無經驗の書生。
〔三〕蒼頭　胡麻鹽あたま。贊善は官名。皇太子に仕へて侍從翊贊する事を掌る。
〔四〕衫袖　上衣の袖。

以前に墻に題した己の姓名があるであらうと思つて、上衣の袖で塵を拂つて見た。

重到城七絶句

重ねて城に到る七絶句

【題義】重ねて長安の都に到りて作つた絶句七首。

見元九

元九を見る

容貌一日減一日。　容貌一日は一日よりも減れり、
心情十分無九分。　心情十分に九分無し。
每逢陌路猶嗟歎。　毎に陌路に逢ふも猶嗟歎す、
何況今朝是見君。　何ぞ況んや今朝是れ君を見るをや。

【題義】元稹に面會して作つた詩である。時に元稹は唐州（河南省南陽府）從事であつた。

【詩意】容貌は一日增しに衰へ、心持も九分は銷沈してしまつた。時時路上で逢つてさへ衰老を嘆くのであるから、まして久し振りで今朝君に面會したのであるから尙更である。

【字解】〔一〕陌路　市中の路。

高相宅

青苔故里懷恩地。
白髮新生抱病身。
涕淚雖多無哭處。
永寧門館屬他人。

【題義】高相の舊宅を訪うて作つた詩である。

【詩意】高相の舊宅を來り訪ひ昔の恩義を回想すれば、老病の身に取つて感慨無量である。併し涙が流れても哭することも出來ない。今では永寧里の舊宅は他人の所有に歸してゐるやうな始末だから。

張十八

諫垣幾見遷遺補。
憲府頻聞轉殿監。
獨有詠詩張太祝。
十年不改舊官銜。

【字解】【一】諫垣　諫官の役所。遺補は補任なり。
【二】憲府　御史臺。
【三】張太祝　張籍なり、太祝は官名。
【四】官銜　官職なり。

【題義】張籍（十八は排行）の昇進の出來ないのを憐んだ詩である。

【詩意】諫院にも度度補任があり、御史臺にも移動があつたのに、詩に巧な張太祝は、十年以來相變らず舊官に停滯してゐるのは氣の毒なことだ。

劉家花

劉家墻上花還發。
李十門前草又春。
處處傷心心始悟。
多情不及少情人。

【題義】劉氏の家の花を見て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】劉氏の家の墻の上の花が又開き、李十の家の門前の草も又春の粧を凝らしてゐる。處處の春色を見て心を傷ましめ、多情は少情の心易きに及ばないことを悟つた。

裴五

莫怪相逢無笑語。
感今思舊戟門前。
張家伯仲偏相似。
每見清揚一惘然。

裴五

怪む莫れ相逢うて笑語無きを、
今を感じ舊きを思ふ戟門の前。
張家の伯仲偏に相似たり、
清揚を見る毎に一に惘然。

【題義】裴五の死を悲んだ詩であらう。

【詩意】人に逢うても笑語せぬのを怪み給ふな。裴五の家の戟門の前に立てば今を感じ昔を思うて感慨に堪へないのである。張氏の兄弟はよく裴五と容貌が似てゐるので、その美しき眉目を見る毎に裴五を思ひ出して心を傷ましめる。

【字解】【一】戟門　戟を門前に立つる貴顯の家をいふ。唐では三品の家には戟を立てることを許した。
【二】伯仲　兄弟なり。
【三】清揚　美しき眉目。惘然は悲む貌。

仇家酒

年年老去歡情少。
處處春來感事深。
時到仇家非愛酒。
醉時心勝醒時心。

仇家の酒

年年老去りて歡情少し、
處處春來りて事を感ずること深し。
時に仇家に到るは酒を愛するに非ず、
醉時の心は醒時の心に勝れり。

【題義】仇氏の家の酒について述べた詩である。

【詩意】年年年老いて愉快も少くなるばかりだ。到處春色の滿つるを見ては感慨に堪へない。されば余が時時仇氏に往くのは酒が飲みたいからではなく、醉時の心は醒時に勝つて暫く憂さを霽らすことが出來るからである。

【字解】【一】仇家　仇は姓なり。

恒寂師

舊遊分散人零落。
如此傷心事幾條。
會逐禪師坐禪去。
一時滅盡定中消。

恒寂師

舊遊分散し人零落、
此の如く心を傷しむる事幾條ぞ。
會、禪師を逐うて坐禪し去れば、
一時に滅盡して定中に消えぬ。

【題義】恒寂師に就て坐禪することを述べた詩である。

【詩意】舊遊の友は分散し吾身はおちぶれてゐるので、傷心に堪へない事柄が數多くある。會、禪師に從つて坐禪すれば、忽ち煩惱が消滅して心がさつぱりする。

【字解】【一】零落　おちぶれてゐること。
【二】定　禪定。

靖安北街贈李二十

靖安の北街にて李二十に贈る

榆莢拋錢柳展眉。
兩人竝馬語行遲。
還似往年安福寺。
共君私試却廻時。

榆莢は錢を拋ち柳は眉を展ぶ、
兩人馬を竝べて語り行くこと遲し。
還似たり往年の安福寺、
君と共に私試して却廻する時。

【題義】靖安里の北街で李逢吉に贈つた詩である。

【詩意】今や春の末で榆樹が錢の如き莢を拋ち柳が眉の如き葉を展べてゐる。君と二人で馬を竝べて語りつつ行けば、馬の進みも至つて遲い。丁度先年君と共に私試して安福寺に歸つて來た時の景況に似てゐる。

【字解】【一】靖安　長安の里の名。卷十の夢與三李七・庾三十三二同訪三元九二に見ゆ。【二】李二十　李逢吉であらう。前に見ゆ。【三】榆莢　にれの實のさや。其形錢の如し。【四】私試　國子監で行ふ試驗。却廻　かへる。

重傷小女子

重ねて小女子を傷む

學人言語凭牀行。
嫩似花房脆似瓊。

人の言語を學び牀に凭りて行く、
嫩なること花房に似脆きこと瓊に似たり。

【字解】【一】嫩　柔弱なこと。花房は花ぶさ。【二】下殤　未だ成人せずして死する

纔知恩愛迎三歲。
未辯東西過一生。
汝異下殤應殺禮。
吾非上聖詎忘情。
傷心自歎鳩巢拙。
長墮春雛養不成。

纔に恩愛を知りて三歲を迎ふ、
未だ東西を辯へず一生を過す。
汝は下殤に異り應に禮を殺ぐべし、
吾は上聖に非ず詎ぞ情に忘れん。
心を傷しめて自ら歎く鳩巢の拙なきことを、
長く春雛を墮して養ひ成らず。

【題義】重ねて女子金鑾の死を悲んだ詩である。

【詩意】人の言葉を眞似し腰掛につかまつて歩くことが出來るやうになり、花の如く瓊の如く柔弱な少女であつた。三歲になつて恩愛の情もわかるやうになつたが、まだ東西もわからない中に死んでしまつた。お前は下殤ではないから喪禮も簡略にすべき筈であるが、吾は上聖ではないから悲を忘れることが出來ない。鳩のやうに巢を作るのが拙で、折角の雛を育て上げることも出來ないでしまつたことを自ら嘆いてゐる。

【字解】【一】嫩　柔弱なること。【二】下殤　未だ成人せずして死する者、十一歲より八歲に至るを下殤といふ。【三】鳩巢　詩經に、維鵲有巢、維鳩居之とありて、鳩は拙にして巢を作る能はず、鵲の作りし巢に居るといふ。

過顏處士墓

顏處士の墓を過る

向墳通徑沒荒榛。

墳に向ふ通徑は荒榛に沒し、

【字解】【一】顏處士　顏は姓。學德ありて官職に就かない人を處士といふ。【二】荒榛　草叢。

滿室詩書積闇塵。
長夜肯教黃壤曉。
悲風不許白楊春。
簞瓢顏子生仍促。
布被黔婁死更貧。
未會悠悠上天意。
惜將富壽與何人。

室に滿つる詩書は闇塵を積む。
長夜は肯て黃壤をして曉けしめんや、
悲風は白楊の春を許さず。
簞瓢の顏子は生仍促なり、
布被の黔婁は死して更に貧し。
未だ會せず悠悠たる上天の意、
惜みて富壽を將て何人に與ふる。

【題義】顏處士の墓を弔ひて作つた詩である。

【詩意】塚に向ふ徑は草藪に埋もれ、室内の書物は塵が積つてゐる。一旦死んでは又と再び還ることは出來ず、悲風が吹いて白楊に春がめぐつて來さうもない。君は顏回と同じく夭死し、黔婁と同じく死後まで貧しい。一體天帝は富と壽とを惜んで誰にやる積りなのであらうか、實に天帝の氣が知れない。

題周皓大夫新亭子二十二韻

周皓大夫の新亭子に題す二十二韻

【三】長夜　死をいふ。黃壤は黃泉の下。【四】白楊　墓上の木。【五】簞瓢　飯を盛る籠と水をいれる瓢。顏子は孔子の弟子顏回。論語に「賢なる哉回や一簞の食一瓢の飲、陋巷に在り」云云とある。【六】布被　ぬのこ。黔婁は齊國の隱士。【七】悠悠　遙遠の貌。上天は天帝。

東道常爲主。南亭別待賓。
規模何日創。景致一時新。
廣砌羅紅藥。疎窓蔭綠筠。
鑠開賓閣曉。梯上妓樓春。
置醴寧三爵。加籩過八珍。
茶香飄紫筍。膾縷落紅鱗。
輝赫車輿鬧。珍奇鳥獸馴。
獼猴看櫪馬。鸚鵡喚家人。
錦額簾高捲。銀花盞慢巡。
勸嘗光祿酒。許看洛川神。
（周兼光祿卿、有家妓數十人。）
斂翠凝歌黛。流香動舞巾。
裙翻繡鸂鶒。梳陷鈿麒麟。
笛怨音含楚。箏嬌語帶秦。

東道常に主たり、南亭別に賓を待つ。
規模何れの日か創むる、景致一時に新なり。
廣砌には紅藥を羅ね、疎窓には綠筠を蔭ふ。
鑠は賓閣の曉に開き、梯は妓樓の春に上る。
醴を置いて三爵を寧んじ、籩を加へて八珍を過す。
茶香紫筍に飄へり、膾縷紅鱗を落す。
輝赫車輿鬧しく、珍奇鳥獸馴る。
獼猴は櫪馬を看、鸚鵡は家人を喚ぶ。
錦額簾高く捲き、銀花盞慢く巡る。
勸めて光祿の酒を嘗めしめ、許して洛川の神を看しむ。
翠を斂めて歌黛を凝らし、香を流して舞巾を動かす。
裙翻へりて鸂鶒を繡し、梳陷りて麒麟を鈿にす。
笛怨んで音楚を含み、箏嬌びて語秦を帶ぶ。

侍兒催畫燭。醉客吐文茵。
投轄多連夜。鳴珂便達晨。
入朝紆紫綬。待漏擁朱輪。
貴介交三事。光榮照四鄰。
甘濃將奉客。穩煖不緣身。
十載歌鐘地。三朝節鉞臣。
愛才心倜儻。敦舊禮殷勤。
門以招賢盛。家因好事貧。
始知豪傑意。富貴爲交親。

【字解】【一】東道　宴會の主人をいふ。【二】規模　結構。【三】景致　風景趣致。【四】廣砌　廣い庭。紅藥は芍藥。【五】綠筠　綠の竹。【六】鏁　鍵なり。【七】醱　酒なり。三爵は三杯。禮記玉藻に「君子の酒を飲むや、一爵を受けて色酒如たり。二爵して言ふ、言これ禮のみ。三爵して油油として以て退く」とある。【八】籩　肉を盛る竹器。八珍は八種の美味。【九】腧樓　絲の如く細きなまず。【一〇】光祿　官名。光祿大夫。【一一】洛川神　伏羲氏の女、洛水に溺死して神となる。魏の曹植洛神賦を作る。【一二】鸂鶒　水鳥の名。【一三】鉶　象眼すること。【一四】文茵　美しきしとね。【一五】投轄　客を引留めること。轄は車のくさび。漢の陳遵大に客を會し、輒ち門を閉ぢ、車轄を取りて井中に投じ客をして去るを得ざらしむ。【一六】鳴珂　珂は馬を飾る玉。【一七】紫綬　紫の印綬。【一八】待漏　朝早く出仕し宮門の開く時刻を待つこと。朱輪は朱塗の車。【一九】貴介　貴人。三事は大夫をいふ。【二〇】十載　十年。【二一】節鉞臣　武臣。【二二】倜儻　卓異なり。【二三】殷勤　親切なこと。

【題義】光祿大夫（官名）周皓の新亭に題した詩である。

【詩意】大夫は客を好み常に主人として客を招待するが、今又南亭を構へて客を招宴することになつた。いつ頃から建築し始めたのか知らないが、今見れば景致が全く一新した。廣い庭には芍藥が列り、窓外には綠の竹が蔭を成し、曉に客室の錠前を開き、梯を上りて妓樓の春色を賞するといふ仕組である。獻酬皆禮に叶ひ、籩には美味を盛り、茶の香氣は筍に飄り、細き膾は紅鱗を落し、車輿雜鬧するも禽獸馴れて驚かず。簾を卷き盞を飛ばし、美酒を酌み美妓を見るを許す。美妓の粧はと見れば裙には鸂鶒の刺繡をなし、櫛には麒麟の象眼をなし、笛聲は楚怨を含み、秦箏は嬌鬟を帶びてゐる。夜に入りては侍兒燭を促し、醉客錦繡を吐き、客を引留めて歸るを許さず、曉に到るまで玉珂の聲が聞える。さて大夫は朝に入りて紫綬を紆ひ、朱塗の車に乘りて宮門の開くを待つ貴人であるが、よく諸大夫に交り、厚く客を待遇して、專ら己の身に厚くせず。三朝に仕へて武臣となり、賢士を招くを以て家は益〻榮えるが、客を好むので私財は富んでゐない。是に於て豪傑といふものは、交親の爲に富貴を用ひるものだといふことがわかる。

賦得聽邊鴻

邊鴻を聽くを賦し得たり

驚風吹起塞鴻羣。　驚風吹き起す塞鴻の羣、

【字解】【一】昭君　卷十四、王昭君二首を見よ。

半拂平沙半入雲。　半は平沙を拂ひ半は雲に入る。
爲問昭君月下聽。　爲に問ふ昭君の月下に聽くは、
何如蘇武雪中聞。　蘇武の雪中に聞くに何如。

【題義】邊地の雁聲を聽くといふ課題に就いて此詩を賦し得たといふのである。

【詩意】急風が邊塞の雁羣を吹き飛ばし、一半は沙漠の沙を吹き拂ひ、一半は高く雲中に吹き入る。かかる光景を見ながら昭君が月下に於て雁聲を聽いた悲しさと、蘇武が雪中に於て聽いた悲しさとはいづれが強かつたであらうか。

見楊弘貞詩賦。因題絶句以自諭

楊弘貞が詩賦を見、因つて絶句を題し以て自ら諭す

賦句詩章妙入神。　賦句詩章妙神に入る、
未年三十卽無身。　未だ年三十ならずして卽ち身なし。
常嗟薄命形憔悴。　常に嗟く薄命にして形の憔悴するを、
若比弘貞是幸人。　若し弘貞に比すれば是れ幸人。

【字解】【一】無身　老子に、及吾無身、吾有何患」とある。
【二】薄命　不幸なこと。憔悴は痩せ衰へること。

【三】蘇武　漢の武帝の時、中郎將を以て匈奴に使し、北海上人なき處に拘留せられ、雪を嚙み氈を呑み羝を牧すること十九年にして還る。

【題義】楊弘貞の詩賦を見、感ずる所を述べて此詩を作り、自ら警めたのである。

【詩意】弘貞の作つた賦と詩とは實に入神の妙がある。まだ三十にならないのに、能く吾身を外にして心の迷を超脱してゐるのは感ずべきことだ。余は常に不運にして身の痩せ衰へてゐることを嘆いてゐるが、弘貞に比すれば、まだまだ幸福だと謂つてよい。

病中早春

今朝枕上覺頭輕。　今朝枕上頭の輕きを覺え、
强起堦前試脚行。　强ひて起ちて堦前脚を試みて行く。
羶膩斷來無氣力。　羶膩斷ち來つて氣力なく、
風痰惱得少心情。　風痰惱み得て心情少し。
煖銷霜瓦津初合。　煖銷して霜瓦津初めて合ひ、
寒減氷渠凍不成。　寒減じて氷渠凍成らず。
唯有愁人鬢間雪。　唯愁人鬢間の雪のみあり、
不隨春盡逐春生。　春に隨ひて盡きず春を逐うて生ず。

【字解】【一】羶膩　濃厚な肉食。
【二】風痰　狂癇の病。
【三】氷渠　氷のはつた溝。
【四】愁人　樂天自ら謂ふ。

【題義】病中早春を迎へて作つた詩である。

【詩意】今朝は少し頭が輕いやうに思はれるので、强ひて起きて脚試に庭先を歩いて見た。久しく肉類などを食はないので氣力が衰へ、狂癇の結果何を見ても感興を動かさない。煖氣が瓦の霜を溶して露が結び、寒威がゆるんだので溝も凍らない。ただ我が鬢の雪は春が盡きても盡きないのに、生える時は春と倶に生える。困つたものだ。

送人貶信州判官

人の信州判官に貶せらるるを送る

地僻山深古上饒。　土風貧薄道程遙。
不唯遷客須栖屑。　見說居人也寂寥。
溪畔毒沙藏水弩。　城頭枯樹下山魈。
若於此郡爲卑吏。　刺史廳前又折腰。

【字解】【一】信州　江西省上饒縣の地。判官は州縣の簿書を掌る官。【二】遷客　貶せらるる人。栖屑は悲むこと。【三】居人　土人。【四】水弩　蟲の名。水中に在り、沙を含んで人を射る。【五】山魈　南唐記に「山間に木客あり、形骸皆人なり。ただ鳥爪のみ。高樹に棲くひ、樹を伐れば必ず人を害す」とある。【六】此郡　信州を指す。【七】刺史　州の長官。

【題義】人の信州判官に貶せられるのを送つた詩である。

【詩意】信州は山間の僻地で昔は上饒と謂つた。土地が貧弱で道も遠い。されば遷客たる君が悲むのは勿論のことで、土地の人さへ生氣がなくなつてゐる。溪畔の毒沙には水弩が潛んで居り、城頭の古木には山魈が棲んでゐる。其上こんな處の卑吏になると、刺史の前に腰を折つてぺこぺこせねばならない。氣の毒なことだ。

曲江醉後贈諸親故

曲江にて醉後諸〻の親故に贈る

郭東丘墓何年客。　江畔風光幾日春。
只合殷勤逐杯酒。　不須疎索向交親。
中天或有長生藥。　下界應無不死人。

【字解】【一】曲江　長安の遊園地。前に見ゆ。【二】郭東　長安城外。【三】殷勤　ねんごろに。【四】疎索　疎闊なり。【五】下界　人間世界。

除却醉來開口笑。醉ひ來りて口を開いて笑ふを除却せば、
世間何事更關身。世間何事か更に身に關らん。

【題義】曲江に遊んで醉後に親友等に贈つた詩である。

【詩意】長安の郊外に纍纍としてゐる墓の主は、いつの世の人かといへば、つい近頃まで此世にゐた人だ。曲江のほとりの春色も瞬く間に去つてしまふのである。だから親友相會して酒杯を俱にするがよいので、疎闊にして空しく春を過すべきではない。天上には長生の藥があるかも知れぬが、下界には不死の人などはありはしない。如かず生前一杯の酒だ。醉うて口を開いて笑ふのが吾願ひで、それをおいては世上の事は吾が頓著する所ではない。

和元八侍御升平新居四絶句　時方與元八卜鄰

元八侍御が升平の新居に和する四絶句　時に方に元八と鄰をトす

【題義】元八侍御（八は排行、侍御は官名）が長安の升平里に新居を構へたのに和した詩で、當時樂天も其鄰に住んでゐた。

看花屋

忽驚映樹新開屋。忽ち驚く樹に映じて新に屋を開く、
却似當簷故種花。却つて似たり簷に當りて故より花を種るしに。
可惜年年紅似火。惜むべし年年紅火に似たり、
今春始得屬元家。今春始めて元家に屬するを得たり。

【題義】牡丹の花を看る爲の亭に就いて述べた詩である。

【詩意】樹に映じて新に亭が開かれた。丁度簷前に花があるのは、豫定して植ゑたもののやうだ。年年火のやうに赤く咲く牡丹の花が、今年始めて元家の所有に歸したのは悅ばしい。

累土山

堆土漸高山意出。堆土漸く高うして山意出づ、
終南移入戶庭間。終南移し入る戶庭の間。
玉峯藍水應惆悵。玉峯藍水應に惆悵すべし、
恐見新山忘舊山。恐らくは新山を見て舊山を忘れんことを。

元八舊居在藍田山。

【字解】【一】累土山　築山。
【二】終南　長安の南に在る山の名。
【三】玉峯　藍田山をいふ。此山に美玉を產するを以てなり。藍水は藍田山下の川。

【題義】元八の新居の築山に就いて述べた詩である。

【詩意】土を盛り上げて段段高くしたので本當の山らしくなり、丁度終南山を庭の中に移し入れたやうだ。玉峯や藍水が元八の新山を見て舊山を忘れてしまふであらうと悲むであらう。

高亭

亭脊太高君莫拆。　亭脊太だ高きも君拆くこと莫れ、
東家留取當西山。　東家留め取つて西山に當つ。
好看落日斜銜處。　好し落日の斜に銜む處を看れば、
一片春嵐映半環。　一片の春嵐半環に映ず。

【題義】高亭に就いて述べた詩である。

【詩意】亭の脊が非常に高いけれども切つて低くせぬがよい。東鄰の僕の家ではそれを西山に見立てて眺めてゐるのだ。そこへ西日の斜に傾いた時に、一片の春嵐が半環に映じて實に美しい。

【字解】【一】東家　東鄰。樂天の家を指す。前の欲下與三元八一ト鄰先有二是贈一を見よ。

白金換得青松樹。　白金換へ得たり青松樹、
君既先栽我不栽。　君は既に先づ栽ゑたれども我は栽ゑず。
幸有西風易憑仗。　幸に西風の憑仗し易きあり、
夜深偸送好聲來。　夜深けて偸に好聲を送り來る。

【題義】元八が新居の松樹に就いて述べた詩である。

【詩意】松の樹を買つて來て、君は既に植ゑたが僕はまだ植ゑない。幸に西風が僕に同情して、夜深になると窃に松風の美音を送つてよこす。

【字解】【一】憑仗　よりたのむ。

醉後却寄元九

蒲池村裏匆匆別。　蒲池村裏匆匆として別れ、
灃水橋邊兀兀廻。　灃水橋邊兀兀として廻る。
行到城門殘酒醒。　行きて城門に到れば殘酒醒め、
萬重離恨一時來。　萬重の離恨一時に來る。

【題義】元九（元稹）が通州（四川省に屬す）司馬に貶せらるる事になつたので、元和十年三月三十

【字解】【一】蒲池　村の名か。匆匆は急遽の義。
【二】灃水　源を秦嶺に發し、西北流して長安を經、渭河に注ぐ。兀兀は心を用ふる貌。
【三】城門　長安の城門。

日（卷十七、十年三月三十日別二微之於灃上一云云と題する詩參照）灃水のほとりで離宴をなし、長安に歸りて醉後に此詩を寄せたのである。

【詩意】蒲池村でせわしく君と別を告げ、灃水の橋をとぼとぼと渡つて獨り歸つた。長安の城門まで來ると酒が急に醒めてしまつて、君と別の悲さが一時にこみあげて來た。

重寄　一作重寄二元九一

重ねて寄す　一に重れて元九に寄すに作る

(一)蕭散弓驚鴈。分飛劍化龍。
(二)悠悠天地內。不死會相逢。

蕭散にして弓鴈を驚かし、分飛して劍龍に化す。
悠悠たる天地の內、死なずば會ず相逢はん。

【字解】【一】蕭散　しづかにしてひまなこと。【二】劍化龍　寰宇志に、龍泉縣の南五里の水、以て劍を淬すべし。昔人水に就いて之を淬す。劍龍に化して去る。龍泉は楚の分なり、通州も亦然り、故に元九が通州に貶せられしことをいふ。【三】悠悠　遙なる貌。

【題義】重ねて元稹に寄せた詩である。

【詩意】靜な穩な時に俄に弓弦の音が響き渡り、鴈（樂天幷に元九に喩ふ）が驚いて分れ飛び、君は通州に貶せられる事になつた。天下は廣大無邊ではあるが、命のあるうちに又必ず相逢ふであらう。

李十一舍人松園飲小酎酒。得二元八侍御詩。敍云

在二臺中推院一。有鞫獄之苦。卽事書懷。因酬二四韻一

李十一舍人の松園にて小酎酒を飲む、元八侍御が詩を得たり、敍に云はく臺中推院に在り、獄を鞫するの苦ありと、事に卽き懷を書し、因つて四韻を酬ゆ

(一)愛酒舍人開小酌。
能文御史寄新詩。
亂松園裏醉相憶。
古柏廳前忙不知。
早夏我當逃暑日。
(二)晚衙君是慮囚時。
唯應清夜無公事。
新草亭中好一期。

酒を愛する舍人小酌を開き、
文を能くする御史新詩を寄す。
亂松園裏醉ひて相憶ひ、
古柏廳前忙しくして知らず。
早夏我暑を逃るる日に當り、
晚衙君是れ囚を慮る時。
唯應に清夜公事無かるべし、
新草亭中好し一たび期せん。

元於二升平宅一新立二草亭一。

【題義】李十一舍人（李建、字は杓直、中書舍人たり）の松園で小酎酒（酒の名）を飲んだ。時に元八侍御（八は排行、侍御は侍御史の略で官名）から詩をよこした。その序に今御史臺の推院（罪人

【字解】【一】古柏廳　御史の役所には柏樹あり。
【二】晚衙　夕方に役人の事務を執ること。

を取調べる處）にゐて罪人を取調べてゐるから宴に列することは出來ないと書いてある。因つて事の次第を述べて四韻八句の律詩を元八に酬いたといふのである。

【詩意】酒好な李舍人が小宴を催した所が、詩の上手な元侍御が斷りの詩をよこした。吾吾が此松園の中に醉うて君を憶つて居るのに、君は職務多忙で其れとも知らずにゐる。今や夏の初で我等は暑を避けてゐるのに、君は夕方まで白洲で罪人を取調べてゐる。併し夜になれば公用もあるまいから、君の草亭に往つて又一酌致さうと思ふ。

重到華陽觀舊居

重ねて華陽觀の舊居に到る

憶昔初年三十二。　憶ふ昔初めて年三十二、
當時秋思已難堪。　當時秋思已に堪へ難し。
若爲重入華陽院。　若爲ぞ重ねて華陽院に入る、
病鬢愁心四十三。　病鬢愁心四十三。

【題義】重ねて華陽觀の舊居を訪ひ感慨を述べた詩である。

【詩意】憶へば年三十二の時に此觀に籠居し、受驗準備の爲に大に勉強したもので、その頃でも秋になると感慨に堪へなかつた。今や身は衰老し心は愁に鎖され、四十三にもなつて格別花實も咲かぬ狀態で、なぜ又思出の深い此觀に來たのであらう。いつそ來なければよかつた。

【字解】【一】華陽觀　制舉に應ずる前、受驗準備の爲に樂天が引籠つてゐた道觀の名。

答勸酒

酒を勸むるに答ふ

莫怪近來都不飲。　怪む莫れ近來都て飲まざるを。
幾回因醉却沾巾。　幾回か醉に因りて却つて巾を沾す。
誰料平生狂酒客。　誰か料らん平生の狂酒客、
如今變作酒悲人。　如今變じて酒に悲む人と作らんとは。

【題義】人の酒を勸めるのに答へた詩である。

【詩意】近頃僕が酒を飲まないのを怪み給ふな。醉ふと悲くなつてたまらないのだ。これまで狂酒客の名を取つた男が、今は酒に悲む人とならうとは、誰も思ひ設けぬことであらう。

【字解】【一】巾　手巾。
【二】如今　今。

題王侍御池亭

王侍御の池亭に題す

朱門深鎖春池滿。　朱門深く鎖して春池滿つ、
岸落薔薇水浸莎。　岸は薔薇を落して水は莎を浸す。

【字解】【一】朱門　朱塗の門。
【二】莎　草の名。子供等が莖を裂きて蚊帳の形を作りて戯ぶより、カヤ

畢竟林塘誰是主。　畢竟林塘誰か是れ主なる、
主人來少客來多。　主人來ること少くして客來ること多し。

【題義】王侍御（王は姓、侍御は官名）の池亭に題した詩である。

【詩意】朱塗の門が深く鎖され、春の池には水が滿ちてゐる。岸には盛を過ぎた薔薇の花が落ち、水の中には莎草が生えてゐる。この池亭は誰が主人なのだかわからない。主人の來ることは少くて客ばかり來てゐるから。

【字解】【一】朱紱　赤色の印綬。仙郎は員外郎をいふ。白雪は、すぐれてよき詩をいふ。宋玉の文に「陽春・白雪、國中屬して和する者數十人に過ぎず」とある。【二】如今　今。何は梁の何遜に對していふ。何ツリサウと呼ぶ。

聽水部吳員外新詩。因贈絶句

水部吳員外の新詩を聽き、因つて絶句を贈る

朱紱仙郎白雪歌。　朱紱の仙郎白雪の歌、
和人雖少愛人多。　和する人少しと雖も愛する人は多し。
明朝說向詩家道。　明朝說きて詩家に向ひて道はん、
水部如今不姓何。　水部は如今何を姓とせずと。

【題義】水部員外郎（官名）吳氏の新作の詩を歌ふを聽き、此絶句を贈つて其巧をほめたのである。

【詩意】吳水部の詩は非常にすぐれた詩で、倡和する人は少いが愛誦する人は多い。自分も明朝詩人仲間に披露しよう。昔は何水部と謂つて稱讚したが、今の水部は何といふ姓ではなくて吳といふ姓であると。

【字解】【一】一種　同一の意。【二】偏梁　偏鄙な梁州。梁州は今の陝西の漢中道及び四川省で、通州に行く途中。閣道は棧道。通州は元稹の貶せられて行く地。前に見ゆ。

雨夜憶元九

雨夜元九を憶ふ

天陰一日便堪愁。　天陰ること一日なるも便ち愁ふるに堪へたり、
何況連宵雨不休。　何ぞ況んや連宵雨休まざるをや。
一種雨中君最苦。　一種雨中君最も苦まん、
偏梁閣道向通州。　偏梁の閣道通州に向ふ。

【題義】雨の夜に元九を憶うて作つた詩である。

【詩意】天が一日曇つてさへも氣がくさくさするのに、此頃のやうに連夜の雨ではやりきれない。同じ雨の中でも君は特に苦んでゐるであらう。偏鄙な梁州の棧道を經て通州に向ふのであるから。

雨中攜元九詩訪元八侍御

雨中元九の詩を攜へて元八侍御を訪ふ

律詩　聽水部吳員外新詩因贈絶句　雨夜憶元九　雨中攜元九詩訪元八侍御

微之の詩卷憶同開。　微之の詩卷同く開かんことを憶ふ、
暇日多應不入臺。　暇日には多く應に臺に入らざるべし。
好句無人堪共詠。　好句人の共に詠ずるに堪ふる無し、
衝泥蹋水就君來。　泥を衝き水を蹋み君に就き來る。

【題義】雨を冒し元稹の詩を攜へて元八侍御を訪うたことを述べた詩である。

【詩意】微之の詩卷をば君と一緒に展讀しようと思ひ、今日は休日だから多分役所へも行くまいと思つて、こんな結構な詩を共に諷詠するに足る人は外にないので、惡路を冒して君の處へ來たのである。

【字解】【一】微之　元稹の字。
【二】臺　御史臺。元八の務めてゐる役所。

贈楊祕書巨源

楊嘗有贈盧洛州詩云三刀夢益州一一箭取遼城由是知名。

楊祕書巨源に贈る　楊嘗て盧洛州に贈る詩あり、云く三刀夢益州、一箭遼城を取る、と、是に由りて名を知らる

早聞一箭取遼城。　早に聞く一箭遼城を取るを、
相識雖新有故情。　相識るは新なりと雖も故情有り。
清句三朝誰是敵。　清句三朝誰か是れ敵、
白鬚四海半爲兄。　白鬚四海半兄と爲る。

貧家薤草時時入。　貧家草を薤ぎて時時入り、
瘦馬尋花處處行。　瘦馬花を尋ねて處處に行く。
不用更教詩過好。　更に詩をして好きに過ぎしむるを用ひず、
折君官職是聲名。　君が官職を折くは是れ聲名。

【題義】楊巨源に贈つた詩である。巨源、字は景山、河中の人。貞元五年の進士で、時に祕書郎であつた。後太常博士、禮部員外郎を歷て出されて鳳翔少尹となり、また召されて國子司業となり、年七十を以て致仕した。歸る時、時の宰相が天子に白して河中少尹となし、終身其祿を給した。韓退之の文に送楊少尹序といふのがある。巨源の楊柳と題する、水邊楊柳鞠塵絲、立馬頻折一枝唯有春風最相惜、殷勤更向手中吹。といふ詩は特に有名である。

【詩意】君の一箭遼城を取るといふ詩は早くから聞いて知つて居る。されば識り合ひになつたのは新しいが精神的には久しい交誼があつたのである。君の妙詩は三朝にわたりて敵する者なく、既に白髮の長老になつて天下到處兄株で通れる。併し何日も貧乏で家の周圍は草茫茫であるが、聊かも意に介せずに瘦馬に乘つて花を尋ねまはつてゐる。さて此上にも詩を上手に作ることはせぬがよい。君は詩名が高い爲に却つて昇進が出來ないのであるから。

和武相公感韋令公舊池孔雀（同用深字。）

武相公の韋令公が舊池の孔雀に感ずるに和す　同じく深の字を用ふ

索寞少顏色。池邊無主禽。　索寞として顏色少し、池邊禽を主るもの無し。
難收帶泥翅。易結著人心。　泥を帶ぶる翅を收め難く、人に著く心を結び易し。
頂毳落殘碧。尾花銷闇金。　頂毳は殘碧を落し、尾花は闇金を銷す。
放歸飛不得。雲海故巢深。　放ち歸すも飛び得ず、雲海故巢深し。

【字解】【一】索寞　孔雀の勢のよくないこと。【二】頂毳　頭上の柔毛。【三】雲海　孔雀は南方の産なる故かくいふ。

【題義】武相公とは武元衡を指して言ふ。元衡は元和二年に門下侍郎平章事になつたから相公と言つたのである。元衡は後出されて劍南節度使となつた。全唐詩に、西川使宅、有二韋令公時孔雀存一焉、暇日與二諸公一同翫、座中兼故府賓妓與嗟久レ之、因賦二此詩一、用廣二其意一と題する詩が載せてある。韋令公は韋皐を指すのであらう。令公とは中書令の尊稱である。韋皐は貞元の初、劍南西川節度使となつた。

【詩意】この孔雀は勢がよわつて見る影もなく、池邊に世話する人もゐない。泥のついた翅を整へることも出來ず、何處となく人なづこい感じを抱いてゐるらしい。頭上の柔毛は僅に碧色を存し、尾の花模樣は金色が暗くなつた。放しても飛ぶ力もないから、雲海遠き古巢には歸れさうもない。

寄生衣與微之因題封上

生衣を寄せて微之に與へ、因つて封上に題す

淺色縠衫輕似霧。　淺色の縠衫霧よりも輕く、
紡花紗袴薄於雲。　紡花の紗袴雲よりも薄し。
莫嫌輕薄但知著。　輕薄を嫌ふこと莫く但著ることを知れ、
猶恐通州熱殺君。　猶恐らくは通州君を熱殺せんことを。

【字解】【一】生衣　カタビラの如き夏著。微之は元稹の字。【二】縠衫　絹縮の上衣。【三】紡花紗袴　花を織出した紗の袴。【四】熱殺　殺は助辭。意味なし。

【題義】夏著を通州に居る元稹に贈るについて、其封包の上に書きつけた詩である。

【詩意】薄色の絹縮の上衣は霧よりも輕く、花の模樣を織り出した紗の袴は雲よりも薄い。輕く薄きを嫌はず著てくれよ。通州の暑熱がさぞ君を惱ますであらうから。

白牡丹

白花冷淡無人愛。　白花冷淡人の愛する無きも、
亦占芳名道牡丹。　亦芳名を占めて牡丹と道ふ。
應似東宮白贊善。　應に東宮の白贊善の、
被人還喚作朝官。　人に還朝官と喚び作さるるに似たるべし。

【字解】【一】冷淡　淡泊で見ばえのないこと。【二】東宮　皇太子。白贊善は太子左贊善大夫白樂天。

【題義】白い花の咲く牡丹のことを述べた詩である。

【詩意】白い花は淡泊で見ばえがないので人から珍重せられないが、それでも花は花であるから牡丹の名を冒してゐる。丁度この太子左贊善大夫たる白居易でも、やはり人竝に朝官と喚ばれてゐるやうなものだ。

夢舊

舊を夢む

別來老大苦修道。　別來老大苦に道を修す、
鍊得離心成死灰。　鍊り得て離心死灰と成る。
平生憶念消磨盡。　平生憶念消磨し盡きぬ、
昨夜因何入夢來。　昨夜何に因りてか夢に入つて來れる。

【題義】往日の事を夢に見て作つた詩である。

【詩意】別れて以來老書生になつて大に道敎を修行し、精神を鍛鍊した結果、離別を悲む心も死灰のやうになつた。平生何等の憶念もないのに、なぜ昨夜は昔の事を夢に見たのであらう。

【字解】【一】老大　老書生。修道は道敎を修行する。【二】離心　離別を悲しむ心。死灰は冷えきつた灰、何の感じもないこと。

戲題盧祕書新移薔薇

戲に盧祕書が新に移せる薔薇に題す

風動翠條腰嫋娜。　風は翠條を動かして腰嫋娜、
露垂紅蕚淚闌干。　露は紅蕚に垂れて淚闌干。
移他到此須爲主。　他を移して此に到りて須らく主と爲るべし、
不別花人莫使看。　花を別たざる人には看しむる莫れ。

【題義】戲に盧祕書が新に移し植ゑた薔薇の花に題した詩である。

【詩意】風は綠の枝を動かして美人の腰のやうにしなやかである。露は紅の花房に垂れて淚の流れるやうである。此花を移し植ゑて主人公となり、花を識別することの出來ない人には見せぬがよい。

【字解】【一】翠條　綠の枝。嫋嫋はしなやかな貌。【二】闌干　淚の流るる貌。

曲江夜歸。聞元八見訪

曲江より夜歸り、元八の訪はれしを聞く

自入臺來見面稀。　臺に入りてより來面を見ること稀なり、
班中遙得揖容輝。　班中遙に容輝に揖することを得たり。
早知相憶來相訪。　早く知る相憶ひて來りて相訪へるを、
悔待江頭明月歸。　悔ゆらくは江頭の明月を待ちて歸りしを。

【題義】曲江から夜自宅に歸り、留守中に元八の來り訪ひし由を聞いて作つた詩である。

【字解】【一】曲江　前に見ゆ。【二】臺　御史臺。役所の名。元八の侍御史たること前に見ゆ。【三】班中　已の席次。官列。容輝は元八の容貌。

【詩意】君が侍御使になつてからは相見ることも稀になり、ただ僕の役所から遙に君の姿を拜するばかりだ。君が僕の留守中に僕を憶うて來り訪ひし由を聞き、曲江に月の出るまで遊んでゐたのを悔いた。

苦熱。題恆寂師禪室

熱に苦み、恆寂師の禪室に題す

人人避暑走如狂。人人暑を避け走りて狂するが如し、
獨有禪師不出房。獨禪師の房を出でざる有り。
可是禪房無熱到。是れ禪房に熱の到ること無かるべけんや、
但能心靜卽身涼。但能く心靜なれば卽ち身涼し。

【字解】【一】禪房　禪室。

【題義】暑氣に苦み恆寂禪師の禪室に題した詩である。

【詩意】人人皆暑を避けて狂奔してゐるのに、禪師は禪房にひきこもつて行ひすましてゐる。禪房に暑氣が侵入せぬ譯ではなく、ただ心が靜かであるから身も涼しいのであらう。

微之到通州日。授館未安。見塵壁間。有數行字。讀之卽僕舊詩。其落句云。綠水紅蓮一朶開。千花百草無顏色。然不知題者何人也。微之吟歎不足。因綴一章。兼錄僕詩本同寄。省其詩。乃是十五年前。初及第時。贈長安妓人阿軟絕句。緬思往事。杳若夢中。懷舊感今。因酬長句

微之通州に到りし日、館を授けられて未だ安んぜず、塵壁の間を見るに數行の字あり。之を讀めば卽ち僕の舊詩なり。その落句に云く、綠水紅蓮一朶開、千花百草無顏色と。然れども題する者の何人なるを知らざるなり、微之吟歎すれども足らず、因つて一章を綴り、僕の詩本に兼ね錄して同じく寄す、其詩を省るに、乃ち是れ十五年前、初めて及第せし時、長安の妓人阿軟に贈りし絕句なり。緬に往事を思ふに、杳として夢中の若し。舊を懷ひ今に感じ、因つて長句を酬ゆ

十五年前似夢遊。十五年前夢遊に似たり、
曾將詩句結風流。曾て詩句を將て風流を結ぶ。
偶助笑歌嘲阿軟。偶〻笑歌を助けて阿軟を嘲る、

【字解】【一】青衫司馬　青衫は司馬の服。司馬は官名。時に元稹は通州司馬であつた。

可レ知傳誦到二通州一。　知る可し傳誦せられて通州に到りしを。
昔教二紅袖佳人唱一。　昔は紅袖の佳人をして唱へしめ、
今遣二青衫司馬愁一。　今は青衫の司馬をして愁へしむ。
惆悵又聞題處所。　惆悵して又聞く題する處の所、
雨淋江館破墻頭。　雨は淋ぐ江館破墻の頭。

【題義】元稹の通州（今の四川省東川道）司馬となりて官舍に入るや、塵壁の間に數行の文字あるを見た。それは余の舊詩であつた。その落句（轉結二句）に綠水紅蓮一朶開、千花百草無二顏色一とある。誰が壁に題したのかはわからない。元稹は吟嘆して尙ほ足れりとせず。余の詩本に書き添へて余に寄せた。余因つて其詩を回想するに、十五年前初めて及第した時、長安の妓女の阿軟といふ者に贈つた絕句である。今から昔を思へば全く夢のやうである。因つて感懷を書して七律一首となし、之を元稹に酬いた。

【詩意】今から思へば十五年前の事はまるで夢のやうだ。その頃詩句を以て風流の緣を結んだこともあつた。偶〻笑歌の資として阿軟をひやかした詩が、いつしか傳誦せられて通州まで傳つたと見える。昔は美人の口の端に上つたのが、今は通州司馬の愁の種となつた。おまけに通州司馬は其官舍の破墻の頭に悲の心を抱いて雨の降る音を聞いてゐるとは、實に今昔の感に堪へない。

【二】江館　江邊の官舍。通州司馬の館を指す。

得二微之到レ官後書一備知二通州之事一。悵然有レ感。因成四章一

微之が官に到りし後の書を得て、備に通州の事を知り、悵然として感あり、因つて四章を成す

來書子細說二通州一。　來書子細に通州を說く。
州在二山根峽岸頭一。　州は山根峽岸の頭に在り。
四面千重火雲合。　四面千重火雲合ひ、
中心一道瘴江流。　中心一道瘴江流る。
蟲蛇白晝攔二官道一。　蟲蛇は白晝官道を攔り、
蚊蚋黃昏撲二郡樓一。　蚊蚋は黃昏郡樓を撲つ。
何罪遣二君居此地一。　何の罪ありてか君をして此地に居らしむる、
天高無レ處問二來由一。　天高くして來由を問ふに處無し。

【題義】元稹が通州に著いてからの手紙によつて、詳細に通州の樣子がわかつた。因つて心を悲ましめ、四首の詩を作つた。

【詩意】君の手紙に巨細に通州の樣子が書いてある。それに因つて見ると通州は山の麓の峽の頭に在

【字解】【一】火雲　夏日の雲。
【二】一道　一筋。瘴江は毒氣を含んだ川。
【三】郡樓　州廳。

つて、四方を見れば火のやうな雲が山又山を圍み、その眞中に一筋の瘴江が流れ、蟲や蛇が書も官道を遮り、夕方になれば蚊軍が州廳まで侵入する。誠に厭な處だ。一體何罪があつて君をこんな處に置くのであらうか。天に問はうとしても天は茫茫として其來由を聞くことが出來ない。

〔二〕

(一)匜匝巔山萬仞餘。
人家應似甑中居。
寅年籬下多逢虎。
(二)亥日沙頭始賣魚。
衣斑梅雨長須熨。
米澀畬田不解鉏。
努力安心過(三)三考。
已曾愁殺李尚書。

李嶺尚書、先貶二此州一身歿二於後處一。

匜匝せる巔山萬仞餘、
人家應に甑中に居るに似たるべし。
寅年籬下多く虎に逢ひ、
亥日沙頭始めて魚を賣る。
衣斑にして梅雨長く須らく熨すべし、
米澀りて畬田鉏を解かず。
努力安心して三考を過ぎよ、
已に曾て李尚書を愁殺せしむ。

【字解】【一】匜匝　周匝なり。【二】亥日　洪氏職方乘に「嶺南の村落に市あり、之を虛といふ。その常に會せず虛日多きを以てなり。西蜀には痎といふ。痎疾の間えて復作るが如きを言ふ。江南には疾を以て稱するを惡み、因つてただ亥といふ」とある。市場の開く日。【三】畬田　新に開墾した田地。【四】三考　官吏の功績を考査すること。書經舜典に「三載績を考へ、三考して幽明を黜陟す」とある。【五】李尚書　名は賞、嘗て通州に貶せられ、通州で死んだ。恐殺の殺は助辭で意味はない。

【詩意】高い山が四方を圍んでゐるので、家の中にゐると甑の中にゐるやうに蒸し暑く、寅年には籬の下まで虎が潛み來り、市場の開ける日にのみ沙頭で魚を賣る。梅雨の時には著物が黴びて熨斗をかけねばならぬやうになり、收穫が乏しいので百姓は絕えず耕作せねばならない。君も心を安んじ職務に努めて首尾よく考査を通過し、早く別な處へ轉任になるやうにするがよい。そこは曾て李尚書をして愁へしめた處だから。

〔三〕

人稀地僻醫巫少。
夏旱秋霖瘴瘧多。
老去一身須愛惜。
(三)別來四體得如何。
(四)侏儒飽笑東方朔。
(五)薏苡讒憂馬伏波。

人稀に地僻にして醫巫少し、
夏は旱し秋は霖して瘴瘧多し。
老い去りて一身須らく愛惜すべし、
別來四體如何なるを得たる。
侏儒は飽きて東方朔を笑ひ、
薏苡讒せられて馬伏波を憂へしむ。

【字解】【一】醫巫　藥を以て病を除くを醫といひ、神に禱りて病を除くを巫といふ。【二】瘴瘧　惡疫。【三】別來　別れて以來。四體は身體。【四】侏儒　一寸法師、君側に仕へて伎藝を演ずる賤臣。漢書東方朔傳に「侏儒は長三尺にして俸は一囊の粟。臣朔は長九尺なるも亦一囊の粟なり。侏儒は飽きて死せんと欲し、臣朔は飢ゑて死せんと欲す」とあ

莫遣沈愁結成病。　沈愁をして結びて病と成らしむる莫れ、
時時一唱濯纓歌。　時時一唱せよ濯纓の歌。

より還るとき薏苡を後車に載す。譜する者以爲らく、載する所皆明珠なりと」とある。馬援は伏波將軍となり交趾を征伐した。【六】濯纓歌「滄浪の水清まば、以て我が纓を濯ふべし。滄浪の水濁らば、以て我が足を濯ふべし」といふ歌。時世時節に順應する意に取る。

【詩意】通州は住む人も稀に地も偏鄙で醫者なども少いが、夏は旱が續き秋は長雨が降つて、惡疫が多い。年を取つては身體を大事にしなければいかぬが、別れてから君の健康はどうだ。今やつまらぬ奴がはびこり、兎もすれば讒謗を被る虞がある。君もくよくよして病氣などにならぬやうに、たまには濯纓の歌でも歌つて氣を霽らすがよい。

る。【五】薏苡　すすだま。藥になる草なり。後漢書に「馬援交趾の軍

〔四〕

通州海内恓惶地。　通州は海内恓惶の地、
司馬人間冗長官。　司馬は人間冗長の官。
傷鳥有弦驚不定。　傷鳥弦有り驚きて定らず、
臥龍無水動應難。　臥龍水無く動くこと應に難かるべし。

【字解】【一】恓惶　人を憂へしめること。【二】人間　世間。冗長は餘計なもの。むだなもの。

〔四〕

劍埋獄底誰深掘。　劍は獄底に埋もれて誰か深く掘らん、
松偃霜中盡冷看。　松は霜中に偃して盡く冷に看る。
擧目爭能不惆悵。　目を擧げて爭か能く惆悵せざらん、
高車大馬滿長安。　高車大馬長安に滿つ。

【詩意】通州は天下中の厭な土地で、司馬は世間で幅のきかぬ官である。況んや傷鳥の弓弦の音にも驚くが如く、常に讒を恐れ、才能を振はうとすれば後援者もなく、水のない龍の如くである。偉才を抱いて沈淪してゐるが誰も引立ててくれる者はなく、霜中の松の如く節操を守つてゐるが人皆冷視して顧みない。目を擧げて長安の都を見れば、つまらぬ奴が高車肥馬を驅りて時めいてゐる。どうして悲嘆せずにゐられようか。

【三】劍埋獄底　前の酬盧祕書二十韻の豐獄を見よ。

病中答招飲者

病中、招飲せんとする者に答ふ

顧我鏡中悲白髮。　我を顧るに鏡中白髮を悲む、
儘君花下醉青春。　儘君花下青春に醉ふ。
不緣眼痛兼身病。　眼痛と身病とに緣らずんば、

可是樽前第二人。是れ樽前第二の人なるべけんや。

【題義】樂天を招いて酒を飲まんとする者あり、樂天は病の爲に之を斷つたのである。

【詩意】我は鏡に照して白髮を悲んでゐるが、君は花の下で酒を飲み大に青春を樂まうとする。眼痛や病氣さへなければ、年は取つても酒では第二には下らないのだが、遺憾ながら病氣で馳せ參ずることが出來ない。

鸞子樓　三首幷序

鸞子樓　三首幷に序

徐州故張尚書有愛妓。曰盼盼。善歌舞。雅多風態。予爲校書郎時。遊徐泗間。張尚書宴予。酒酣。出盼盼以佐歡。歡甚。予因贈詩云。醉嬌勝不得。風嫋牡丹花。盡歡而去。爾後絶不相聞。迨茲僅一紀矣。昨日司勳員外郎張仲素績之訪予。因吟新詩。有燕子樓三首。詞甚婉麗。詰其由。爲盼盼作也。績之從事武寧軍累年。頗知盼盼始末。云尚書既沒。歸葬東洛。而彭城有張氏舊第。第中有小樓。名燕子。盼盼念舊愛而不嫁。居是樓十餘年。幽獨塊然。于今尚在。予愛績之新詠。感彭城舊遊。因同其題作。

【訓讀】徐州の故張尚書に愛妓有り、盼盼と曰ふ。歌舞を善くし、雅より風態多し。予校書郎たりし時徐泗の間に遊ぶ。張尚書予を宴し、酒酣なるとき盼盼を出して以て歡を佐けしむ。歡ぶこと甚し。予因りて詩を贈りて云ふ、醉嬌勝へ得ず、風は嫋す牡丹の花と。歡を盡して去る。爾後絶えて相聞かず。茲に迨びて僅に一紀なり。昨日司勳員外郎張仲素績之予を訪ひ、因つて新詩を吟ず。燕子樓三首有り。詞甚だ婉麗なり。其由を詰るに盼盼の爲に作るなり。績之は武寧軍に從事たること累年、頗る盼盼が始末を知れり。云く尚書既に沒して東洛に歸葬す。而して彭城に張氏が舊第有り、第中に小樓有りて燕子と名く。盼盼舊愛を念ひて嫁せず、是樓に居ること十餘年なり。幽獨塊然、今に尚在りと。予績之の新詠を愛し、彭城の舊遊に感ず。因つて其題に同じて三絶句を作る。

【字解】【一】徐州　古の九州の一。故張尚書は張建封の子愔なり。徐州刺史に官す。徐に在ること七年治績多し。元和の初召されて工部尚書となり、未だ境を踰えずして卒す。【二】徐泗　地名。【三】一紀　十二年。【四】張仲素　名は績之、字は仲素。【五】從事　官名。【六】東洛　洛陽。【七】彭城　張愔の治所。【八】塊然　孤獨の貌。

【題義】故の徐州刺史張愔の愛妓盼盼に代つて寡居の苦況を述べた詩である。

三絶句。

滿窓明月滿簾霜。　滿窓の明月滿簾の霜、

被冷燈殘拂臥牀。
燕子樓中霜月夜。
秋來只爲一人長。

【題義】秋深けて唯明月の光や寒霜の色が燈も小暗く夜著も冷い獨寢の床にさし込み、燕子樓中に寡居してゐると、つくづく夜の長きを感ずる。

【餘論】「月見ればちぢに物こそ悲しけれ、我身ひとつの秋にはあらねど」の歌と同じ趣である。

被冷かに燈殘して臥牀を拂ふ。
燕子樓中霜月の夜、
秋來只一人の爲に長し。

〔二〕

鈿暈羅衫色似煙。
幾回欲著卽潸然。
自從不舞霓裳曲。
疊在空箱十一年。

【詩意】鈿は暈の如く薄絹の上衣は煙のやうで昔と變らない。幾度か著て見ようとは思つたが、亡き尙書の事を思ひ出し涙が流れて果さない。尙書の世に在りし時は此を著て霓裳の曲を舞うたのであつたが、それも昔の夢となり、今は空しく疊んで箱中に藏すること早や十一年になつた。

【餘論】「かたみこそ今はあだなれ此なくば、忘るることもあらましものを」といふ歌と、同じ趣向である。

〔二〕

鈿暈羅衫色煙に似たり、
幾回か著せんと欲して卽ち潸然。
霓裳の曲を舞はざりしより、
疊みて空箱に在ること十一年。

【字解】【一】鈿暈　日月の暈の如く光る髮飾。羅衫は薄絹の上衣。皆舞の時に用ふるもの。
【二】潸然　涙の流れる貌。
【三】霓裳曲　舞曲の名。

〔三〕

今春有客洛陽回。
曾到尙書墓上來。
見說白楊堪作柱。
爭敎紅粉不成灰。

【詩意】今春洛陽から歸つた客があつて、尙書の墓參もして來たさうだ。その客の言ふ所に由れば、今や尙書が墓の白楊樹は柱ぐらゐの太さになつてゐるさうだが、なぜ吾は惜しからぬ命を長らへてゐるのであらう。

【餘論】唐宋詩醇に「一唱三嘆、餘音梁を繞る。此の如き風調、王昌齡・李白の輩を起して之を爲らしむと雖も、何を以てか復加へん」と激賞してある。

今春客有り洛陽より回る。
曾て尙書が墓上に到りて來る。
見說く白楊柱と作すに堪へたり、
爭か紅粉をして灰と成らざらしむる。

【字解】【一】洛陽　尙書を葬つた處。
【二】白楊　墓に植ゑてある木。
【三】紅粉　美人、卽ち盼盼自ら喩ふ。

感故張僕射諸妓

故の張僕射の諸妓に感ず

黄金不レ惜買蛾眉。　黄金惜まずして蛾眉を買ふ、
揀得如レ花三四枝。　揀び得たり花の如し三四枝。
歌舞教成心力盡。　歌舞教成つて心力盡く、
一朝身去不相隨。　一朝身去つて相隨はず。

【題義】故の張僕射（張愔なり。前の詩に見ゆ）の諸妓に感じて作つた詩である。

【詩意】金を惜まずに美妓を買ひ取り、花の如き者三四人を擇び得た。心力を盡して歌舞を教へ、まアこれでよいといふ處で張僕射は死んでしまつて、黄泉の御伴をする者とては一人もない。馬鹿馬鹿しいことだ。

【餘論】堯山堂外紀に云はく、此詩は盼盼を諷するが爲にして作る。盼盼詩を得て反覆して之を讀み、泣いて曰はく、我が公薨背してより妾死する能はざるに非ず。百載の後、人我が公色を重んじ從死の妾ありと以はんことを恐る。是れ我が公の清範を玷すなりと。乃ち白公の詩に答へて曰はく、自守二空房一恨斂レ眉、形同二春後牡丹枝一、舍人不レ會二人深意一、訝道泉臺不二去隨一、と。旬日食はずして死せりと。

【字解】〔一〕蛾眉　美人をいふ。

初貶官過望秦嶺

自レ此後詩、江州路上作。

初めて官を貶せられて望秦嶺を過ぐ　此より後の詩は江州路上の作。

草草辭家憂二後事一。　草草家を辭して後事を憂ふ、
遲遲去レ國問二前途一。　遲遲國を去りて前途を問ふ。
望秦嶺上回レ頭立。　望秦嶺上頭を回らして立てば、
無レ限秋風吹二白鬚一。　限無き秋風白鬚を吹く。

【題義】初めて江州司馬に貶せられ、赴任の途中望秦嶺を過ぎて作つた詩である。

【詩意】せわしく家を去り後事を憂へつつ、とぼとぼと長安の都を見捨てた。望秦嶺の上から頭を回らして長安の方を見れば、秋風が我が白鬚を吹いて息まない。

【字解】〔一〕草草　せわしく、〔二〕遲遲　とぼとぼと、歩みのおそいこと。

藍橋驛見元九詩

詩中云、江陵歸時逢二春雪一。

藍橋驛にて元九の詩を見る　詩中に曰く、江陵より歸る時春雪に逢ふと

藍橋春雪君歸日。　藍橋の春雪は君が歸る日、

【字解】〔一〕藍橋　陝西省藍田

秦嶺秋風我去時。　秦嶺の秋風は我が去る時。
每到驛亭先下馬。　驛亭に到る毎に先づ馬を下り、
循墻遶柱覓君詩。　墻に循ひ柱を遶りて君が詩を覓む。

【題義】藍橋驛で嘗て元稹の題した詩を見て作つたのである。

【詩意】嘗て君は江陵から歸る時に藍橋驛で春雪に逢つたさうだが、今僕は江州に赴任せんとして秦嶺で秋風に逢うた。宿場に著く毎に先づ馬から下り、墻や柱をまはつて君の題詩がありはせぬかと搜してゐる。

韓公堆寄元九

韓公堆にて元九に寄す

韓公堆北澥西頭。　韓公堆北澥の西頭、
冷雨涼風拂面秋。　冷雨涼風面を拂ふ秋。
努力南行少惆悵。　努力南行して惆悵少し、
江州猶似勝通州。　江州は猶通州に勝るに似たり。

【題義】韓公堆で元稹に寄せた詩である。

縣の東南の驛名。

【二】秦嶺　山脈の名。

【字解】【一】江州　樂天の貶せられて行く處。通州は元稹の貶せられてゐる處。

【詩意】吾今、江州に赴く途中の韓公堆の北、韓公澥の西にさしかかつた所が、丁度雨風の涼しい秋に逢うた。努力して南方に行くが、格別悲みもしない。江州は君の居る通州よりは餘程よいやうだから。

發商州

商州を發す

商州館裏停三日。　商州館裏停ること三日、
待得妻孥相逐行。　妻孥を待ち得て相逐うて行く。
若比李三猶自勝。　若し李三に比すれば猶自ら勝らん、
兒啼婦哭不聞聲。　兒啼婦哭聲を聞かず。
時李固言新歿。

【題義】商州を發する時作つた詩である。

【詩意】商州の驛館に三日逗留し、妻子の來るのを待つて、連れ立つて行くことにした。貶せられて行くのではあるが李三に比べるとまだましである。妻子の泣き悲む聲は聞かなくてすむから。（時に李三は死んだのである。）

【字解】【一】妻孥　妻子。

【二】李三　三は排行。李固言なり。

武關南見元九題山石榴花見寄

武關の南にて元九が山石榴花に題して寄せられしを見る

往來同路不同時。　往來路を同うして時を同うせず、
前後相思兩不知。　前後相思ふも兩ながら知らず。
行過關門三四里。　行きて關門を過ぐること三四里、
榴花不見見君詩。　榴花をば見ずして君の詩を見る。

【題義】武關（關所の名）の南で元稹が山躑躅の花に題する詩を寄せられたのを見て此詩を作つたのである。

【詩意】君は嘗て來り我は今往く。（前の藍橋驛見三元九詩一參照）道は同じだけれども時節は同じではない。されば互に相思うても互に知らずに居る。現に今自分は武關を過ぎて三四里進んだが、山躑躅の花などは見えず、ただ君の山躑躅に題した詩を見るのみだ。

【字解】【一】山石榴　やまつつじ。

紅鸚鵡　商山路逢

紅鸚鵡　商山の路に逢ふ

安南遠進紅鸚鵡。　安南より遠く進む紅鸚鵡、
色似桃花語似人。　色は桃花に似て語は人に似たり。
文章辯慧皆如此。　文章辯慧皆此の如し、
籠檻何年出得身。　籠檻何れの年か身を出し得ん。

【題義】商山の路で紅鸚鵡に逢ひ、感ずる所ありて此詩を作つた。

【詩意】安南から遙遙紅鸚鵡を獻進するが、其色は桃花の如く其語は人の如くである。羽毛も美しく賢くもあるのに、惜しいかな籠の中に入れられてある。いつになつたら自由の身になれるであらう。吾身につまされて同情に堪へない。

【字解】【一】安南　南方の國の名。
【二】文章　羽毛の綺麗なこと。辯慧は賢いこと。
【三】籠檻　鳥籠。

題四皓廟

四皓の廟に題す

臥逃秦亂起安劉。　臥しては秦の亂を逃れ起ちては劉を安んず、
舒卷如雲得自由。　舒卷雲の如く自由を得たり。
若有精靈應笑我。　若し精靈有らば應に我を笑ふべし、
不成一事謫江州。　一事を成さずして江州に謫せらる。

【字解】【一】四皓　東園公・綺里季・夏黃公・甪里先生をいふ。漢の戚姬高祖に寵あり、趙王如意を生む。高祖太子を廢して如意を立てんと欲す。呂后深く之を憂へて計を張良に問ふ。良曰く、四皓は商山中に逃れ匿れ、義漢の臣とならず。上此四人を招致せんとすれども能はず。今太子をして此四人を招致せしめば則ち一助なりと。因つて

太子をして此四人を招かしむ。四人來りて太子に侍す。高祖乃ち太子を廢するをなさず。【二】安劉　劉は漢の姓。太子を廢する計をやめさせたこと。【三】舒卷　進退出處。

【題義】商山の四皓の廟に題した詩である。

【詩意】隱遁しては秦の亂を避け、出でては漢室を安んじた。その出處進退は實に雲の如く自由である。若し今尙四皓の精魂が存するならば必ず我を笑ふであらう。何事をも成し得ずして江州に謫せられるのだから。

罷藥　藥を罷む

自學坐禪休服藥。坐禪を學びてより藥を服するを休む、
從他時復病沈沈。從他時に復病の沈沈たらんことを。
此身不要全强健。此身全く强健なることを要めず、
强健多生人我心。强健なれば多く人我の心を生ず。

【題義】藥を飲むことを罷めたといふのである。

【詩意】坐禪を學び始めてから藥を飲むのを罷めた。病氣が復體中に潛むとも、勝手にさせようと思ふ。此身の全然健康ならんことは敢て求めない。强健であると私慾の心が起るから。

【字解】【一】從他　ままよ。どうでもよいとの意。沈沈は深くこもること。【三】人我心　私慾の心。

白鷺　白鷺

人生四十未全衰。人生四十未だ全く衰へず、
我爲愁多白髮垂。我は愁多きが爲に白髮垂る。
何故水邊雙白鷺、何の故ぞ水邊の雙白鷺、
無愁頭上亦垂絲。愁無きも頭上亦絲を垂る。

【題義】白鷺を見て感慨を述べた詩である。

【詩意】人は四十ぐらゐでは全く衰へたといふ程ではないが、我は愁が多いので既に白髮になつた。見れば水邊に二羽の白鷺があるが、あれは愁もないのになぜか頭が白い。

襄陽舟夜　襄陽舟夜

下馬襄陽郭。馬より下る襄陽の郭、舟に移る漢陰の驛。
移舟漢陰驛。

秋風截江起。寒浪連天白。　秋風江を截りて起り、寒浪天に連りて白し。
本是多愁人。復此風波夕。　本是れ愁多き人、復此れ風波の夕。

【字解】【一】襄陽　湖北省襄陽縣。【三】漢陰　漢水の南。陰は川の時は南なり。

【題義】襄陽で舟中にゐて作つた詩である。

【詩意】襄陽驛で馬から下りて舟に乘り移つた。折しも秋風が江を渡つて來り、大浪が天を拍つて白い。我は本來多恨の身であるのに、かかる風波の烈しい夕には一層愁が增すばかりである。

江夜舟行

煙澹月濛濛。舟行夜色中。
江鋪滿槽水。帆展半檣風。
叫曙嗷嗷鴈。啼秋唧唧蟲。
只應催北客。早作白鬚翁。

【字解】【一】濛濛　ぼんやりしてゐる。【二】嗷嗷　鴈の鳴く聲。【三】唧唧　蟲の聲。【四】北客　樂天自ら謂ふ。

【題義】夜江上を舟行した景況を述べた詩である。

【詩意】薄く煙がかかつて月の朧に霞む時、舟で江上を行けば、江水が漫漫と漲つて波穩かに、秋風が半帆に入つて展開してゐる。明け方になつて鴈の聲や蟲の音が繁く聞える。丁度北客をして愁心を催さしめ、早く白鬚の老翁とならしめんとしてゐるもののやうだ。

紅藤杖

交親過滻別。車馬到江廻。　交親滻を過ぎて別れ、車馬江に到りて廻る。
唯有紅藤杖。相隨萬里來。　唯紅藤の杖のみ有り、相隨ひて萬里に來る。

【字解】【一】交親　親交ある人。滻は關中八川の一。

【題義】藤の杖のことを述べた詩である。

【詩意】長安を去る時、親友だちは滻水の處まで我を見送つてくれたが、そこで別れて歸り、車馬は長江の處まで我を載せて來たが、そこから引返した。ただ此紅藤杖だけは我に伴つて萬里の遠きに及んだ。

江上吟元八絶句

江上にて元八が絶句を吟ず

大江深處月明時。大江深き處月明かなる時、
一夜吟君小律詩。一夜君が小律詩を吟ず。
應有水仙潛出聽。應に水仙有りて潛に出でて聽くべし、
翻將唱作步虛詞。翻して將に唱へて步虛の詞を作らんとす。

【題義】江上で元八（前に見ゆ）の作つた絶句を吟じたことを述べた詩である。

【詩意】長江の明月の下で、元君の作つた絶句を吟じた。恐らく水中の仙人が潛に出でて聽き、其聲を寫して步虛詞を作るであらう。

【字解】【一】小律詩　絶句なり。
【二】水仙　水中の仙人。
【三】翻　卷十二、琵琶行に見ゆ。步虛詞　仙人の歌。

途中感秋

途中秋に感ず

節物行搖落。年顏坐變衰。
樹初黃葉日。人欲白頭時。
鄉國程程遠。親朋處處辭。
唯憐病與老。一步不相離。

節物行くゆく搖落し、年顏坐ながら變衰す。
樹初めて黃葉する日、人白頭ならんと欲する時。
鄉國程程遠く、親朋處處に辭す。
唯憐む病と老と、一步も相離れず。

【字解】【一】節物　時節の草木。搖落　ゆられおつること。【二】程程　道里なり。

【題義】江州に往く途中で秋に感じて作つた詩である。

【詩意】眼前の景物は行くゆく衰へ、我が容貌もいつとはなしに老い、木木は黃葉し、我は白髮ならんとし、鄉里は道遠く、親朋は離散してゐる。ただ我が身につき纏つて離れぬものは病と老とのみである。誠に物悲しい時節である。

登鄂州白雪樓

鄂州の白雪樓に登る

白雪樓中一望鄉。白雪樓中一たび鄉を望めば、
青山簇簇水茫茫。青山簇簇水茫茫。
朝來渡口逢京使。朝に渡口に來りて京使に逢ふ、
說道煙塵近洛陽。說道らく煙塵洛陽に近しと。

時淮西寇未平。

【題義】鄂州の白雪樓に登つて作つた詩である。

【詩意】白雪樓に登つて鄉里の方を望めば、山はむらがり聳え川は茫茫としてゐる。朝起きて渡場に

【字解】【一】鄂州　湖北省鍾祥縣治。
【二】簇簇　むらがり聳ゆること。茫茫は漠然として定かならぬ貌。
【三】渡口　わたしば。
【四】煙塵　兵塵といふが如し。

來て偶然長安から來た使に逢つた所が、淮西の謀叛軍が追追洛陽の近くに迫つて來たと言つてゐた。誠に悲むべきことだ。

舟夜贈内

三聲猿後垂鄉淚。　一葉舟中載病身。
莫凭水窓南北望。　月明月闇總愁人。

舟夜内に贈る

三聲の猿後鄉淚を垂れ、
一葉の舟中病身を載す。
水窓に凭りて南北を望むこと莫れ、
月明なるも月闇きも總て人を愁へしむ。

【題義】夜舟中で妻に贈つた詩である。

【詩意】一葉の扁舟に病身を載せて他鄉にさまよつてゐると、三聲猿の啼くのを聞けば忽ち鄉里を思ふ涙を流す。舟の窓に凭つて南北を望むのは禁物である。月が明るくても暗くても我をして愁へしめるから。

【餘論】樂天は妻子を連れて江州に赴任したらしいから（前の發二商州一の詩參照）妻も多分同じ舟に乘つてゐたのであらう。

逢舊

我梳白髮添新恨。　君掃青蛾減舊容。
應被傍人怪惆悵。　少年離別老相逢。

舊に逢ふ

我は白髮を梳りて新恨を添ふ、
君は青蛾を掃ひて舊容を減ず。
應に傍人に惆悵するを怪まるべし、
少年に離別して老いて相逢ふ。

【題義】若い時に識り合つた女に逢うて作つた詩である。

【詩意】我は白髮を梳つて老衰を恨む情を增し、君はいくら眉を畫いても以前のやうな美しさはなくなつた。傍の人はお互に悲んでゐるのを不思議に思ふであらうが、若い時に別れて久し振りで逢つたのだから無理もあるまい。

【字解】青蛾　青き美人の眉。

臼口阻風十日

洪濤白浪塞江津。　處處邅廻事事迍。
世上方爲失途客。

臼口にて風に阻てらるること十日

洪濤白浪江津を塞ぎ、
處處に邅廻して事事迍なり。
世上方に途を失ふ客と爲り、

【字解】【一】洪濤白浪　大浪。江津は、ふなつきば。
【二】邅廻　めぐりまはる。事事迍は、すべて事がすらすらと運ばない

江頭又作阻風人。
魚鰕遇雨腥盈鼻。
蚊蚋和煙癢滿身。
老大光陰能幾日。
等閒臼口坐經旬。

江頭又風に阻てらるる人と作る。
魚鰕雨に遇ひて腥鼻に盈ち、
蚊蚋煙に和して癢身に滿つ。
老大光陰能く幾日ぞ、
等閒臼口坐して旬を經。

【題義】臼口といふ處で波風の荒い爲に舟止に逢つて空しく十日を過したことを述べた詩である。

【詩意】大浪の爲に舟著場が塞がれて、處處にまはり道をして手間取つた。我は既に世間の落伍者であるが、今又風の爲に舟止を食つた。舟に積んである魚類などは腐つて惡臭を發し、蚊が滿身を食つて痒くてたまらない。老いて先の短い身が十日を手持無沙汰に暮してしまつた。

【字解】【一】江頭　江岸。
【二】等閒　ぼんやりと爲す事もなく日を送ること。

浦中夜泊

暗上江隄還獨立。
水風霜氣夜稜稜。
回看深浦停舟處。
蘆荻花中一點燈。

浦中夜泊

暗に江隄に上りて還獨立てば、
水風霜氣夜稜稜。
深浦の舟を停めし處を回看すれば、
蘆荻花中一點の燈。

【題義】浦曲に夜舟を泊したことを述べた詩である。

【詩意】暗中江岸に上つて獨立つてゐると、水上から吹いて來る風や霜氣が身に沁みて寒い。舟を停めてある處をふりかへつて見れば、蘆や荻の白い花の中に一點の燈が淋しく見える。

【字解】【一】稜稜　寒氣の身に沁む貌。

盧侍御與崔評事。爲予於黃鶴樓置宴。宴罷同望

盧侍御と崔評事と、予が爲に黃鶴樓に於て宴を置く、宴罷みて同じく望む

江邊黃鶴古時樓。
勞置華筵待我遊。
楚思淼茫雲水冷。
商聲清脆管絃秋。
白花浪濺頭陀寺。
紅葉林籠鸚鵡洲。
總是平生未行處。

江邊の黃鶴古時の樓、
勞して華筵を置き我を待ちて遊ばしむ。
楚思淼茫として雲水冷に、
商聲清脆なり管絃の秋。
白花浪は濺ぐ頭陀寺、
紅葉林は籠む鸚鵡洲。
總て是れ平生未だ行かざりし處、

【字解】【一】黃鶴樓　今の湖北省武昌縣の西南に在り、昔費文禕が登仙した處で、景勝を以て古來有名である。
【二】勞　旅愁をねぎらふこと。
【三】楚思　此地は古の楚地である。
【四】商聲　哀調なり。
【五】頭陀寺　寺の名。
【六】鸚鵡洲　黃鶴樓の附近に在る洲の名。

醉來堪賞醒堪愁。醉ひ來りては賞するに堪へ醒めては愁ふるに堪へたり。

【題義】盧侍御と崔評事とが樂天の爲に黃鶴樓で宴を催した。その宴が終つてから樓に登つて一緒に四方を眺めて作つた詩である。

【詩意】長江の邊に在る此樓は、昔から名高い黃鶴樓である。今盧侍御と崔評事とが我が旅の疲れを慰めん爲に此樓に盛宴を張つてくれた。樓上から淼茫たる雲水の冷なるを見ては感慨を起し、管絃の柔に澄んだ聲を聞いては秋の哀れを催した。白い花の如き浪が頭陀寺に濺ぎ、紅葉の林が鸚鵡洲を籠めてゐるなど、總てまだ見ぬ景色であるから、醉うてゐる中は賞玩したが、醒めては皆旅愁の種になつた。

舟中讀元九詩

舟中、元九の詩を讀む

把君詩卷燈前讀。君が詩卷を把りて燈前に讀む、
詩盡燈殘天未明。詩盡き燈殘して天未だ明けず。
眼痛滅燈猶闇坐。眼痛み燈を滅して猶闇坐すれば、
逆風吹浪打船聲。逆風浪を吹いて船を打つ聲。

【題義】舟の中で元稹の詩卷を讀んだことを述べた詩である。

【詩意】君の詩卷を燈前に讀み、讀み終り燈も滅えさうになつたがまだ夜は明けない。眼が痛いので燈を消し暗中に默坐し、風浪の船を打つ聲を聞いて凄涼の感を深うした。

【餘論】唐宋詩醇に「字字沈著、二十八字の中無限に層折す。元微之の聞樂天左遷江州詩に云はく、殘燈無焰影幢幢、此夕聞君謫九江、垂死病中驚起坐、暗風吹雨入寒窓と。居易以爲らく此句他人すら尙聞くべからず。況んや僕の心をやと。此詩眞に同調と謂ふべし」と評してある。

舟行阻風。寄李十一舍人

舟行風に阻てらる、李十一舍人に寄す

扁舟厭泊煙波上。扁舟泊するを厭ふ煙波の上、
輕策閒尋浦嶼間。輕策閒に尋ぬ浦嶼の間。
虎蹋青泥稠似印。虎は青泥を蹋みて印似りも稠く、
風吹白浪大於山。風は白浪を吹いて山よりも大なり。
且愁江郡何時到。且愁ふ江郡何の時にか到らん、
敢望京都幾歲還。敢て望む京都幾歲にか還らん。
今日料君朝退後。今日料る君が朝より退きて後、

【字解】【一】扁舟　小舟。
【二】輕策　輕き杖。
【三】江郡　江州なり。

迎レ寒新酎(四)煖開レ顔。　寒を迎へて新酎煖めて顔を開くを。

李十一好二小酌一、故云。

【題義】風の爲に舟止に遇つた時、長安に居る李舍人（十一は排行、舍人は官名、中書舍人。李建である）に寄せた詩である。

【詩意】煙波の上に舟を泊してゐるのも厭になつたから、杖を曳いて岸上を散歩した。泥の上の虎の足跡は印を押したやうで、風に捲上げられる大浪は山のやうである。江州へは何日著けるやら心細さを感じ、早く都へ還りたいものだと思ふ。察するに今頃は君は朝廷から退出して、例の新酎を煖めて寒さ凌ぎに傾けてゐるであらう。羨ましいことだ。

【四】新酎　酒の名。

雨中題二衰柳一　雨中衰柳に題す

濕屈青條(一)折。寒飄黄葉多。　濕に屈して青條折れ、寒に飄りて黄葉多し。
不レ知秋雨意。更遣欲二如何一。　知らず秋雨の意、更に如何せんと欲せしむる。

【字解】【一】青條　青い枝。

【題義】雨中、秋になつて衰へた柳に題した詩である。

【詩意】雨が降つて濕氣の爲に枝が折れ、寒風の爲に黄色になつた葉が飛散し、見る影もない哀れな姿である。既に踏んだり蹴たりの目に遇はせて、更に秋雨は此衰柳をどうしようと思つてゐるのであらう。氣の毒なことだ。

題二王處士郊居一　王處士の郊居に題す

半依二雲渚一半依レ山。　半は雲渚に依り半は山に依る、
愛レ此令二人不一欲レ還。　此を愛して人をして還るを欲せざらしむ。
負(一)郭田園八九頃。　郭を負ふ田園八九頃、
向(二)陽茅屋兩三間。　陽に向へる茅屋兩三間。
寒松縱老風標(三)在。　寒松は縱ひ老ゆるも風標在り、
野鶴雖レ飢飲啄(四)閒。　野鶴は飢ゑたりと雖も飲啄閒なり。
一臥二江村一來早晚(五)。　一たび江村に臥して來早晚、
著書盈帙鬢毛斑。　著書帙に盈ちて鬢毛斑なり。

【題義】王處士（王は姓、學德ありて仕へざる人を處士といふ）の郊外の閑居に題した詩である。

【字解】【一】負レ郭　郊外なり。
【二】向レ陽　南を向いてゐる。三兩間は間數の二三あること。
【三】風標　器量なり。
【四】飲啄　飲食なり。
【五】早晚　久しき意。

【詩意】王處士の閑居は川と山とに跨つてゐて、人をして還るのを忘れしめる程よい。且郊外の田園が八九頃もあり、二間三間ばかりの茅屋が南を向いて建てられてある。松は老いてはゐるが流石に高尚な趣を失はず、野飼の鶴は飢ゑても飲食を貪らない。處士は此處に隱居してから既に久しきを經、著書は帙に盈ち頭髮も大分白くなつた。

歲晚旅望

朝來暮去星霜換。
陰慘陽舒氣序牽。
萬物秋霜能壞色。
四時冬日最凋年。
煙波半露新沙地。
鳥雀羣飛欲雪天。
向晚蒼蒼南北望。
窮陰旅思兩無邊。

朝來暮去星霜換り、
陰慘陽舒氣序牽く。
萬物秋霜能く色を壞り、
四時冬日最も凋年。
煙波半露る新沙の地、
鳥雀羣り飛ぶ雪ふらんと欲する天。
晚に向ひ蒼蒼として南北を望めば、
窮陰旅思兩ながら邊無し。

【字解】【一】氣序　氣節の順序。
【二】四時　春夏秋冬。
【三】蒼蒼　夕方の色。薄暗き貌。
【四】窮陰　冬の終の陰氣。旅思　は旅愁。

晏坐閒吟

昔爲京洛聲華客。
今作江湖潦倒翁。
意氣銷磨羣動裏。
形骸變化百年中。
霜侵殘鬢無多黑。
酒伴衰顏只暫紅。
賴學禪門非想定。
千愁萬念一時空。

昔は京洛聲華の客と爲り、
今は江湖潦倒の翁と作る。
意氣銷磨す羣動の裏、
形骸變化す百年の中。
霜は殘鬢を侵して多黑無く、
酒は衰顏に伴ひて只暫く紅なり。
賴に禪門の非想定を學び、
千愁萬念一時に空し。

【題義】歲の暮に旅中四方を望み見て感ずる所を述べた詩である。
【詩意】一日一日と歲月が移り、陰陽往來して氣節が變ずる。秋になれば萬物皆其色を失ひ、冬になれば凋衰の極に達する。今や煙波が立ち罩めて半沙地を露し、鳥雀が羣り飛んで雪でも降らうとする空模樣である。暮色の蒼然たる時南北を望めば、陰氣と旅愁とが止めどなく身に逼つてくる。

【字解】【一】晏坐　晏は安なり安らかに坐す。
【二】京洛　みやこ。長安及び洛陽。聲華客は榮華の人。
【三】江湖　片田舍。潦倒翁は零落した老爺。
【四】羣動　多くの物の活動。
【五】百年　人の一生をいふ。
【六】非想定　佛法のさとり。楞嚴經に、非想非非想處の語あり。

【題義】安坐して靜かに吟じたといふ義。

【詩意】余も昔は帝京にゐて榮華の身にもなつたが、今は片田舍のおちぶれた一老爺に過ぎない。されば總ての物は皆活動してゐるが自分は意氣全く銷沈し、容貌も段段老衰して來て、鬢の毛は殆ど全く白くなり、只酒の力で僅に顏が紅になるぐらゐのものだ。併し幸に禪學の悟を得てゐるので、心中の愁は一時に消盡する。

題李山人

厨無煙火室無妻。
籬落蕭條屋舍低。
每日將何療飢渴。
井華雲粉一刀圭。

李山人に題す

厨に煙火無く室に妻無し、
籬落蕭條として屋舍低し。
每日何を將てか飢渴を療する、
井華雲粉一刀圭。

【題義】李山人に題した詩である。

【詩意】山人は全く俗界を離れた仙人であるから、厨には煙火なく室には妻なく、閑靜な小屋の中に住んでゐる。每日何を以て飢渴を凌いでゐるかといふに、只井華雲粉といふ仙藥をほんの一匙服用するだけだ。

【字解】【一】籬落　まがき。垣根。蕭條は淋しき貌。

【三】井華雲粉　仙藥の名であらう。刀圭は藥物の量の名。

讀莊子

去國辭家謫異方。
中心自怪少憂傷。
爲尋莊子知歸處。
認得無何是本鄉。

莊子を讀む

國を去り家を辭して異方に謫せらる、
中心自ら怪む憂傷少きを。
莊子を尋ねて歸處を知り、
無何は是本鄉なるを認め得たるが爲なり。

【題義】莊子を讀んで安心立命を得たことを述べた詩である。

【詩意】帝都を去り家鄉を辭して他境に貶せられたのだから、大に憂愁するのが當然であるのに、なぜか憂傷の少いのを窃に怪んだが、それは他ではなく、莊子を讀んで心の歸處を尋ねた結果、妄想に囚はれない無何有の鄉こそ卽ち心の歸處であるといふことを悟り得たからであつた。

【字解】【一】異方　他處。江州を指す。【二】歸處　心の歸著する處。【三】無何　莊子應帝王篇に、「予方に造物者と人とならんとす。厭けば則ち又かの莽眇の馬に乘り以て六極の外に出でて無何有の鄉に遊び以て壙埌の野に處る」云云とある。何等心の拘束なき境地をいふ。本鄉は卽ち歸處。

江樓偶宴。贈同座

南浦閒行罷。西樓小宴時。
望湖凭檻久。待月放杯遲。

江樓偶宴、同座に贈る

南浦閒行罷み、西樓小宴の時。
湖を望みて檻に凭ること久しく、月を待ちて杯を放つ」こと遲し。

江果嘗盧橘。山歌聽竹枝。　江果盧橘を嘗め、山歌竹枝を聽く。
相逢且同樂。何必舊相知。　相逢ひ且同く樂む、何ぞ必ずしも舊相知ならん。

【字解】【一】同座　同席の客。【二】閒行　しづかに歩む。【三】檻　欄干。てすり。【四】盧橘　柑橘類の果の名。【五】竹枝　土俗を詠ずる詩。【六】舊相知　舊友。

【題義】江樓で偶然宴會を開き、席上の客に贈つた詩である。

【詩意】南方の川緣を散歩して歸り、諸君を請じて西樓に小宴を開いた。欄干に凭つて湖上の景を飽くまで眺め、月の出るのを待つていつまでも杯を措かず、盧橘を食つたり竹枝を聽いたりして共に樂みを盡した。舊友でなければ共に樂むに足らないわけではない。

放言五首　并序

放言五首　并に序

元九在江陵時。有放言長句詩五首。韻高而體律。意古而詞新。予每詠之。甚覺有味。雖前輩深於詩者。未有此作。唯李頎云。濟水至清河自濁。周公大聖接輿狂。斯句近之矣。予出佐潯陽。未屆所任。舟中多暇。江上獨吟。因綴五篇。以續其意耳。

【訓讀】元九江陵に在りし時、放言長句の詩五首有り。韻高くして體律、意古くして詞は新なり。予毎に之を詠じ、甚だ味有るを覺ゆ。前輩の詩に深き者と雖も、未だ此の作有らず。唯だ李頎云へる有り。濟水は至つて清きも河は自ら濁る。周公は大聖なれども接輿は狂すと。斯句之に近し。予出でて潯陽に佐たり。未だ任ぜらるる所に屆らず。舟中暇多し。江上獨吟し、因て五篇を綴りて以て其意を續ぐ耳。

【字解】【一】江陵　地名。元稹は嘗て江陵士曹に貶ぜられた。【二】放言　ほしいままに言ふ。詩題なり。【三】李頎　唐の詩人。【四】接輿　古の楚人。【五】佐潯陽　江州司馬に貶ぜられたこと。

〔一〕

朝眞暮僞何人辯。　朝眞暮僞何人か辯ぜん、
古往今來底事無。　古往今來底事か無からん。
但愛臧生能詐聖。　但愛す臧生が能く聖を詐るを、
可知甯子解佯愚。　知る可し甯子が解く愚を佯はるを。
草螢有耀終非火。　草螢耀有れども終に火に非ず、
荷露雖團豈是珠。　荷露團なりと雖も豈是れ珠ならんや。

【字解】【一】臧生　臧文仲を指すか。論語に「子曰く、臧文仲蔡を居き節に山し梲に藻す。何如ぞ其れ知ならん」とある。【二】甯子　論語に「甯武子邦道あれば則ち知なり、邦道なければ則ち愚なり。其知には及ぶべきなり、其愚には及ぶべからざるなり」とある。【三】荷露　蓮の葉の

不レ取燔柴兼照乘。　取らず燔柴と照乘と、
可レ憐光彩亦何殊。　憐む可し光彩亦何ぞ殊ならん。

【題義】元稹の放言と題する詩に倣つて作つた詩である。

【詩意】朝暮の眞僞は何人か能く之を辯ずるであらう。古の去り今の來るは何の世でもないことはない。大姦は聖の如く大知は愚に似てゐる。草にとまれる螢は光を放つが火ではなく、蓮の葉の露は圓いけれども珠ではない。天を祭る燔柴と車十二乘を照す珠とを擧げるまでもなく、光を發する點は皆同じである。

上の露。【四】燔柴　天子が柴を燒いて天を祭ること。照乘は車の前後十二乘を照す珠。

〔二〕

世途倚伏都無レ定。　世途の倚伏都て定まる無く、
塵網牽纏卒未レ休。　塵網の牽纏卒に未だ休まず。
禍福廻還車轉レ轂。　禍福廻還車轂を轉じ、
榮枯反覆手藏レ鉤。　榮枯反覆手に鉤を藏す。
龜靈未免刳レ腸患。　龜靈なるも未だ腸を刳かるる患を免れず、
馬失應無折レ足憂。　馬は失して應に足を折る憂無かるべし。
不レ信君看奕棋者。　信ぜずんば君看よ奕棋の者、
輸贏須待局終頭。　輸贏須らく待つべし局の終頭。

【詩意】世路の禍福は定まりなく、世累は身にまとうて休むことがない。禍福の廻轉は車の如く、榮枯の反覆は藏鉤の戲のやうである。龜は卜筮に用ひられて靈あれども其れが爲に腸を刳かれる。馬に逃げられたのは不幸のやうであるが、其子が落馬して足を折ることがないとすれば寧ろ幸と謂ふべきである。畢竟禍福は轉轉定まりなきものである。君若し余が言を信ぜずば、かの碁や將棊をさすのを見たまへ。勝つたり負けたりして終局にならなければ本當の勝負はわからないではないか。所謂棺を蓋うて論定まるとは此事である。

【字解】【一】倚伏　禍福なり。老子に「禍は福の倚る所、福は禍の伏す所」とあるに本づく。【二】塵網　世累なり。【三】藏鉤　遊戲の名　數人一組となりて手に鉤を匿し、どの人の手中に在るかを言ひ當てしむるなり。【四】馬失云云　塞翁が馬の故事。【五】奕棋　碁・將棊の類。【六】輸贏　勝敗。

〔三〕

贈君一法決狐疑。　君に一法を贈りて狐疑を決せしむ、
不用鑽龜與祝蓍。　用ひず鑽龜と祝蓍と。
試玉要燒三日滿。　玉を試むるには燒くこと三日に滿たんことを要す、
眞玉燒三日不レ熱。

【字解】【一】狐疑　疑惑。【二】鑽龜　龜の甲を鑽りてトふこと。祝蓍は蓍を用ひて占ふこと。【三】流言　無根の事をいひふらすこと。周公が成王の攝政たりし時、

辨材須待七年期。　豫章木生七年而後知。
周公恐懼流言日。
王莽謙恭未簒時。
向使當時身便死。
一生眞僞復誰知。

【詩意】君に疑を決する一法を敎へよう。それは卜筮などを用ひなくとも明にわかる。すべて事を視るに一時の狀態を以てせず、長い目で觀察することである。玉を試みるには三日燒いて見なければわからない。（本當の玉は三日燒いても熱くならない）豫章（木の名）を辨ずるには七年待たなければならない。周公は管叔・蔡叔の流言した時大に恐懼した。恰も簒奪者のやうに見えたが決してさうではなかつた。王莽が未だ位を簒はないうちは大に恭謙の人らしく見えたが、後には簒奪者となつた。彼等が若し早く死んだならば一生の眞僞は終にわからなかつたであらう。故に事の眞僞を知るには一部始終を通觀しなければならない。

〔四〕

周公は恐懼す流言の日、
王莽は謙恭なり未だ簒はざりし時。
向に當時身便ち死せしめば、
一生の眞僞復誰か知らん。

管叔・蔡叔の二人が周公が成王の位を簒はんとしてゐる由を流言した。周公因つて東征して管叔を誅し蔡叔を放つ。

【四】王莽　漢の平帝に仕へて大司馬となり、陽に恭謙にして以て人望を收め、遂に平王を弑し、漢の皇位を簒ひ國を新と號した。

誰家第宅成還破。
何處親賓哭復歌。
昨日屋頭堪炙手。
今朝門外好張羅。
北邙未省留閒地。
東海何曾有定波。
莫笑賤貧誇富貴。
共成枯骨兩如何。

【詩意】誰の邸宅か知らぬが建てられる間もなく破られた。親賓が集つて哭泣してゐるかと思へば間もなく歡歌を奏してゐる。昨日までは勢威赫赫たりし權力家も、今朝は失墜して人一人寄り附かぬやうになつた。榮枯盛衰は實に定めなきものである。北邙山には後から後から墓が出來て、押すな押すなの混雜を極め、東海には未だ嘗て一定の波はなく日夜動搖してゐる。だから貧賤を笑ひ富貴に誇つてはならない。いづれは同じ土の下の枯骨となるではないか。

誰が家の第宅ぞ成りて還破るる、
何の處の親賓ぞ哭して復歌ふ。
昨日は屋頭手を炙るに堪へたり、
今朝は門外羅を張るに好し。
北邙未だ省ず閒地を留むるを、
東海何ぞ曾て定波有らん。
賤貧を笑ひ富貴に誇る莫れ、
共に枯骨と成りて兩ながら如何。

【字解】【一】炙レ手　勢燄の盛なこと。
【二】張レ羅　雀を捕ふる網を張ること。誰も來り訪ふ者のないこと。
【三】北邙　洛陽の北に當る共同墓地。閒地は、あき地。

〔五〕

泰山不レ要レ欺二毫末一。
顏子無レ心レ羨二老彭一。
松樹千年終是朽。
槿花一日自爲レ榮。
何須戀レ世常憂レ死。
亦莫二嫌レ身漫厭一レ生。
生去死來都是幻。
幻人哀樂繫何情。

〔五〕

泰山は毫末を欺くを要せず、
顏子は老彭を羨むに心無し、
松樹千年終に是れ朽つ、
槿花一日自ら榮を爲す。
何ぞ須ひん世を戀ひて常に死を憂ふるを、
亦身を嫌ひて漫に生を厭ふ莫れ。
生去死來都て是れ幻、
幻人の哀樂何の情にか繫る。

【詩意】泰山は毫末を欺く要はなく、顏子は老彭を羨む心はない。大小壽夭宜しく天の賦與に從ふべきである。千年の松も終には枯れ、槿の花は一日にもせよ榮華は榮華だ。世を戀ひて死を憂ふるにも及ばず、又身を嫌つて生を厭ふにも及ばない。生死は要するに夢幻である。夢幻の人の哀樂は心に繫くる價値はない。

【一】顏子　孔子の高弟、夭死せり。老彭は古の長壽者の名。

【三】槿花　むくげの花。其花一日にして萎む。

歲暮道レ情　二首

壯日苦曾驚二歲月一。
長年都不レ惜二光陰一。
爲レ學二空門平等法一。
先齊二老少死生心一。

歲暮情を道ふ　二首

壯日苦だ曾て歲月に驚く、
長年都て光陰を惜まず。
空門平等の法を學ぶが爲に、
先づ老少死生の心を齊うす。

【題義】歲暮に方りて感想を述べた詩である。

【詩意】血氣の頃は歲月の移るのが早いのに驚いたが、老年になつてからは歲月を惜む心がなくなつた。それは佛道を學んで老少死生を同一視する悟が開けたからである。

【一】壯日　血氣盛なりし時。

【二】長年　老年。

【三】空門平等法　佛門にて人事の得失を同一視する法。

〔二〕

半故青衫半白頭。
雪風吹レ面上二江樓一。
禪功自見無二人覺一。
合二是愁一時亦不レ愁。

〔二〕

半は故の青衫半は白頭、
雪風面を吹いて江樓に上る。
禪功自ら見れて人の覺る無し、
合に是れ愁ふべき時にも亦愁へず。

【字解】【一】青衫　司馬の服。

【三】禪功　禪學の功。

【詩意】白髮頭に相變らずの青衫を著て、吹雪に顏を撲たれながら江樓に上つた。禪學の功が現れて來たが人にはわからない。併し愁ふべき時にも愁へないので、自分には明かにわかる。

讀李杜詩集。因題卷後

李杜の詩集を讀み、因つて卷後に題す

翰林江左日。員外劍南時。
翰林江左の日、員外劍南の時。
不得高官職。仍逢苦亂離。
高き官職を得ず、仍苦き亂離に逢ふ。
暮年逋客恨。浮世謫仙悲。
暮年逋客の恨、浮世謫仙の悲。
吟詠流千古。聲名動四夷。
吟詠千古に流れ、聲名四夷を動かす。
文場供秀句。樂府待新詞。
文場秀句を供し、樂府新詞を待つ。
天意君須會。人間要好詩。
天意君須らく會すべし、人間好詩を要む。

賀監知章目李白爲謫仙人。

【字解】【一】翰林　翰林學士。李白嘗て翰林學士となる。江左は江東卽ち吳。李白嘗て吳に遊ぶ。【二】員外　杜甫嘗て工部員外郎となる。劍南は蜀なり。【三】暮年　晩年。逋客は世を避くる隱者。【四】文場　文壇なり。【五】樂府　音樂を掌る役所。【六】人間　世間。

【題義】盛唐の大詩人たる李白・杜甫の詩集を讀み、その詩卷の後に題した詩である。

【詩意】翰林學士たりし李白は晩に吳に遊び、工部員外郎たる杜甫は蜀に遊び、白は高き官職を得ずして終り、甫は仍亂離の苦みに逢ひ、甫は衰老して逋客の恨を抱き、白は謫仙の悲みを抱いた。されど俱に吟詠を以て千古に傳はり、聲名內外に振ひ、甫は文壇に秀句を供し、白は樂府に新詞を呈した。天が世間に好詩を供せしむる爲に、此二大詩星を生んだものだといふことがわかる。

强酒

强酒

若不坐禪銷妄想。
若し坐禪して妄想を銷せずんば、
卽須吟醉放狂歌。
卽ち須らく吟醉して狂歌を放にすべし。
不然秋月春風夜。
然らずんば秋月春風の夜、
爭那閒思往事何。
爭でか閒に往事を思ふを那何せん。

【題義】强ひて酒を飲む由を述べた詩である。

【詩意】若し坐禪して妄想を絕つのでなければ、醉吟して狂歌を放にするがよい。然らずんば春風秋月人をして往事を追懷せしむる時、何を以て心の悲みを慰することが出來ようぞ。

獨樹浦雨夜寄李六郎中

獨樹浦にて雨夜李六郎中に寄す

忽憶兩家同里巷。　忽ち憶ふ兩家里巷を同うせしことを、
何曾一處不追隨。　何ぞ曾て一處か追隨せざらん。
閒遊預算分朝日。　閒遊預め算す分朝の日、
靜語多同待漏時。　靜語多く同うす待漏の時。
花下放狂衝黑飲。　花下に放狂して黑を衝きて飲み、
燈前起坐徹明棋。　燈前に起坐して明に徹して棋す。
可知風雨孤舟夜。　知る可し風雨孤舟の夜、
蘆葦叢中作此詩。　蘆葦叢中此詩を作るを。

【題義】獨樹浦で雨の夜に李六郎中（六は排行、郎中は官名）に寄せた詩である。

【詩意】君の家と僕の家とは同じ町内に在つて、どこへ行くにも連れ立つて行つた。分朝の時には互に閒遊の豫算を立て、待漏の時には俱に語り合ひ、花の下で夜になるまで放狂し、燈前に起坐して夜の明けるまで棋を鬪はした。君と僕とはかくまで深交があつたのだから、今風雨孤舟の夜に蘆葦の茂つた中で此詩を作つた僕の心中が君にはよくわかるであらう。

【字解】【一】分朝　分曹といふが如し。部を分ちて事務を執ること。
【二】待漏　漏は水時計。羣臣の入朝する時、宮門の開くまで時の至るを待つこと。
【三】衝黑　暗くなるまで。
【四】徹明　夜の明けるまで。

聽崔七妓人箏

崔七が妓人の箏を聽く

花臉雲鬟坐玉樓。　花臉雲鬟玉樓に坐す、
十三絃裏一時愁。　十三絃裏一時に愁ふ。
憑君向道休彈去。　君に憑み向ひ道ふ彈ずることを休め去れ。
白盡江州司馬頭。　白盡す江州司馬の頭。

【題義】崔七が妓の彈ずる箏を聽いて作つた詩である。

【詩意】顏は花の如く美しく、髮は雲の如く美しき崔七の愛妓が、玉樓に坐して箏を彈けば、聽く者をして忽ち愁を發せしめる。君に賴むが、どうぞもう彈くのを止めてくれぬか。この上彈かれては吾が頭髮が眞白になつてしまふから。

【字解】【一】花臉　美しき顏。雲鬟は美しき髮。
【二】江州司馬　白樂天自ら謂ふ。

望江州

江州を望む

江廻望見雙華表。　江廻りて望み見る雙華表、
知是潯陽西郭門。　知る是れ潯陽西郭の門。
猶去孤舟三四里。　猶孤舟を去ること三四里、

【字解】【一】雙華表　二つの鳥居。華表は我邦の鳥居の如くもので、墓地又は江郭などの入口に立てる。
【二】潯陽　江州なり。今の九江。

水煙沙雨欲黃昏。　水煙沙雨黃昏ならんと欲す。

【題義】舟の上から江州を望見して作つた詩である。

【詩意】江水の流の廻轉する處から望見すると二つの華表が見える。あれは潯陽の西の郭の門である。我が乘れる舟を距ること三四里（一里は我が約六丁にあたる）の先に在つて水上の煙と沙洲の雨とが濛濛として日も將に暮れんとしてゐる。

初到江州

初めて江州に到る

潯陽欲到思無窮。
庾亮樓南湓口東。
樹木凋疎山雨後。
人家低濕水煙中。
菰蔣餧馬行無力。
蘆荻編房臥有風。
遙見朱輪來出郭。

潯陽に到らんと欲して思窮り無し、
庾亮樓南湓口の東。
樹木凋疎なり山雨の後、
人家低濕す水煙の中。
菰蔣の餧馬は行くこと力無く、
蘆荻の編房は臥して風有り。
遙に朱輪の來りて郭を出づるを見れば、

【字解】【一】潯陽　江州。今の江西省九江縣。
【二】庾亮樓　晉の庾亮が江州を鎭せし時建つる所。湓口は湓水の長江に入る處。九江縣の西に在る。
【三】菰蔣　まこも。餧馬は飢ゑた馬。
【四】編房　蘆や荻を編んで作つた部屋。
【五】朱輪　朱塗の車。

相迎勞動使君公。　相迎へて勞動す使君公と。

【題義】初めて江州に到著した時の樣を述べた詩である。

【詩意】庾亮が樓の南、湓口の東なる潯陽に到著せんとして感慨無量である。山雨の後なので、樹の葉が落ちて疎に水煙の深い卑濕の地に人家が竝んでゐる。其前には菰蔣を食ひつつ瘦馬が力なげに行き、蘆や荻で編んだ部屋には隙風が吹込みさうである。遙に朱塗の車が郭を出て來るのを見た。すると大勢の人が相迎へて奔走し刺史樣だとわめいてゐた。

【五】使君公　刺史の稱。

醉後題李馬二妓

醉後李・馬二妓に題す

行搖雲髻花鈿節。
應似霓裳趁管絃。
艷動舞裙渾是火。
愁凝歌黛欲生煙。
有風縱道能廻雪。
無水何由忽吐蓮。

行くゆく雲髻花鈿の節を搖かし、
應に霓裳の管絃を趁ふに似たるべし。
艷に舞裙を動かせば渾て是れ火、
愁へて歌黛を凝せば煙を生ぜんと欲す。
風有れば縱ひ能く雪を廻すと道ふも、
水無くして何に由りてか忽ち蓮を吐く。

【字解】【一】雲髻　雲の如く美しき髮。花鈿は卷十二、長恨歌を見よ。
【二】霓裳　舞曲の名。

疑是兩般心未決。疑ふらくは是れ兩般心未だ決せず、
雨中神女月中仙。雨中の神女か月中の仙か。

【題義】醉後に李・馬の二妓に題し、その艷美を稱した詩である。

【詩意】雲髻花鈿を搖かして歩く姿は、管絃の音に應じて霓裳の曲を舞ふやうで、舞裙の艷紅は火の如く、愁怨する凝黛は煙の如く、その舞ふ樣は風ありて雪を廻すかと思はれ、水なきに蓮花のどうして開くかと疑はれる。雨中の神女か月中の仙女か、どちらとも決しかねる程の美人である。

【三】兩般　兩樣なり。

盧侍御小妓乞詩。座上留贈

盧侍御が小妓詩を乞ふ、座上に留め贈る

鬱金香汗裛歌巾。
山石榴花染舞裙。
好似文君還對酒。
勝於神女不歸雲。
夢中那及覺時見。
宋玉荆王應羨君。

【字解】【一】鬱金香　香草の名。【二】山石榴　やまつつじ。【三】文君　漢の司馬相如の妻卓文君。【四】神女　楚の宋玉の高唐賦に「昔先王嘗て高唐に遊び夢に一婦を見たり、曰く、妾は巫山の女なり、願はくは枕席を薦めんと。因つて之を幸す。去る時辭して曰く、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り、旦には朝雲となり暮には行雨となる」云云と。【五】荆王　楚王。

【題義】盧侍御の小妓が樂天に詩を乞うたので、此詩を座上に留めて贈つたのである。

【詩意】鬱金香草の香の高い汗が衣巾を裛し、紅の山躑躅の花の色をした舞衣をまとひ、卓文君よりも美しき姿で酒に侍し、巫山の神女に勝つて然も雲にならず、實にたとふるに物なき美人である。且夢中に見るは覺むる時見るには及ばない。されば宋玉や楚王も恐らく盧侍御を羨むであらう。

白樂天詩集　卷十六

律詩 五言七言 凡九十六首

東南行一百韻。寄通州元九侍御・澧州李十一舍人・果州崔二十二使君・開州韋大員外・庾三十二補闕・杜十四拾遺・李二十助教員外・竇七校書

東南行一百韻、通州の元九侍御・澧州の李十一舍人・果州の崔二十二使君・開州の韋大員外・庾三十二補闕・杜十四拾遺・李二十助教員外・竇七校書に寄す

南去經三楚。東來過五湖。
南に去つて三楚を經、東に來りて五湖を過ぐ。

山頭看候館。水面問征途。
山頭候館を看、水面征途を問ふ。

地遠窮江界。天低接海隅。
地遠くして江界を窮め、天低れて海隅に接す。

飄零同落葉。浩蕩似乘桴。
飄零落葉に同じく、浩蕩乘桴に似たり。

漸覺鄉原異。深知土俗殊。
漸く覺ゆ鄉原の異るを、深く知る土俗の殊るを。

夷音語嘲嗻。蠻態笑睢盱。
水市通闤闠。煙村混舳艫。
吏徵魚戸稅。人納火田租。
亥日饒鰕蟹。寅年足虎貙。
成人男作卯。事鬼女爲巫。
樓暗攢倡婦。隄喧簇販夫。
夜船論鋪賃。春酒斷瓶沽。
見果皆盧橘。聞禽悉鷓鴣。
山歌猿獨叫。野哭鳥相呼。
嶺徼雲成棧。江郊水當郛。
月移翹柱鶴。風汎颭檣烏。
鼇礙潮無信。蛟驚浪不虞。
鼉鳴江擂鼓。蜃氣海浮圖。
樹裂山魈穴。沙含水弩樞。

夷音語嘲嗻、蠻態笑ふこと睢盱。
水市闤闠に通じ、煙村舳艫を混ず。
吏は魚戸の稅を徵し、人は火田の租を納る。
亥日鰕蟹饒く、寅年虎貙足る。
人と成れば男は卯を作し、鬼に事へて女は巫となる。
樓暗くして倡婦を攢め、隄喧しくして販夫を簇らす。
夜船鋪を論じて賃し、春酒瓶を斷ちて沽ふ。
果を見れば皆盧橘、禽を聞けば悉く鷓鴣。
山歌猿獨り叫び、夜哭烏相呼ぶ。
嶺徼雲棧を成し、江郊水郛に當る。
月移りて柱鶴を翹げ、風汎ひて檣烏を颭かす。
鼇礙げて潮信なく、蛟驚いて浪虞られず。
鼉鳴江鼓を擂り、蜃氣海圖を浮ぶ。
樹は山魈の穴を裂き、沙は水弩の樞を含む。

喘牛犂紫芋。羸馬放青菰。
繡面誰家婢。鵶頭幾歲奴。
泥中采菱芡。燒後拾樵蘇。
鼎膩愁烹鼈。盤腥厭膾鱸。
鍾儀徒戀楚。張翰浪思吳。
氣序涼還熱。光陰旦復晡。
身方逐萍梗。年欲近桑榆。
渭北田園廢。江西歲月徂。
憶歸恒慘澹。懷舊忽踟躕。
自念咸秦客。嘗爲鄒魯儒。
蘊藏經國術。輕棄度關繻。
賦力凌鸚鵡。詞鋒敵轆轤。
戰文重掉鞅。射策一彎弧。
崔杜鞭齊下。元韋轡竝驅。

喘牛犂紫芋を犂き、羸馬青菰に放たる。
繡面誰が家の婢、鵶頭幾歲の奴。
泥中菱芡を采り、燒後樵蘇を拾ふ。
鼎膩愁烹鼈を烹るを愁へ、盤腥厭膾鱸を膾にするを厭ふ。
鍾儀徒に楚を戀ひ、張翰浪に吳を思ふ。
氣序涼還熱、光陰旦復晡。
身は方に萍梗を逐ひ、年は桑榆に近づかんと欲す。
渭北田園廢し、江西歲月徂く。
歸らんことを憶ひて恆に慘澹、舊を懷ひて忽ち踟躕。
自ら念ふ咸秦の客、嘗て鄒魯の儒となる。
蘊藏す國を經する術、輕棄す關を度るの繻。
賦力鸚鵡を凌ぎ、詞鋒轆轤に敵す。
文を戰して重ねて鞅を掉し、策を射て一たび弧を彎く。
崔・杜鞭齊しく下し、元・韋轡竝び驅る。

名聲逼(三八)揚馬。交分過(三九)蕭朱。
世務輕摩(四〇)揣。周行竊覬(四一)覦。
風雲皆會合。雨露各霑濡。
共遇昇(四二)平代。偏慙固陋軀。
承(四三)明連夜直。建禮(四四)拂晨趨。
美服頒(四五)王府。珍羞(四六)降御厨。
議高通白(四七)虎。諫切伏青(四八)蒲。
柏殿行陪宴。花樓走看酺。
神旗張鳥獸。天籟動笙(四九)竽。
戈劍星芒耀。魚龍電(五〇)策駈。
定場排越妓。促坐進吳(五一)歈。
縹緲疑仙樂。嬋娟勝畫圖。
歌鬟低翠(五二)羽。舞汗墮紅珠。
別選閒遊伴。潛招小飲徒。

名聲揚・馬に逼り、交分蕭・朱に過ぐ。
世務輕く摩揣し、周行竊に覬覦す。
風雲皆會合し、雨露各霑濡す。
共に昇平の代に遇ひ、偏へに固陋の軀を慙づ。
承明夜を連ねて直し、建禮晨を拂つて趨る。
美服王府より頒たれ、珍羞御厨を降る。
議高くして白虎に通じ、諫切にして青蒲に伏す。
柏殿行いて宴に陪し、花樓走りて酺を看る。
神旗鳥獸を張り、天籟笙竽を動かす。
戈劍星芒耀き、魚龍電策駈る。
場を定めて越妓を排し、坐を促して吳歈を進む。
縹緲として仙樂かと疑ひ、嬋娟として畫圖に勝る。
歌鬟翠羽を低れ、舞汗紅珠を墮す。
別に閒遊の伴を選び、潛に小飲の徒を招く。

一杯愁已破。三(五三)琖氣彌麤。
軟美仇(五四)家酒。幽閒葛(五五)氏姝。
十(五六)千方得斗。二(五七)八正當壚。
論笑杓(五八)胡硉。談憐鞏(五九)囁嚅。
李酣尤短竇。庾醉更蔫迂。
鞍馬呼教住。骰(六〇)盤(六一)喝遣輸。
長驅波卷白。連擲采(六二)成盧。
骰盤卷白波、莫走鞍馬、皆當時酒令。
籌(六三)併頻逃席。觥(六四)嚴別置盂。
滿巵那可灌。頹(六五)玉不勝扶。
入視中樞(六六)草。歸乘內廐駒。
醉曾衝宰相。驕不揖金(六七)吾。
日近恩雖重。雲高勢却孤。
翻身落霄(六八)漢。失脚倒泥塗。

一杯愁已に破れ、三琖氣愈麤なり。
軟美仇家の酒、幽閒葛氏の姝。
十千方に斗を得、二八正に壚に當る。
論は杓の胡硉を笑ひ、談は鞏の囁嚅を憐む。
李酣にして尤も竇を短り、庾醉うて更に蔫迂。
鞍馬呼んで住まらしめ、骰盤喝して輸さしむ。
長驅、波、白を卷き、連擲、采、盧を成す。
籌併せて頻に席を逃れ、觥嚴にして別に盂を置く。
滿巵那ぞ灌ぐべけん、頹玉扶くるに勝へず。
入りては中樞の草を視、歸るに內廐の駒に乘る。
醉ひては曾て宰相を衝き、驕りては金吾にも揖せず。
日近くして恩重しと雖も、雲高くして勢却つて孤なり。
身を翻して霄漢より落ち、脚を失して泥塗に倒る。

(六九)博望移門籍。(七〇)潯陽佐郡符。
予自太子賓善大夫、出爲江州司馬。

時情變寒暑。世利算錙銖。(七一)
望日辭雙闕。明朝別九衢。(七二)
播遷分郡國。次第出京都。
十年春、微之移佐通州、其年秋、予出佐潯陽、明年冬、杓直出牧澧州、翟二十二出牧果州、韋大出牧開州。

秦嶺馳三驛。商山上二邦。
商山險道中、有東西二邦。

(七四)峴陽亭寂寞。(七五)夏口路崎嶇。
大道全生棘。(七六)中丁盡執殳。
江關未徹警。淮寇尚稽誅。
時淮西未平、路經襄鄂二州界、所見如此。

林對東西寺。山分大小姑。
東林西林寺、在廬山北、大姑小姑、在廬山南、彭蠡湖中。

博望門籍を移し、潯陽郡符に佐たり。

時情寒暑に變じ、世利錙銖を算す。
望日雙闕を辭し、明朝九衢に別る。
播遷郡國を分ち、次第に京都を出づ。

秦嶺三驛を馳せ、商山二邦に上る。

峴陽亭寂寞、夏口路崎嶇。
大道全く棘を生じ、中丁盡く殳を執る。
江關未だ警を徹せず、淮寇尚誅を稽む。

林は東西の寺に對し、山は大小の姑を分つ。

廬峰蓮刻削。湓水帶縈紆。
蓮花峰在廬山北、湓水在江城南、何遜詩云、湓城對湓水、湓水縈如帶。

九派呑青草。(七七)潯陽江九派、南通青草洞庭湖。
孤城覆綠蕪。(七八)南方城壁、多以蒲覆。
黃昏鐘寂寂。清曉角(七九)嗚嗚。
春色辭門柳。秋聲到井梧。
殘芳悲鵑鴂。(八〇)暮節感茱萸。
晉啼決、見楚詞。

惣拆金英菊。花飄雪片蘆。
波紅日斜沒。沙白月平鋪。
幾見林抽筍。頻驚燕引雛。
歲華何倏忽。年少不須臾。
眇默思千古。蒼茫想八區。
孔窮緣底事。顏夭有何辜。

廬峰、蓮、刻削し、湓水、帶、縈紆す。

九派青草を呑み、
孤城綠蕪を覆ふ。
黃昏鐘寂寂、清曉角嗚嗚。
春色門柳を辭し、秋聲井梧に到る。
殘芳鵑鴂を悲ましめ、暮節茱萸を感せしむ。

惣は拆く金英の菊、花は飄す雪片の蘆。
波紅にして日斜に沒し、沙白くして月平かに鋪く。
幾か見る林の筍を抽んづるを、頻に驚く燕の雛を引くに。
歲華何ぞ倏忽、年少須臾ならず。
眇默して千古を思ひ、蒼茫として八區を想ふ。
孔の窮するは底事にか緣り、顏の夭するは何の辜かある。

龍智猶經醢。龜靈未免刳。
窮通應已定。聖哲不能踰。
況我身謀拙。逢他厄運拘。
漂流隨大海。錘鍛任洪爐。
險阻嘗之矣。栖遲命也夫。
沈冥消意氣。窮餓耗肌膚。
防瘴和殘藥。迎寒補舊襦。
書牀鳴蟋蟀。琴匣網蜘蛛。
貧室如懸磬。端憂劇守株。
時遭人指點。數被鬼揶揄。
兀兀都疑夢。昏昏半似愚。
女驚朝不起。妻怪夜長吁。
萬里拋朋侶。三年隔友于。
自然悲聚散。不是恨榮枯。
去夏微之瘧。今春席八殂。
天涯書達否。泉下哭知無。

去年聞二元九瘴瘧一書去竟未報、今春聞二席八殁一、久與還往、能無慟乎。

謾寫詩盈卷。空盛酒滿壺。
只添新悵望。豈復舊歡娛。
壯志因愁減。衰容與病俱。
相逢應不識。滿頷白髭鬚。

【字解】【一】三楚　漢書註に「もと江陵を名づけて南楚となし、吳を東楚となし、彭城を西楚となす」とある。【二】五湖　異說多し。文選註には、洞庭・彭蠡・震澤・巢湖・鑑湖となす。【三】候館　四方を觀望する館。【四】征途　行先の道。【五】浩蕩　廣大な貌。【六】嘲嗻　鳥の囀る聲。【七】雎盱　質朴なる貌。【八】水市　水上の市場。闤闠は市街。【九】火田　火を以て草木を燒いて耕作する田地。【一〇】亥日　卷十五、得三微之到一官後書、備知二通州之事一悵然有感、因成二四章一を見よ。【一一】丱　束髮兩角の貌。【一二】販夫　商人。【一三】盧橘　果の名。【一四】鷓鴣　鳥の名。【一五】嶺徼　山上の城塞。【一六】鄂　郭なり。【一七】蜃氣樓。【一八】山魈　南唐記に、山間に木客あり、形骸皆人なり、ただ鳥爪のみ、高樹に棲くふ。木を伐れば必ず人を害す。【一九】水弩　蟲の名、水中に在り沙を含んで人を射る。【二〇】繡面　面にいれずみすること。【二一】鵁頭　鴉鬟に同じ、姨女の稱。【二二】樵蘇　薪を取るを樵といひ、草を取るを蘇といふ。【二三】鼎膩　鼎のあぶらぎること。【二四】盤腥　皿のなまぐさきこと。【二五】鍾儀　春秋時代の楚人なり。鄭之を獲て晉に獻ず。晉の景公重く禮して歸らしむ。左傳に見ゆ。【二六】張翰　晉の吳の人、洛陽に在り、秋風の起るに因りて、吳中の菰菜・蓴羹・鱸魚膾を思ひ、遂に駕を命じて歸る。【二七】葬梗　行路の定めなきに喩ふ。【二八】桑榆